

ハイスクールD×D 死を宿した人外

ゼルトナー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは”人の枠から外れた”男が世界最強の龍と青髪に緑のメツシユが入った女性との出会いから始まる出会いの物語。

初投稿です。至らない点もあるでしょうが、読んでいただけると、ありがたいです。

目次

旧校舎のディアボロス

Life. 0	プロローグ	1
Life. 1	いぎ、オカルト研究部へ！	13
Life. 2	後輩が悪魔になるようです	20
Life. 3	友人のいる日常	27
Life. 4	未来の選択	36
Life. 5	堕天使の愚行	45
Life. 6	堕天使を足止めしよう	54
Life. 7	お前らは犬の餌だ	64
Life. 8	堕天使のいる日常	73
Life. 9	堕天使の幸せ	82
Life. 10	『禍の団』の集まり①	92
Life. 10	『禍の団』の集まり②	98
Life. 10	『禍の団』の集まり③	107
Life. 11	ハースの秘密	116
月光校庭のエクスカリバー		
Life. 12	動きだすモノ	125
Life. 13	顔合わせ	131

旧校舎のディアボロス Life・0 プロローグ

彼女との出会いは偶然だった。

その日俺は、ある人物からはぐれ悪魔を討伐してほしいという依頼を受けていた。

はぐれ悪魔とは、簡単に言うとな主のもとを去って各地で暴れまわっている悪魔の事だ。

そのはぐれ悪魔は単体である国の古びた工場に潜伏しているというので、俺は早速その工場に向かった。

工場に着くとそこは人が寄り付かないであろう不気味な雰囲気漂わせ、辺り一面には草木が生い茂げり、今にも崩壊しそうな工場があり、隠れ蓑には最適な場所だった。

工場の中に入るとそこは数多くの機材が散らばり、鼻を押さえたくなるような酷い悪臭がしていた。その臭いの中には鉄の錆びついた臭いやオイルの臭いだけでなく、腐った人の血と肉の臭いも混ざっていた。

その臭いをかぎ分けた瞬間、俺は手を横に伸ばし何も無いところから空間を開き、西洋剣を取り出した。すると、奥の方から何かが近づくと足音が聞こえ始めた。それはゆっくりとだが、確実にこちらに近づいていた。

そしてようやく足音の主がその全貌を現した。高さは3メートルは優に越えている巨体でその姿は人狼と呼ばれる者だった。そいつは俺のことは見ると静かに口を開いた。

『誰だ？最近この俺を殺しに来た悪魔どもとは違うようだが、なにもんテメエ一体何者だ』

そう、本来こいつらはぐれ悪魔は付近の悪魔や天使、墮天使が討伐することになっているが、そいつらでは手に負えないほどの強さを誇るはぐれ悪魔が極稀に存在している。こいつもその極稀に存在するはぐれ悪魔でその強さ故に付近の悪魔達では討伐できず、俺のような

のを雇う時がある。

『俺はお前のようなはぐれ悪魔を専門に討伐しているしがない賞金稼ぎだ。SS級はぐれ悪魔アーベル、お前の首にはそれなりの賞金が懸かっているんでね、狩らせてもらおうぞ』

そう言うことやつ、アーベルはつまらなそうにため息をした後、纏っていた雰囲気が打って変わり、姿勢を低くして殺気の込もった瞳で俺を睨んできた。

『そうか。つまりテメエは俺を殺しに来た敵って事でいいんだよなっ!!』

するとアーベルは神速とも呼べる速さで迫り、俺を通り越し背後に立っていた。

『ぎゃはははっ!!まずは左腕もらったぞ!!』

ゆっくりとアーベルの方に振り向くと奴の右手の爪から血が滴り落ちていた。俺は感覚が感じられなくなった左腕を見てみるとそこから血が溢れ、床に血の水溜まりが出来、アーベルによって切り落とされた左腕が落ちていた。

『ぎゃはっ!ほらどうした?速くしないと血が足りなくなって死ぬぜ?』

確かにこのままにしておいたら出血多量で死ぬかもしれない。だが、それはただの人間だったらの話だ。

『まさか、左腕を切り落とした程度で勝ったつもりになってるんじゃないよな、アーベル?だとしたらお笑い草だぞ』

『・・・なに?』

正直に思った事を言ったら奴は額に青筋を立てた。

『左腕が無くなったただけで勝敗が決まる訳がないだろ?俺にはまだこの右腕が残っているんだぞ』

アーベルに黒いブレスレットが着いた右手を見せた。するとアーベルは呆れたのかため息をついた。

『馬鹿かテメエは?ただの人間が、左腕を無くして、さらにはその出血の量だ。どんなに足掻いてもテメエが死ぬのは時間の問題だ。そんな状態でどうやって俺に勝つつもりだ?』

この時、俺は呆れてしまった。奴はなんて言った？ただの人間と言ったのか？

『アーベル、ひとつ勘違いしているようだからはっきり言っておこう。俺はただの人間なんかじゃない』

奴は疑問に思った素振りを見せ、一体どういうことだ、と言おうとしたが、途中で話すことが出来なくなった。何故なら奴の四肢が突然切り落とされたからだ。

『ガアアアアアアア!!?』

突然の出来事に奴は悲鳴をあげた。何故こんなことが起きたのか理解できていない様だが、元凶が俺にあると考えたのか俺を睨んできた。

『テメエ、一体何をしやがった!!』

『何を、と言われてもただ四肢を斬っただけだぞ?』

血が一滴も付いていない西洋剣を振り回しながら疑問に答えてやると、奴は怒りの形相を表した。

『俺が聞きたいのはそんなことじゃねえ!!テメエ、いつの間に俺のことを斬ったんだ!』

いつ斬ったのか、と言われたらひとつしかないだろう。

『そんなの、お前が俺の左腕を切り落とした時に決まっているだろう?何を当たり前の事を聞いてくるんだ』

そう言うとな奴は驚愕していた。

『ありえねえ。あの一瞬でそんなことができるはずねえ!この俺ですらできないんだぞ!』

『なら、お前の実力はその程度ということだ。俺はお前よりも遥かに強い方々に育て上げられたんでな、お前みたいな雑魚なら片手でも殺すことができるぞ?』

『ツ!!化け物めツ!!』

化け物・・・か。もう聞きなれた言葉になってしまったな。まあ、確かにSS級はぐれ悪魔を雑魚呼ばわりするんだ。化け物と言われても仕方ないな。

そんなことを考えている間に俺はゆっくりと奴に近付きながら、西

洋剣を空間の中に戻し、右手首に着けていた黒いブレスレットを口を使い外した。

『おい、何をしてやがっ!?!』

奴が俺の最後に行っている行動に疑問を抱いたのか何かを言おうとしていたが、急に話すのを止め、俺を青ざめた表情で見ていた。

『な、何なんだよ?て、テメエのその身体を覆っているそれは何なんだよ!?!』

俺からすると何を纏っているかわからないが、父さん達が言うには黒くて禍々しいオーラを纏っているらしい。

『ああ、これか?見てればわかる』

そう言っただけは切り落とした奴の右腕を拾いに行き、その右手を拾い上げた。すると拾った右腕に変化が起きた。

『なっ!?!』

奴が驚くのも無理はない。なんとたつて奴の右腕が黒く染まり始めたんだからな。右腕が完全に黒く染まりきると端から崩れていった。その後俺は、他にも切り落とした左腕や両足をさつきと同じ様に拾い上げては黒く染めて崩していった。

こんなことをしているのは、悪魔の中には魔力で切り落とした腕を使い、不意討ちをしてくる輩もいるからだ。

奴の四肢を使い物にならない様にした俺は、奴の居る方に振り返った。すると奴は小さく情けない悲鳴をした。一步、また一步と近づいてつれて奴は徐々に恐怖に顔を染めていき、小さな声で来るな、来るなと言いつづけた。

そして奴の目の前まで来た俺は、右手で奴の首を強く握りしめた。すると奴の身体は黒く染まり始め、自身の身体が黒く染まり始めたという気が付くと最後の足掻きのつもりなのか奴は激しく暴れ始めた。だがそれは無駄な足掻きでしかない。四肢の無い身体ではどんなに暴れても、それはただ見苦しいだけだ。

『見苦しいぞ、アーベル。さつきと自分の運命を受け入れろ』

そう言っただけは奴は恐怖に顔を歪めながら、少しづつ暴れるのを止め、そのまま黒く染まりきり、身体が崩れていった。

奴の討伐を確認した俺はブレスレットを右手に着け、依頼主に討伐の報告をした。報酬は指定された場所に送ってくれる手配になった。

ここまでは、いつも通りだった。

報告が終わった後、不意に後ろから微かな殺気を感じた俺は前に飛んだ。するとさつきまで俺のいたところに巨大なクレーターができ、その中心には白いマントを羽織い、両手には聖なるオーラを纏っている長剣を持った青髪に緑のメッシュが入った黒いボンテージ服を着た女性がいた。

この時、俺と彼女の目が一瞬だけ合った。その瞬間、俺の鼓動が大きく高鳴った。生まれて初めてだった。この時の気持ちは何だったのかその時は理解ができなかった。

そして俺はこの時あり得ない行動をした。

『……お前の名前は何て言うんだ？』

この時なんで名前を聞きたくなつたのか解らなかった。

『……私の名前が知りたいのか？』

彼女は俺を警戒しながらそう聞いてきた。

『そうだ』

無意識のうちに即答してしまったせいかわ彼女は少し驚いた様子をしていった。

『そ、そうか。私の名前は……』

ジリリリリリリッ!!

けたたましく鳴る目覚まし時計の音に俺、ハース・ベスタードは一気に目が覚めた。……懐かしい夢を見たな。彼女と初めて出会った日の夢か。

そういえば、あの後彼女の名前を聞こうとしたんだが、工場が倒壊し始めてしまい、名前を聞きそびれてしまった。原因はある程度予想

がつく。今にも崩れそうな工場に巨大なクレーターが見事なまでにできたんだ、その威力に今にも崩落しそうだった工場が耐えられるはずがないからな。それが原因だろう。

まあ、そんなことがあったせいで彼女の名前を聞くことができなかった。次に会うときは、絶対に名前を聞こう。

「しかし、どうして夢であの日のことをあんな鮮明に思い出したんだ？」

どうしてあんなに細かな出来事を夢で見たんだ？・・・まあ、今そんなことを考えても仕方がない。

「とりあえず、腹も減ってきたことだし飯でも食うか」

そう言った俺は2階にある自分の部屋から出て一階のリビングに向かった。

リビングに着くとそこには、金髪のショートヘアに黒が強調されたメイド服を着た小柄な女性がいた。

「おはようございます、ハース」

挨拶をしてきた彼女の名前はエレナ・ルタス、昔は悪魔の存在を知らなかった普通の一般人だったが、はぐれ悪魔に襲われ、その時に初めて悪魔の存在を知ってしまった女性だ。その際にエレナの家族は全員殺され、エレナが殺されそうになっていたところを俺と父さん達が見つけたので助けた。

それ以来、エレナは俺に恩返しをしたいというのと、悪魔などの異形の存在との戦い方を教えてほしいと頼んで来たので、普段は主に俺の家で家事をしてもらいつつ、同じ学園に通い、空いている時間に異形などの戦い方を教えている。

そういったこともあり、今彼女は俺の家で暮らしてもらっている。

他にもエレナはセイクリッド・ギア神器を宿している。セイクリッド・ギア神器の名は

トワイライト・ヒーリング『聖母の微笑』。かなりレアな神器だ。エレナには以前、はぐれ悪魔を討伐した時に切り落とされた左腕を付け治してもらっている。近いうちに礼をするつもりだ。

ちなみにエレナが家にいる時にメイド服を着ているのは、雰囲気作りの為らしい。

「おはよう、エレナ。今日はどうする予定だ？せっかくの祝日だし、この間の礼もしたいから一緒にどこか出かけないか？」

今日は祝日というのもあり、少し遠出して買い物に行こうと考えているのでエレナを誘ってみた。

「折角誘ってもらったのに申し訳ありませんが、今日は神セイクリッド・ギア器と魔法の特訓をする予定です」

もう予定が決まっていたか。ならしようながない、また今度誘ってみるか。

「そうか、それは残念だ。何か買ってきてほしい物はあるか？」

「いいえ、特に買ってきてほしい物はありません」

「・・・分かった。それと俺が居なくても特訓は大丈夫か？」

最近のエレナは神セイクリッド・ギア器の方をメインに特訓する様になっている。俺が主に教えているのは魔法の使い方だからな。神セイクリッド・ギア器については的確なアドバイスをすることができない。はつきり言ってお手上げだ。

「はい、今日は特に神器の特訓をしようと思っておりますので問題ありません」

それを確認した俺はエレナが作った朝食を食べ、その後、食器をキッチンに持って行き、そのまま自室に戻り出掛ける準備をした。

準備を終えた俺はエレナに行つてくると伝えにリビングに再び寄って行った。

「行つてくるぞ、エレナ。・・・ああ、それとあいつらはどうしている？」

一応出掛ける前に俺の家に住んでいる、他の奴等について聞いてみた。

「他の人達ならまだ自室にて寝ています。起きるのは夕方頃になると思いますよ」

まだ寝ているのか。まあ、今日は祝日だしまだ寝かしていても良いか。

「そうか。今日は、帰りが遅くなるかもしれないからな、俺が帰って来るまでには起こしておいてやれ。」

「承りました。帰り道には気を付けてください」
母親みたいなことを言うなど、思いながら俺は、家を後にした。

家を後にしてから数時間が経ち、俺は今コンビニで雑誌を読んでいた。読みたかった雑誌を読んでいるとふと目に知り合いが知らない女性と一緒に歩いているのを見つけた。

知り合いの名前は兵藤一誠、俺と同じ学園に通っている後輩で学園では悪い意味で有名だ。最近の噂だとたしか兵藤に彼女が出来たとかで学園内ではかなり話題になったな。

そんな噂が広まってからしばらくすると兵藤からあることを相談されたな。相談の内容は女性が喜ぶデートスポットについてだったな。なんで兵藤にそんなことを相談されたのか、わからなかったが、とりあえず無難な所をいくつか教えてやったな。

ということとは、兵藤の隣にいる女性が噂に聞く彼女で今はデートの途中なんだと思う。

この後の予定は特に無いし、兵藤のあとを尾行するか。兵藤の彼女、あいつは人間の気配なんかじゃなくて、墮天使の気配がする。

万が一の事を考えて兵藤達にはばれない様に尾行をするとうるか。

尾行を始めてからしばらくすると辺りは日が暮れてきた。兵藤達は人気のない町外れにある公園に入った。俺は二人の死角にある草むらに身を隠した。すると人払いの結界が発動され、噴水の前に立った兵藤達は何かを話し合っていた。

何を話しているのか気になるな、聴力が一時的に上がる魔法を発動

して盗み聞きするか。

「今日は楽しかったね」

へえ、兵藤もそれなりに計画を練ったのかな。まあ、あいつは彼女が出来たら本気でその想いに答えようとするだろうな。

「ねえ、イツセーくん」

「なんだい、夕麻ちゃん」

「私たちの記念すべき初デートってことで、ひとつ、私のお願い聞いてくれる？」

さて、今のうちに俺が兵藤を助けたと堕天使にばれない様に準備をしよう。後々困るからな。

そうして俺は、空間魔法を使い、裾と袖がぼろぼろになっている黒のロングコートと黒のズボンに服を入れ換え、ロングコートに付いているフードを深く被り、顔には骸骨の仮面を被った。

・・・久し振りにこの服を着るな。あの日の夜以来か。

俺が服を着替え終わったのと同時に彼女は兵藤に向かって微笑みながら、はつきりと言っていた。

「死んでくれないかな」

ああ、やっぱりか、くそ！

兵藤は彼女の言っていることを理解できていないのか彼女に何て言ったのか聞き返していた。

「死んでくれないかな」

さつきと同じことを彼女は言い、兵藤が苦笑いしていると、彼女は背中から黒い翼を生やした。

鴉と同じ黒い翼、やはり彼女は堕天使だったか。だが変だな。堕天使は人間を襲うことはないはずだぞ。襲ったとしても、その人間が危険だと判断した時か、セイクリッド・ギア神器を宿しているときだけだぞ。

前者はあり得ない、後者だとしたら普通は保護したりするはずだぞ。なんであんなに殺気を放っているんだ。

そんなことを考えていると、彼女は光りの槍を手に握っていた。

それを見た瞬間俺は、二人の間に割って入った。突然の乱入者に二人は驚いていた。

「あら、確か人払いの結界を張ったはずだけど、どうやって紛れ込んだのかしら？まあ、同じ人間みたいだし別に殺しても問題無さそうね」
そう言うとな彼女は俺に向かって光りの槍を投げてきたが、俺はその槍を魔法を纏った蹴りで彼女にお返しした。

すると、彼女は一瞬驚愕していたが、槍が自分に向かって跳ね返されたのに気付くと、すんでのところで槍を回避し、俺のことを睨んできた。

「あなた一体何者かしら？私の槍を蹴り飛ばすなんて唯の人間ではないわね」

「ああ、確かに唯の人間じゃないな」

「そう、だったら貴方、私達に協力しなさい。私達に協力したらそれなりに良いものをあげるわよ？」

へえ、それなりにか。だがそんなんじゃないし、俺は釣れないし、協力するつもりもない。

「生憎、人間を殺そうとした奴に協力するつもりはないな」

「そう、ならここで死になさい」

そう言うとな彼女は再び光りの槍を作って俺に投げようとするが、突然兵藤の近くに魔方阵が展開された。

あの魔方阵の紋章、この町にいるグレモリー家の紋章か。良いタイミングで来たな。

「どうやら、邪魔が入ったらしいな。さっさと退散するのが賢明じゃないか？」

そう言うとな彼女は悔しそうな顔を見ると、槍を下げて空に飛んだ。

「今日の所は邪魔が入ったから見逃してあげるけど、次に会ったら殺してあげるから」

「おう、せめて俺を楽しませてくれる程度には襲うんだな」

そして彼女は足下に魔方阵を展開してこの場を去って行った。さて、兵藤は無事かな？

「おい、どこかに怪我はないか？」

「は、はい！俺は大丈夫です！助けてくれてありがとうございます!!」
「ああ、気にするな。あんな奴に襲われた人を助けるのは当たり前前

事だ」

すると、兵藤の近くに展開された魔方陣がより一層光り輝いた。するとそこには、鮮やかな紅髪にスタイル抜群な美女、リアス・グレモリーが立っていた。

リアスは辺りを見渡した後、何かを理解したのか俺達に向き直った。

「ここに堕天使の気配がして来たのだけれど、どうなったのか説明して貰えるかしら？」

兵藤は、何でいきなり魔方陣からリアスが現れたのか理解できていないのと、堕天使に襲われたショックのせいで気を失った。ここはとりあえず兵藤が起きていなきや意味がないからな。説明はまた後日にしてもらおう。

「説明したいのは山々なんだが、堕天使に襲われた本人がこんな状態だと説明しても意味がないからな。説明はまた後日でいいか？」

そう言うとな彼女は兵藤のことを見ると納得してくれたのか小さく頷いてくれた。

「分かったわ。この事についてはまた後日、使いを出すから、そのときに話すとしましょう。彼は私在家まで送っていくわ」

「そうか。すまないな、助かる。じゃあ、俺は帰るぞ」

時間も時間だしそろそろ帰らないとエレナが心配するからな、さっさと帰るか。

俺が帰ろうとすると、リアスに呼び止められた。もう話すことは話したはずだが、何かあるのか？

「聞き忘れてたのだけれど、貴方・・・誰？」

凄く大切なことを言っていないじゃないか。今の服の俺と会うのはリアスにとっては初めてだったな。

とりあえず俺は仮面とフードを外して、リアスに同じクラスのハース・ベスタードだということを話した。するとリアスはどこか納得したような素振りをしていた。

その後、俺のことについて話したら、使いは出さず、リアスと一緒に行動してほしいということで公園を後にした。

ちなみに、家に帰ったらエレナが俺のことを心配していたのか玄関で俺が帰ってくるのを待っていて、俺の姿が見えるとすぐ胸に飛び込んで来て上目遣いをしてきた。この時、エレナが可愛いと思ってしまった俺は悪くないと思う。

Life. 1 いざ、オカルト研究部へ！

兵藤が墮天使に襲われてから、数日が経ったある日のこと、俺はいつもの様にエレナと他愛ない話をしながら一緒に駒王学園に登校していた。だが、今日はいつもと違うことが起きた。それは、俺とエレナがそれぞれの教室に向かい、俺が自分の教室に着いたときだった。教室に着いて、自分の席に座ると、リアスに声を掛けられた。そんなリアスの隣には、黒髪のポニーテールに大和撫子として有名な姫島朱乃がいた。

おいおい、一人の生徒の前に『二大お姉さま』とまで称される二人が同時に居て良いのか？ いや、駄目だろう。何たって、二人が俺の前に来た瞬間、周りの視線が一気に俺に向けられているんだぞ!？」

「ハース、今日の放課後は時間空いているかしら？」

リアスはまるで周りの視線何か気にしていないようだ。朱乃も同様に視線が気にならないのかここに來てからも笑顔を絶やしていない。

と、とりあえず落ち着こう、俺。リアスの話の流れからして先日の兵藤が墮天使に襲われた件についてだろうな。

「ああ、時間なら空いてるぞ。先日の件についてか？」

リアスが小さく頷いた。

「そうよ。今日はイツセーも來れる様に祐斗を使いに出しているわ」

祐斗、おそらく木場祐斗のことだろうな。成る程、あいつもこちら側か。リアスが親しそうに名前を呼んだということは、リアスの眷属かな。

「分かった。それとリアス、頼みたい事があるんだがいいか？」

「あら？ 一体何かしら」

おい、待て。なんで俺がリアスと名前を呼んだだけで周りの奴等が騒がしくなったんだ？ まずい、早くこの話題を終わらせてこの二人と離れないと精神が耐えられない。

「木場を兵藤のクラスに送るんだったら、一緒にエレナ・ルタスと言う

女子も連れて来てくれないか？彼女は俺の仲間の一人だ。こちら側のことを知っているから、事情を話しておいた方が良さそう」

エレナにはまだ兵藤のことを話していないからな。良いタイミングだし話しておいた方が良さそう。

「そう、彼女もこちら側なのね、分かったわ。祐斗に彼女も連れて来てもらおうようにするわ」

話が早くて助かるな。っと、やっとチャイムが鳴ったか。これでこの話題を終わらせられる。後少しだけ耐えてくれ、俺の精神！

「助かるよ。チャイムも鳴ったことだし、また放課後になったら話し合おう」

「ええ、そうしましょう」

話し合いが終わると、リアスと朱乃は自分の席に戻って行った。

た、助かった。流石にクラスの視線がほとんど俺に集中していたのは辛かった。後は、放課後になれば人目を気にせず話し合いができる。

そんなこともあり、放課後になるまでは特に何も起きず、時間が過ぎていった。

放課後になると、早速リアスと朱乃が俺の元に来た。

「さて、それじゃあ、話し合いの場所まで案内するから、私達に付いて来て頂戴」

リアス達の後に付いて行き、向かった場所は、旧校舎と呼ばれるところだ。旧校舎は木造で昔は使われていた様な雰囲気を漂わせている。周りは、木々に囲まれており、肝試しをするんだったら最適な場所とも言えるだろうな。

そのままリアス達の後を追ひ、旧校舎の中に入り、しばらく歩いて

いると、リアス達がある部屋の前で止まった。

部屋の戸に掛けられているプレートを見ると、部屋の名前が書かれていた。部屋の名前は、『オカルト研究部』と言うらしい。

成る程、ここが噂に聞くオカルト研究部か。確かここに入部できる人は限られていて、学園内でも特に人気のある生徒しか入れていないことで有名だな。

この部の噂を思い出していると、リアスが部屋の戸を開け、部屋に入り、続いて朱乃が部屋に入って行った。俺は朱乃の後に続いて部屋に入った。

部屋の中に入ってみると、至るところに読み慣れない文字が書き込まれており、部屋の中心には、この部屋の大半を占めている巨大な魔方陣が記されている。他にも、ソファアがいくつかあり、机も複数置かれている。

この部屋に一般の生徒が偶然入ってきたら、まさにオカルト研究部らしいと思うか、不気味だと思って逃げるかのどちらかだろうな。

「あら、小猫、もう来ていたの?」

リアスが声を掛けた方を見ると、ソファアに一人の少女が座っており、黙々と羊羹を食べている。

小柄な体に白い髪、そして、いつも無表情で有名なこの駒王学園のマスコットキャラの塔城小猫だ。初めて彼女を見たときは、小学生みたいだと思った。まあ、実際は背が高校生にしては低いだけなんだけどな。

「小猫、彼は私のクラスメイトのハース・ベスタードよ」

リアスが俺のことを塔城に紹介してくれた。塔城と視線が合うと、俺が先に挨拶をする。

「リアスが紹介してくれたが、一応挨拶しておこう。俺の名前はハース、ハース・ベスタードだ。ハースって呼んでくれ。以後よろしく」俺が挨拶をすると、小猫が羊羹を食べていた手を止めて、ソファアから立ち上がった。

「・・・年生。・・・塔城小猫です。・・・よろしくお願いします。ハース先輩。・・・小猫と呼んでください」

頭を小さく下げてから挨拶をすると小猫はまたソファアに座り、羊羹を食べ始めた。挨拶をしている時に間が多かったけど、礼儀正しいじゃないか。

「あら、小猫が初見の人に、ああして挨拶をするなんて珍しいわね。そう思わない、朱乃?」

「うふふ、そうですわね。部長」

リアスと朱乃が小猫が挨拶したことについて意外だと言わんばかりに驚いてはいるが、どこか嬉しそうに話している。

そんなリアス達の様子を見ると、俺の隣に小猫がやって来た。

「・・・ハース先輩。・・・立っていないで一緒に羊羹食べませんか?」

小猫が俺のことを見上げながら、訪ねてきた。初見の人相手にこんなに友好的に接してくれるなんて嬉しいな。

「そうだな。折角のお誘いだし、いただくとするか。良いよな、リアス?」

リアスに訪ねると、彼女は小さく頷いた。

「ええ、もちろんよ。むしろ、そうして頂戴」

そう言うと、リアスは部屋の奥に行った。部屋の中に入ると、彼女はシャワーカーテンをした。

「・・・え? いや、待て。なんでこの教室にシャワーの付いた部屋があるんだ!?! おかしいだろ!?! 普通は別の教室とかにあるもんだろ!?! と言うより、なんで今シャワー浴びるの!?! 後からでもやれるじゃん!」

俺が困惑していると、朱乃が近づいて来て、耳打ちをしてきた。

「リアスは時々ですけれど、放課後になるとシャワーを浴びる時があるので、気にしなくていいですよ」

な、成る程。それならしょうがないな。リアスがシャワーをしている間はなるべく振り向かないでおこう。

そんなことを考えていると、朱乃がリアスの元に向かい、リアスが先程まで着ていたと思われる制服を受け取っていた。とりあえず俺は、彼女から視線を外して、小猫に分けてもらった羊羹を食べることにした。

・・・美味しい。口の中で小豆の絶妙な甘さが濃厚に広がり、羊羹を

噛む度に脳を刺激してくる。こんなに美味しい羊羹は初めてだ。この羊羹が、どこで売っているのか後で小猫に絶対聞こう。

羊羹の美味しさを楽しんでいると、「部長、連れてきました」と言う声が戸の外から聞こえた。すると、リアスがシャワー室から木場達に入るようなに促した。

リアスがそう促すと、戸が開き、木場が教室に入ってきた。木場の後について兵藤とエレナが部屋に入ってきた。

兵藤達は、各々違う反応をしている。エレナはやはりこのような部屋には慣れているのか、驚いた様子はしていない。それに対して兵藤の場合は、ひどく驚いていて、教室の中を物珍しげに見ている。まあ、この間まで唯の一般人だったんだから仕方ないな。

兵藤達の様子を見てみると、俺と兵藤の目が合い、兵藤がさつきよりも驚いていた。

「ハ、ハース先輩!?なんでハース先輩もここにいるんですか!?!」

俺も、と言うことはエレナが木場に誘われた時にも驚いたんだろうな。

「ああ。それは、俺もあの時、兵藤が襲われた現場に居たからだ。エレナが居るのも、俺がリアスに頼んでエレナを連れて来るように頼んだからだ」

「ハース先輩があの場合にいた!?!」

兵藤が他にも聞きたいことがあるのか、俺の元に来て気になることをどんどん聞いてくる。とりあえず落ち着かせよう。

「兵藤、俺から聞きたいことがあるかもしれないが、後で話すつもりだからしばらく待ってろ」

兵藤にそう言うが、やはり俺がここに居ると、兵藤が襲われた現場にも居たという疑問を抱いているのか、中々言うことを聞いてくれない。

そんな兵藤を落ち着かせようと、木場が間に入ってきてくれた。

「兵藤くん、落ち着いて。ハース先輩がここに居るのに疑問を持っているのは君だけじゃないから。それにハース先輩も困っているみたいだし、落ち着いて」

木場が兵藤を宥めると、正気を取り戻してきたのか兵藤は深呼吸をし始めた。ありがとう、木場。助かったよ。

やっと落ち着きを取り戻した兵藤は、部屋の中を見回していた。すると、兵藤は小猫がソファに座っているのに気がつき、兵藤と小猫の視線が合った。

「こちら、兵藤一誠くん」

木場が兵藤のことを小猫に紹介すると、小猫は頭を小さく下げて、兵藤も同じ様に頭を下げた。それを確認した小猫は羊羹をまた食べ始めた。

あれ、小猫？挨拶はそれだけ？さっきの俺とは全く違う挨拶だね。

兵藤の反応が気になり見てみると、兵藤は部屋の奥にあるシャワー室に目が行っていた。

おい、兵藤。お前、なんていやらしい顔をしているんだ。さっきまでの落ち着きの無さが嘘みたいじゃないか。兵藤はかなりスケベだとは聞いていたが、予想以上だな。

兵藤の変わりように呆れていると、シャワーの音が止まった。

「部長、これを」

「ありがとう、朱乃」

部屋の奥では、おそらく朱乃がリアスにタオルと制服を渡しているんだろうな。

「・・・いやらしい顔」

小猫が呟いた。小猫、君も俺と同じことを考えていたんだね。

「顔は良い方なのに、変態すぎるせいで女子に嫌われるのは当たり前前です」

俺の隣には、兵藤の視線が部屋の奥に行っている間に来たエレナが居て、兵藤に対して思っていたことを呟いていた。

シャワーカーテンが開くと、紅い長髪がまだ少し濡れているが、制服を着たりアスと彼女に付き添っている朱乃も出てきた。

兵藤と朱乃の視線が合うと、朱乃の方から挨拶をした。

「あらあら。はじめまして、私、姫島朱乃と申します。どうぞ、以後、お見知りおきを」

朱乃が兵藤に挨拶をすると、兵藤は緊張しながら、朱乃に挨拶をしている。

そんな中、突然、隣にいるエレナが俺に話し掛けてきた。

「ハース、聞くのが遅くなりましたが、突然私を呼び出してどうしたんですか？木場が私も呼んだときは大変でしたよ。特に女子からの嫉妬のような視線は」

「その事についてはすまないと思っっている。だが、呼んだことについてはこれから説明されるから待っていてくれ」

そう言うと、彼女は溜め息をついた。

「はあ、わかりました。ですが、こういうことはもっと早く教えてください」「はい」

むう、今回のことについては俺が悪いな。後で食べた羊羹のことを教えよう。

エレナに羊羹のことを教えようと考えていると、リアスがわざと咳払いをした。そろそろ話を始めるつもりなんだろう。エレナとの話は後でしよう。

「これで全員揃ったわね。兵藤一誠くん。いえ、イツセー」

「は、はい！」

「なんで私があなただを呼んだか理解はしているかしら？」

「えっと、祝日に起きたことですか？」

なんでリアスに呼ばれたのか把握はしているみたいだな。

「そう。その日に起きたことについてこれから話していくわ」

そうして、俺たちは兵藤の身に起きたことを話し始めた。

Life. 2 後輩が悪魔になるようです

リアスが話を始める前に、朱乃が兵藤にお茶を渡していた。それから、俺とエレナにもお茶を渡してくれた。俺はもらったお茶を味わう程度に飲んでみた。

「美味しいな、このお茶」

俺が言うと、兵藤とエレナも同じ様な感想を言っていた。

「あらあら。ありがとうございます」

自分の淹れたお茶が美味しいと言われてたのか、朱乃が嬉しそうに笑っていた。

お茶を飲み終えた俺は、ソファーから立ち上がり、エレナに座るよう促した。最初は遠慮していたが、俺がエレナが来る前からソファーに座って寛いでいたことを話すと、エレナは感謝の言葉を言ってからソファーに座った。

俺はエレナにソファーを譲った後、部屋の壁に背中を預けてリアス達の話聞くことにした。

「単刀直入言うわ。私達は悪魔なの」

おい、リアス。いくらなんでも単刀直入すぎるだろ。そのせいで兵藤の顔が信じられないって言っているぞ。

「信じられないって顔ね。まあ、仕方ないわ。でも、あなたもあの日、黒い翼の女に襲われそうになったでしょう?」

ああ、あの女堕天使か。この間は未遂で済んだから見逃してやったけど、また兵藤達の誰かを襲ったりしたら、今度は確実に殺してやる。そこからは、リアスが兵藤を襲った女性が堕天使と言う存在だということ、その堕天使と敵対している悪魔、さらにその二つの種族を問答無用で倒しに来る天使について簡単に説明した。

その話を理解できていないのか、兵藤は困惑していた。無理もない。いきなり堕天使、天使、そして悪魔について話されても理解できるはずがない。

それから、リアスは兵藤になぜ兵藤が襲われたのか。なぜ兵藤意外

の人があの女墮天使に関することを忘れているのかを話した。

その事について、ある程度理解し始めたのか兵藤はさつきよりは落ち着きを取り戻していた。

「そうだったんですか。ところで、俺に危険な力が宿っていたから襲われたのは分かったんですが、その危険な力って何ですか？」

当然の質問だな。リアスは説明をしている時に神器については危険な力としか言っていないからな。ここは俺から説明しよう。

「兵藤。リアスが言っていた危険な力というのは、セイクリッド・ギア 神器と言うもののだ」

兵藤は神器と言う単語に聞き覚えがないのか首をかしげた。まあ、当たり前前の反応だよな。

「セイクリッド・ギア 神器とは、特定の人間の身に宿る、規格外の力。例えば、歴史上の人物の多くがそのセイクリッド・ギア 所有者だと言われているんだ」

・・・木場くん。その説明、俺がしたかった。そこからも、俺が説明したかったのに木場くんに続いて朱乃、そしてリアスに説明されてしまった。

俺の心中を察してくれたのか、エレナは俺に同情の視線を向けていた。エレナ、ありがとう。けど、その視線が今は逆に辛いよ。

心の中で、号泣していると、リアスが兵藤に手を上にかざすように言っていた。兵藤はリアスが最初に、何を言っているのか、分かっていない様だったが、リアスに急かされて、兵藤は左腕を上を上げた。

「目を閉じて、あなたの中で一番強いと感じる何かを心の中で想像してみてくださいよ」

あれ？俺がエレナに教えた方法とは少し違うな。俺の場合は、何かを心の中で一番強く想像しろって教えたんだよな。神器はその人の強い想いに反応するからな。なにも、一番強いと感じる何かを心の中で想像しなくてもいいんだよな。対して変わらないけど。

その時エレナが、俺を守る位強くなりたいたって言ってくれたな。あの時は、顔には出ていなかったけど内心かなり嬉しかったな。

「い、一番強い存在・・・。ド、ドラグ・ソボールの空孫悟かな・・・」
なんだそれ？初めて聞くな。

「では、それを想像して、その人物が一番強く見える姿を思い浮かべるのよ」

そこから兵藤は、そのドラグ・ソボールとか言う物の人物を想像しているのか、無言になった。

「ゆつくりと腕を下げて、その場で立ち上がって」

リアスが兵藤にそう言うと、兵藤は左腕を下げてソファーから立ち上がった。

「そして、その人物の一番強く見える姿を真似るの。強くよ？軽くじゃダメ」

ん、どうした？なんか兵藤が一瞬動揺したように見えたぞ。どうしてだ？それに、なんか躊躇してるようにも見えるぞ。

「ほら、早くなさい」

リアスが、兵藤のことを急かしていた。

すると、兵藤が両手を合わせて、両手を腰まで引いた。いったい何をやるつもりなんだ？

「ドラゴン波！」

兵藤が声を張り上げながら両手を前に突き出した。

・・・兵藤。いい年してそんなのをやるのは恥ずかしくないか。いや、恥ずかしかつたからこそ、躊躇もしていたし、動揺もしていたんだらうな。

俺が兵藤に憐みの目を向けていると、リアスが兵藤に目を開けるように言った。兵藤が目を開けると、兵藤の左腕が発光しだした。光が眩しかったため、俺は目を少しだけ手で覆った。光が止み始めると、兵藤の左腕には、手の甲に宝玉の付いた赤い籠手ができていた。

あれが兵藤の神セイクリッド・ギア器か。形状からして『龍トウワイズ・クリティカルの手』か。神器セイクリッド・ギアのレベルとしてはまあまあだな。人のことは言えないが。

「な、なんじゃ、こりゃあああああー！」

兵藤が自分の腕に突然、籠手が現れたことに大声を出して驚いていた。まあ、そうだよな。エレナは兵藤ほど驚いてはいなかったが、それなりに驚いていたな。

それからリアスが兵藤に発現した神セイクリッド・ギア器について説明をしてい

た。説明が終わると、兵藤は自分の腕に現れた神セイクリッド・ギア 器を信じられないものを見るように見ていた。

「あなたはその神セイクリッド・ギア 器を危険視されて、あの墮天使、天野夕麻に殺されかけたわ」

天野夕麻、それが兵藤を襲った墮天使の名前か。手掛かりも分かったことだし、後で調べておくか。

「殺されかけた……。そうだ！あの時俺を助けた人がいるんです。その人についてはなんか知らないですか！」

兵藤、それ俺だ。なんて思っていたら、リアスが視線を俺に向けていた。俺はリアスを見ながら頷いた。

「兵藤。お前を助けた人ってのは俺のことだ。あの時偶然お前を見かけていなかったら、今頃お前は死んでいたぞ」

兵藤の目を見ながら話すと、兵藤は驚愕した顔で俺を見ていた。それからすぐ兵藤はなんで俺がここにいるのか理解したように見えた。

「そうですね、ハース先輩が助けてくれたんですね。あの時は、助けてくれてありがとうございます！いつかこの恩は返します！」

兵藤が頭を深く下げた。そこまでしなくてもいいんだが、兵藤からしたら俺は命の恩人なんだからこれぐらいしないと気がすまないんだろうな。

「いいさ、兵藤。助けて貰った恩はいつかしてもらうさ」

それから兵藤は頭を上げて、「はい!!」と大きな声で返事をした。いい返事だ、兵藤とはそこまで話したことはないが、兵藤のことが気に入ってきたな。

「さて、イツセーがハースにお礼をしたことだし、話を続けましょう」
リアスの合図を始め、俺達は話を再開した。

まず初めにあの時なぜ俺があの場合に居たのか、俺が一体何者なのか、なぜリアスがあの場合に現れたのか、どうやって俺が墮天使を退けたのか、俺とエレナがここにいるのかなどを話した。

「そう。つまり、ハースは墮天使の投げた光の槍を蹴り返す何ていう人間離れした芸当をして退けたと。他にもハースとエレナとの関係は師弟と言ったところかしら？」

「その認識で大体合っている。エレナとは師弟の様な関係であると同様に仲間でもあるからな」

俺がリアスと話していると、エレナ以外の周りの奴等は俺のこと見ながら、あり得ないとも言いたげに見ていた。そんな目で見られても本当のことを話しているんだからしようがないだろ。

「はあ。あなたの話を聞いていると、本当に人間なのか疑いたくなるわ」

そんなことを言うなよ。まあ、確かに俺自身が人間なのか疑っているんだから他の奴等がそう思ってもしようがないよな。

「さてと、俺から今話せることは全部話したぞ。他に聞きたいことはあるか？」

そう言ってから周りの奴等を見てみるが特に反応はなかった。

「そうか。なら、この話はおわりだ。そろそろ兵藤のことについて話し合おう」

俺が兵藤のことについて話そうと言うと、当の本人が驚いていた。

「な、なんで俺のことについて話し合おうんですか!？」

兵藤の奴、そこまでさすがに考えが至ってないか。

「いいか、兵藤。お前は一度墮天使に目を付けられたんだ。このままにしておくのはあまりにも危険が大きい。だからこれから兵藤をどうするか話し合おうんだ。」

さて、そんなことは言ってみたもののどうするかはまだ考えていないんだよな。どうしよう。

「だったら、イツセー。あなた、私の眷属になってみないかしら？」

そう言うどリアスは何処からともなく、『悪魔の駒』の『兵士』の駒を取り出した。そうか、その手があったな。

「リアス先輩。それ、なんですか？」

「イツセー、これは『悪魔の駒』と言ってあらゆる種族を悪魔にすることができると駒なの。これを使えばイツセーは私の眷属になると同時に悪魔にもなるわ」

成る程、確かにそれを使えば兵藤はグレモリー眷属になって墮天使には狙われなくなるな。兵藤は神器も宿していたことだし眷属にす

るのはありだな。だが、それは兵藤が悪魔になる意志があるのかによるな。

「そ、それでその『イーヴィル・ピース悪魔の駒』を使って俺が悪魔になってメリットってあるんですか？」

兵藤の質問にリアスは悪魔になったときのメリットを話始めた。かなりの年月を生きること、爵位を得ると自分の眷属を持てるようになるなどを話すと兵藤は食いつくように悪魔にして下さいと頼んできた。

兵藤の奴、自分の眷属をハーレムにすることもできると聞いたらすぐに決断しやがった。どんだけハーレムを作りたいんだよ。

「そう。なら、あなたには私の『ポーン兵士』になってもらうわ。良いわね、イツセー」

リアスが兵藤に最後の確認をしていた。これで兵藤が、イエス、と答えたらそこで兵藤は人から悪魔になるからな。最後の確認は必要だろう。

「はい。お願いします。リアス先輩」

兵藤が返答すると、リアスが『ポーン兵士』の駒を兵藤に向けて、呪文の様なものを唱え始めた。人が悪魔に転生するところを見れるなんて滅多にないぞ。

兵藤の身体に駒が入っていく。だが、その中で驚くべきことが起きた。兵藤の身体に『ポーン兵士』の駒が八個も入っていったからだ。

おい、どうということだ。なんでこの間まで一般人だった兵藤に『ポーン兵士』の駒が八個も消費されたんだ。

その考えはリアスも同じ様で、目が見開いていた。『ポーン兵士』の駒を八個も消費した？どうしてかしら？そこまで能力は高くないのに」

だろうな。今の兵藤は良くてアスリートより身体能力が高い位だからな。原因はなんなんだ。兵藤自身の能力だけじゃ駒を八個も消費はしない。そう考えると、あの『トウワイス・クリティカル龍の手』が原因か？だとすると、あれはただの『トウワイス・クリティカル龍の手』じゃない？わからないことが多すぎるな。しばらく様子を見ておくか。

「まあ、いいわ。これであなたは私の眷属になったわ」

リアスが言い終わると同時に、俺とエレナ以外の背中から蝙蝠の様な翼が生えた。なんだろう、俺とエレナがこの場だと浮いている様に見える。

「それじゃ、イツセー。改めて紹介するわね。祐斗」

リアスが木場の名前を呼んで、木場は兵藤に自己紹介を始めた。それから小猫、朱乃、そしてリアスという順番で自己紹介をしてみた。「さて、ハース。あなたの番よ」

おっと、俺の番か。けど、兵藤は俺のことを知っているみたいだから自己紹介しなくてもいいんじゃないかな。まあ、いいか。

「兵藤くんと同じクラスのエレナ・ルタスです。仕事の時は、ハースのサポートをしています。以後、お見知りおきを」

俺より先に自己紹介をしたか。さて、今度こそ俺の番だな。

「知っているかもしれないが、リアスと朱乃のクラスメイトのハース・ベスタードだ。はぐれを狩って金を稼いでいる。今後ともよろしくな。」

自己紹介を終えた俺は、兵藤に伝えたいことを伝えた。

「こちら側へようこそ。兵藤一誠くん。俺達は君を歓迎しよう」

こうして、俺たちとオカルト研究部の話し合いは終わりを告げた。

ちなみに、話し合いが終わった後、小猫から羊羹が売っている場所を聞いて、俺とエレナの分も含めて俺の家に住んでる奴等の分を買って帰ったのは、余談である。

Life. 3 友人のいる日常

リアス達オカルト研究部との話し合いが終わった後、俺はエレナと一緒に小猫に教えてもらった店に行き、羊羹を買い終えて帰路についていた。

「それが、ハースの言っていた羊羹ですか。食べるのが楽しみです」

エレナは、俺の持っている袋の中身を興味深く見ていた。それもそのはず、彼女は甘いものが大好きすぎて、俺たちに黙って、甘いものを一人で買ってこっそり食べている位だからな。

なぜ、エレナがこっそり食べているのかは俺にはさっぱりわからな。別に隠れて食べるようなことでもないだろ。

まあ、エレナは誰にも自分が甘いもの好きだと思われていないと考えているようだが、実は俺の仲間は全員この事を知っている。

無理もない。エレナは甘いものを見ると、誰から見てもわかるぐらいに目の色が変わるからな。

俺の知る限り、その時だけは普段の彼女からは想像もできないくらいだしな。しかし、なんでそんなに甘いもの好きになったんだ？

エレナの甘いもの好きのことを考えていると、制服のポケットから携帯電話が鳴り始めた。

誰からだ？今日は特に依頼とかはないはずだが。

ポケットから携帯電話を取り出して画面を見ると、『真紀』と出ている。なんか嫌な予感がする。とりあえずでるか。

「どうしたんだ、真紀？電話なんかかしてきて。なんかあったのか？」

俺はそう言うが、返事がない。むしろ、電話越しで騒ぎが起きてるような物音がしている。嫌な予感が当たったな。

『ハース、助けて!!』

やっと電話に出たか。そろそろ切ろうかと思っていたぞ。

「電話をしておいて、人を待たせるとはいいい度胸しているな?・・・と、言いたいところだが、何があった。詳しく教えろ」

少し怒気を含めて話して見るが、俺はそれより電話越しから聞こえる物音のほうに気になった。

『電話にすぐ出れなかったのは謝るけど、今それどころじゃないの！
また何時もの奴らが来ていて、ハースはまだ帰ってないのかって騒い
でるのよ！少しは大人しくしてる人もいるけどね』

・・・はあ。またかよ。ここ最近毎日来てないか。

「とりあえず、もうすぐで家に着くから、俺が家に着くまでにどんな手
段を使ってもいいから騒いでる奴らを黙らせておけ」

そう言うと、電話越しで溜め息をつかれた。

『容赦ないのね。わかったわ。なるべく早く黙らせておくわ。それ
じゃ』

会話が終わると、電話が切れた。なぜ溜め息をつかれた？

「真紀からですか？かなり慌てていたみたいですけど」

「そうだ。何でも、何時もの奴らが来ているらしい」

真紀からの電話内容を話すと、しんどそうに溜め息をついた。

「またですか。懲りない人達ですね」

確かにそうだ。しかし、なんであいつら毎日来るようになったんだ
？それについても聞いておくか。

「とりあえず、早く家に帰るぞ」

そうして、俺達は家に急いで帰ることにした。

「で、この惨状はどういうことだ」

俺の家の周りには人払いの結界が強固に貼られている。

それはいい。だが、なぜ俺の家が全壊しているんだ。

「いやー、つい力を入れすぎちゃって・・・」

今俺の目の前には黒髪のロングヘアの美女が正座をしている。

彼女の名前は土御門真紀、さっきまで俺と電話をしていた本人だ。

「へえ、力をいれすぎただけで俺の家が全壊したのか」

俺は少し怒気を含めて話してみると、真紀は冷や汗をかきはじめ
た。

「えっと、あの、その・・・」

俺が真紀を睨み付け続けると、彼女は今にも泣きそうな顔で土下座

をした。

「ごめんなさい。次からは気を付けます」

・・・まあ、今回は俺もどんな手段を使ってもいいから黙らせろって言ったんだ。俺にも非があるな。それに、女性の涙を見るのは辛いしな。

「今回は俺にも非があつたからな。今度からは気を付けてさえくれればいいさ。頼むから泣かないでくれ」

俺がそう言うと、真紀は土下座をやめて立ち上がり、涙を拭った。

「うん、ありがとう。今度からは気を付けるよ」

そう言った彼女は全壊した家に向かい、魔法を使って家を直し始めた。俺が言う前からやってくれるのはありがたいな。さてと、次はこいつらか。

そう思いながら振り向いたが、突然俺の背中に何が乗つかつてきた。その重みと背中に押し付けられてる弾力には心当たりがあつた。

「・・・急に何をするんだ、黒歌？」

俺の背中に乗つかつてきた人、黒歌は悪戯な表情を浮かべて俺を見た。彼女の名前は黒歌。黒髪に着物を着崩したダイナマイトボディアの持ち主だ。

「にやは。ハースに抱きつきたくなっただけにやん」

黒歌はそう言いながら、俺の背中に胸をさらに押しつけてきた。はあ、これから真面目な話をしようとした矢先にこれか。

「黒歌。俺は今から大切な話をしようとしてるんだ。少しの間、離れていてくれないか」

そう言うと、黒歌は不満げなをしながら離れた。頼むからそんな顔をするなよ。

「はあ、後で何時ものあれをやるから我慢してくれ」

その事を聞くと、黒歌は先ほどとは違い嬉しそうな顔になった。

「本当にや？ だったら我慢しておいてあげるにやん」

そう言って彼女はエレナの所に向かった。ふう、これで黒歌の機嫌はとれたかな。さてと、話を戻すか。

「それで、一体何のようで俺の家に来たんだ？ ヴァーリ、美猴、アー

サー」

俺の目の前で正座をさせている奴等は、右から順に見ると、ダークカラーの強い銀髪で透き通った蒼い目の美少年ヴァーリ。中国の三國志に出る武将が着ている鎧を身に付けている爽やかそうなイケメンの美猴。メガネをかけ、背広を着た金髪の紳士的な好青年のアーサー・ペンドラゴンがいる。こいつらは俺の家を壊した為、正座をさせている。

彼ら以外にも、魔法使いの衣装に身を包んだアーサーの妹で、小柄な少女のルフエイ・ペンドラゴンがいる。彼女は、俺の家で大人しくしていた為、正座はさせていない。今は、エレナと黒歌の所にいて話をしている。

「その前に、正座をやめさせてくれねえか？」

俺の家を壊したくせに、よくそんなことを言えるな、美猴。そう言った美猴にだけ、俺は殺気を向けた。そうすると、美猴はさっきまで前のめりに正座をしていたが、背筋を伸ばしてくれた。

「美猴、お前は状況を理解していないのか？」

そう言うと、美猴は「すまねえ」とだけ言っただけで頭を下げた。なんか反省している様には見えないな。こいつはしばらく放置しておこう。

だが、今回は俺も驚いたことがあった。

「まさか、アーサーが家を壊す様なことをするなんてな、一体どういうことだ」

そう、普段のアーサーは俺の家で大人しくしているんだが、なぜか今回は家を壊した原因になっていた。

「ええ、今日は何時よりも騒がしかったので、真紀さんと一緒にヴァーリ達を止めようとしたんです」

つまり、アーサーは家を壊すつもりはなかったと。

「俺の家を壊すつもりはなかったんだな？アーサー」

俺がそう言うと、アーサーは頷いた。嘘をついてはいないな。そうか、ならこうして正座させているのは少し違うな。

「アーサー、お前はもう正座しなくていいぞ。真紀と一緒に家を直してくれ」

俺がそう言うのと、アーサーは俺の家を直しに向かった。すると、アーサーが移動したのを確認したルフエイがアーサーの手伝いに行った。優しい妹を持ったな、アーサー。

さてと、最後はヴァーリか。

「ヴァーリ、なんでこうなったのか説明しろ」

俺はまだ肝心なことを聞いていない。アーサーが原因ではないことは分かった。あとは、ヴァーリから話を聞けばわかる。

「ああ、分かった。まず、俺達がハースの家に来た理由は、何時もおなじだ」

やっぱりな。それ以外の理由でヴァーリ達が来るはずがないからな。

「またか。お前らよく飽きないよな」

「それぐらい、ハースのあれは良いものだからな」

はあ、そのために俺の家が壊されたのか。しょうがない。とりあえず、誰が家を壊したのか聞くか。

「で、誰が俺の家を全壊するようなことをしたんだ？」

これが一番重要だ。全壊させた奴にはそれなりのお仕置きをしないとな。

「ああ、それなら、ハースの家を壊したのは美猴が如意棒を使ってやったことだぞ」

美猴の名前が上がった瞬間、俺は美猴のいる方に振り向いた。すると美猴は筋斗雲に乗って逃げ出していた。はあ、しょうがない。

「ヴァーリも家を直しておけ。全部直したら、今回のことはなかったことにしてやるよ」

俺がそう言うのと、ヴァーリは家を直しに行った。さてと次は美猴だな。

「美猴。まさか、この俺から逃げ切れると思っっているのか？」

そして俺は、逃げ出した美猴を追いかけた。

美猴が逃げ出してから数分がたった。今俺の手には、頭にたんこぶが出来て気を失っている美猴がいる。さすがに

筋斗雲は速かったな。久しぶりに走り疲れたよ。

さて、家の状態はどうなっているかな。早く美猴を連れて帰ろう。

美猴を連れて家に着くと、そこは二階建ての一軒家が建っていた。良かった。ちゃんと直してくれたんだな。そう考えながら俺は、家のドアを開けた。

「ただいま」

うん。やっぱりこの言葉を言って初めて帰って来たという気分になるな。

「お帰りなさい、先生。言うのが遅れましたが、お邪魔してます」

リビングから迎えに来てくれたのは、帽子を外したルフエイだった。なぜルフエイが先生と呼んでいるのかというと、俺はエレナとルフエイの二人に魔法の使い方を教えているからだ。とは言っても、ルフエイの場合は、魔法書を貸してわからないことを聞かれたらそれを教えたりしているだけだな。

「ああ、ルフエイか。さつきは家を直す手伝いをしてくれてありがとうな」

そう言いながら俺はルフエイの頭を撫でた。すると、ルフエイは笑顔を向けてきた。やっぱり、女は笑顔が一番だな。

「いいえ、先生のお役に立てて嬉しいです」

本当にいい子だな。さて、そろそろリビングに行くか。そう考えながら俺は、ルフエイと一緒に美猴を引き摺りながらリビングに向かった。

リビングに着くと、そこではエレナ達が羊羹を食べていた。ヴァーリ達も来るだろうと思って多めに買って置いて良かった。リビングにある机の上には食べかけの羊羹が残っていた。おそらくルフエイのだろう。

「机の上に乗っている羊羹はルフエイのか？」

「はい、先生が買ってきた羊羹ですよ。エレナさんから聞きました。とても美味しいです！」

「そうか、それは良かった。ルフエイ以外の奴らも見ると、全員美味しそうに羊羹を食べているな。」

「さて、俺もやることやるか。その前にヴァーリにもう一度確認しておこう。」

「ヴァーリ。今は羊羹を食べているみたいだが、例のあれもいけるか？」

俺がそう言うと、ヴァーリは「問題ない」と言った。そうか、ヴァーリが大丈夫ならヴァーリ以外にも問題ないだろうな。そう判断した俺はキッチンに行き、あるものを調理し始めた。

調理を始めてから時間が過ぎて、今はエレナに真紀、ヴァーリ達も含めて俺の作った料理を食べている。俺の作った料理は誰もが一度は食べたことのあるものだ。

その料理とは、カレーのことだ。なぜかは知らないが、ヴァーリ達は俺の作った料理のことを、美味しいと言ってくれる。俺の作った料理が美味しいと言われるのはかなり嬉しかった。

別に毎日カレーを作っている訳ではない。毎日別の料理を作るし、素材も少しは変えている。ただ、最近はヴァーリ達が毎日来るようになったから、カレーを作る機会が増えてしまっているだけだ。

「やはり、ハースの作るカレーだけは今まで食べてきた物とは味が全然違うな。とても美味しいな」

ヴァーリが美味しそうに食べながら感想を言っていた。作った本人としては嬉しい限りだ。

エレナや真紀、アーサー、ルフエイ、黒歌もほとんど同じような感想を言っていた。作った甲斐があったよ。

「おーい、ハースよ。俺たちの分はねえのかい？」

美猴がリビングの奥で何重にも縄で身体を縛られていながら、俺に

訪ねてきた。

「美猴。お前が逃げ出さないで、俺の家を直す手伝いだけでもしてれば、カレーだけは食べさせるつもりだったんだぞ」

美猴がその事を聞くと、嘘だろと言わんばかりに驚いていた。何を驚いている。ちゃんと家を直してさえいければ、カレーぐらい食べさせてやるわ。その機会を逃したのは他でもない美猴自身だろう。

その事を知って、シヨックを受けたのか美猴は今まで見たことのないぐらい落ち込んでいた。まあ、今の美猴に同情はできないな。自業自得だ。

さて、忘れないうちにヴァーリに頼みごとをしておこう。

「ヴァーリ。頼みたい事があるんだかいいか？」

「・・・頼み事は何だ？早く教えろ」

ヴァーリがカレーを食べながら聞いてきた。あれ？カレーを食べている邪魔をしたせいで、少し怒っているのか、ヴァーリ？

「ああ、頼みの内容は簡単だ。・・・『天野夕麻』という名前を使った女堕天使について調べて欲しい」

『天野夕麻』の名前を出すと、エレナが一瞬だけ反応したが、すぐにカレーを食べ始めた。

「堕天使・・・それは俺が『神の子^グを見張る者^リ』に所属しているからか」
それもあるが、正確には違うな。俺は首を横に振った。

「違うぞ、ヴァーリ。俺はお前のことを信頼しているし、なにより友人だからこそ頼んでいるんだ」

俺がそう言うと、ヴァーリはどこか嬉しそうに小さな笑みを浮かべた。

「・・・そうか、わかった。なら、出来るだけ早くその『天野夕麻』の名前を使った堕天使について調べておこう。」

ありがたいな。持つべきはやはり友だな。堕天使共は必ず自分が見張っていた人間についての報告書を出すはずだ。その報告書の中に『天野夕麻』の名前があるはずだ。

「ところで、なぜその『天野夕麻』とやらの情報が欲しいんだ？」

そうだったな、調べて欲しい理由を説明しないとな。

そうして俺は、自分の後輩がその『天野夕麻』の名前を使った墮天使に襲われたということを話した。その為、また兵藤が襲われたときに相手の事を知っておきたいとも話した。

「成る程。確かに、相手の事を知っておいたほうがいいからな」

それだけ言うとうヴァーリはまたカレーを食べ始めた。さて、俺もカレーを食べるか。

カレーを食べ終わってからしばらくすると、ヴァーリ達は帰ろうとしていた。ヴァーリが言うには、報告書を見つけたら、また来るつもりらしい。

だが、ヴァーリ達が帰ろうとしてる間も美猴はヴァーリ達の影に隠れて落ち込んでいた。さすがにそこまで落ち込むとは思っていなかったが、俺は作ったカレーの余りをタッパーに入れて美猴に渡した。

すると、美猴は先程とは違い、タッパーを受け取った瞬間に涙を流した。そんなに嬉しいのか。それから美猴はもう家を壊す様なことはしないと云った。俺はその言葉を信じてみようと思った。

「じゃあな、ハース。報告書を見つけたらまた全員で来るぞ」

「ああ、またいつでも来い。その時はまたカレーを作ってやるよ」

俺がそう言い終えると、ヴァーリ達は魔方陣を使いその場から転移した。

さてと、今日はもう風呂でも入って寝るか。そう思いながら風呂場に向かおうと振り向くと、さつきまでは居なかった人がいた。

「我、ハースのカレー食べにきた」

黒髪の長髪に黒いゴスロリ服を着た幼女、いや、世界ができた時から最強の座に君臨するドラゴン。『無限の龍神』オーフィスがそこにいた。

Life. 4 未来の選択

オーフィスが俺の家を突然訪れてからしばらく経っていた。エレナと真紀には自分の部屋に戻る様に言っており、今、オーフィスは俺がまた作ったカレーをさつきまでヴァーリ達が居たりビングで黙々と食べていた。

「ん、美味」

「・・・どうやら美味しいらしいな。無表情だから美味しいのかどうかわからなかったよ。しかし、なんで突然俺の家に来たんだ。カレーが食べたかっただけなのか？」

「オーフィス、いきなり何のようだ？」

とりあえず、来た目的を正確に把握しておこう。オーフィスがカレーを食べ終わると、俺を見つめてきた。

「ハース、我に協力する」

いきなり何を言い出すんだ。俺はつい溜め息をしてしまった。

「オーフィス。急に協力しろと言われてもな、何をするのか俺にはわからないんだ。まず、何をするのか教えてくれ」

協力するかどうかは目的次第だな。するとオーフィスは椅子から降りてガラス張りの窓まで歩いて行き、窓から夜空を見上げた。

「静寂な世界。我は故郷である次元の狭間に帰りたい」

「・・・嘘だろ。オーフィスのやつ次元の狭間に帰りたいって言ったのか。冗談じゃない。次元の狭間にはオーフィスと同じ最強の龍、『アポカリユプス・ドラゴン真なる赤龍神帝』グレートレッドが住んでいるんだぞ。」

「悪いがオーフィス。さすがに協力はできない」

おそらくオーフィスはグレートレッドを倒すために協力してほしいんだろう。だが、相手はオーフィスに並ぶグレートレッドだ。勝てる訳がない。するとオーフィスは首を傾げた。子供みたいでなんか可愛いな。

「なぜ？ハース、我には及ばないけど強い」

世界最強が強いと言っているんだ。本当なんだろう。だが、俺はそう思わない。

「オーフィス。お前が言うんだからそうなのかもしれないが、俺はそうは思わないぞ。なんだって、俺よりも遥かに強い存在はこの世の中にはたくさんいるんだ」

神龍、神話の神々、二天龍、冥界にいる超越者達、彼らのほうが俺より強い。俺は普通の人間より強いだけだ。

「それになオーフィス。俺はただの人間だ。次元の狭間に住んでいるアボカリユプス・ドラゴン『真なる赤龍神帝』グレートレッドには逆立ちしても勝てないさ」

それは覆しようのない事実だ。それほどグレートレッドは強いんだ。世界最強には絶対に勝てない。

「嘘。ハース、人間辞ようとしている」

・・・オーフィスのやつ、俺の奥底に封じているものに気付いているのか。今までこれに気付いたやつはいないのにな。

「ハース、禍々しい何かがある。それに神の気配。ハースはなに？」

確かに、俺の中にはオーフィスが言っている禍々しいものがある。それは『死』だ。オーフィスは俺に宿っている『死』について聞いているんだろな。

しかし、神の気配だと。俺は確かに神々の下で育てられた。俺に戦い方とこの世界についても教えてくれた。だが、それだけで神の気配がするなんてあり得ない。

・・・とりあえず、この事は後で考えよう。今はオーフィスと話しているからな。

「オーフィスが言う禍々しい何かってのは『死』の事だろうな。だが、神の気配については俺も知らない」

それだけ言うとオーフィスはこくりと頷いた。

「ん、神の気配についてはわかった。ハースに宿る『死』はなに？我わからない」

・・・オーフィスにこの事を話しても問題ないか。ただ俺が他の奴らに話したくないだけだからな。

そして俺は『死』を宿した時の出来事を話した。オーフィスがその話に興味を持っているのかどうかはわからなかったが。

それから『死』について話が終わるとオーフィスが俺のことをじっ

と見てきた。

「我、ハースの『死』見たい」

「どうやらオーフィスは俺が宿している『死』について興味を持っていたらしいな。なら、オーフィスに見せるか。」

「そうして俺は右手首に着けている黒いブレスレットを外した。すると黒くて禍々しいオーラ、『死』が俺の身体を徐々に纏い始めた。」

「あの日の夜以来、『死』を解放していなかったからかな、『死』を纏うまで少し時間がかかったな。それにしても、まさか俺の知らない間に自分でも見えるくらい『死』が濃くなっているとはな。」

「オーフィス、これが俺の宿している『死』だ」

「オーフィスに『死』を見せるとさつきより興味深そうに俺のことを見ていた。」

「それが『死』……。ん、わかった」

「オーフィスが頷くと俺はブレスレットを右手首に戻した。すると『死』が霧散した。」

「このブレスレットを作ったあの方は凄いな。これほど危険なものを確実に抑え込む物を作ったんだから。」

「それから俺は自分の身体に異変が起きないかを確認し始めた。」

「数分ほど時間が経ったが何も起きなかった。『死』が濃くなっているから身体に異変が起きるかと思ったがどうやらなにも起きないみたいだな。」

「さて、オーフィス。『死』については納得したか？」

「ん、我、納得。でも、それなに？」

「オーフィスは俺の右手首に着けている黒いブレスレットを指差していた。」

「オーフィス。これは、俺の『死』を抑え込むために必要な物だ。俺はまだ完璧に『死』を制御できていないからな。これ無しだと俺は常に『死』を解き放った状態にいるんだ」

「オーフィスにブレスレットのことを説明すると、オーフィスが俺の傍らまで来てブレスレットをつついた。」

「たったそれだけのことをするとオーフィスは俺の眼を見つめてき

た。その眼は何かを決めた様な眼だった。

「ハース、我に協力して」

それさつきも言ってたよな。

「オーフィス。それはさつきも言ったが、俺は協力しないぞ」

オーフィスにしてはえらくしつこいな。それほど俺に協力してほしいんだろう。まあ、俺は協力するつもりはないがな。

「それにな、オーフィス。別に俺ばかりに固執しなくてもいいだろ。もしかしたらオーフィスに協力しようとするバカがいるかもしれないんだからな」

まあ、グレートレッドに戦いを挑もうとするやつなんて高が知れているがな。

「それなら問題ない。我に協力するもの既にいる」

……は？オーフィスのやつ今あり得ないことを言わなかったか。協力するものが既にいる？一体どこのバカだ。グレートレッドに戦いを挑もうとするやつは。

「おい、オーフィス。一体誰が協力するんだ？」

わからないな。なんでグレートレッドを倒そうなんてことをするんだ。

「ん、魔王の血を引く者達と神滅具ロンギヌスを宿した者達。それと魔法使い達」
「おいおい、一体どういうことだ。魔王の血を引く者達ってことはルシファー、レヴィアタン、ベルゼブブ、アスモデウス達のことだろ。サーゼクス達、現四大魔王ではないのは明らかだ。だとすると旧魔王達しかいないな。」

そんなやつらがなんでオーフィスに協力するんだ。

「オーフィス。魔王、いや、旧魔王達はなんでオーフィスに協力してるんだ」

やつらがオーフィスに協力する理由がわからん。

「我、協力する理由聞いてない。グレートレッド倒す約束してくれただけ」

オーフィスのやつ、協力する理由を聞いてないのかよ！くそつ、こつちで協力する理由の情報を集めなきゃいけないじゃないか。

「はあ、わかった。それと旧魔王達は何か協力する為の条件を出したりしてきたか」

これだけでも聞けば情報を集めるときの目星を定めることができる。

「私の蛇を貸してほしいと言った」

蛇と言えば確か能力を強化する為のものだったな。なんでそんなことをするんだ。そんなことをしてらオフィスの力が弱まるだけなのに。

だが、やつらは力がほしいということはわかった。後はその力を得て何をするかという情報を集めればいいな。

「それで魔法使いたちはどうなんだ」

まあ、ある程度予想はつくがな。

「魔王の血を引く者達に協力している」

やっぱりか。どうせそんなことだと思ってたよ。そいつらも旧魔王達について情報を集めていればある程度のはわかるだろう。

「最後は神滅具を宿している者達についてだ」

おそらくこいつらが一番厄介なのかもしれない。オフィスは神滅具を宿している者達と言っていた。つまり、最低でも二人は神滅具を宿した奴がオフィスの協力していることになる。

「ん、神滅具宿した者、三人我に協力する。他にも色んな神セイクリッド・ギア器宿した者も一緒」

嘘だろ。神滅具を宿したやつらが三人も協力しているのかよ。普通はあり得ないぞ。一体どんなやつなんだ神滅具を宿したやつらは。

「神滅具所有者達について知ってることはあるか」

神滅具は全部で十二種類あるんだ。その内のどれかさえ分かれば大分違うんだがな。

それからオフィスのどんな神滅具があるのかを話をしてくれた。その内容に俺は驚愕してしまった。オフィスに協力している神滅具所有者達は『黄昏の聖槍』、『絶霧』、『魔獣創造』を宿しているということがわかった。なんで上位神滅具が三種同時に協力しているんだよ。冗談もいいところだ。

だがまあ、神滅具ロンギヌスが何かはわかったんだ。後はそれを元に所有者がどんな奴なのかを探ればいい。

「オーフィス、教えてくれて助かる」

さて、明日から忙しくなるぞ。

「ハース、我に協力する？」

うん、どうしよう。オーフィスに協力している奴らがどんなやつなのか興味が湧いちゃった。どうしよう・・・いや、マジで。

「とりあえずオーフィス。この返事はまた今度来るまでに考えておくから今日はとりあえず帰ってくれないか？」

「ん、わかった。我、帰る」

そうやってオーフィスは一瞬でその場から消えた。どうやら帰つたみたいだな。さて、今後のことをエレナ達に話すか。

そうして俺はエレナ達にオーフィスとの話し合いの内容を話して今後の方針を決めた。

オーフィスが俺の家を訪れてから、数日が経った。その間に起きたことは特にない。兵藤達についてはいまだに兵藤が自転車を使って悪魔のチラシ配りをしているだけで、まだ悪魔の契約をすることで進展はしていないということかな。

俺達はこの数日の間に集めた情報をリビングにあるソファアの前の長机に置き、ソファアに腰かけて、エレナ達と一緒に集めた情報を眺めていた。

この数日の間で旧魔王達のことと、神滅具ロンギヌス所有者達について色々とわかった。

まず旧魔王達についてはバカな奴らとしか言いようがない。奴らは自分たちのことを「真なる魔王の血族」なんて言って現四大魔王のことを「偽りの存在」と言っている。奴らは現四大魔王に復讐したいがためにオーフィスに協力している感じだ。

奴らは確かに真の魔王の血を引いてはいるが、その座から引きずり

落とされたのは実力がなかったからだろ。実力に名声があれば今も魔王の座に座れていたはずだ。まあ、俺には関係の無いことだがな。

次に神滅具所有者についてだが、彼らはかなりできるな。情報を集めたとしても細かいことは調べることができなかった。調べていて分かったことは名前ぐらいだからな。

まず『黄昏の聖槍』の所有者は曹操という名前だった。名前からも分かるが彼は三國志の英雄、曹操の名前を名乗っている。おそらく彼は曹操の子孫かなにかだろう。彼の情報は少なすぎて子孫かもしれないという予想でしかないがな。

次に『絶霧』の所有者はゲオルクというやつだった。彼についてはある程度調べることができた。まず、彼の先祖がメフィスト・フェレスと契約したゲオルク・ファウスト博士の子孫だということ。そして魔法使いとしての実力はトップクラスであらゆる陣営の魔法を使いこなしている。

いつかゲオルクとやらに会ったら魔法について話し合いたいな。

最後に『魔獣創造』についてだが、こいつの情報は一切手に入ることができなかった。まだ所有者として目覚めたばかりなのかも知れないな。

まあ、曹操について調べてみると、どうやら神器所有者がかなり集まっている感じだな。その中には英雄の名前を名乗っている奴らもいるらしい。まだ詳細は掴めていないがな。

これらが数日の間に集められた情報だな。まったく、疲れたよ。情報を聞き出すのに情報屋には大金を払い、彼らのことを少しでも知っている異形の存在は少し拷問紛いのことをして吐かせたりして大変だったよ。

「エレナ、真紀。ご苦労様。数日の間に良くこれだけの情報を集めてくれた」

エレナと真紀に労いの言葉を言うが、二人から返事がなかった。俺は疑問に思っ二人を見てみると、エレナと真紀は寝息を静かに立てながらお互いの肩に頭を預けて寝てしまっていた。

二人とも数日の間はほとんど寝ていなかったからな。疲れがピー

クに来て寝てしまったんだろうな。

俺は音を立てない様に立ち上がり、ソファアの近くに置いてある毛布を二人にかけてあげた。

さて、そろそろ良いか。

「オーフィス。居るんだろう。早く出てこい」

俺がそう言うのと目の前に空間の裂け目が現れ、そこからオーフィスが出てきた。

「ハース。我、返事聞きにきた」

そんなことはわかっているさ、オーフィス。だが、その前に聞きたいことがある。

「オーフィス、返事をする前に聞きたいことがあるんだがいいか？」

「ん、なに？」

「オーフィスは協力してくれる奴らについてどう思っている？」

俺がオーフィスに協力するかどうかはこの返事で決まる。

「特に何も思っていない。彼らグレートレッドを倒す協力をしてくれると約束してくれた。我、次元の狭間に帰り、静寂を得たい」

「その約束つてのは口約束でしたのか？」

オーフィスは俺の言ったことに頷いた。俺はつい呆気にとられた。俺はかなり長いことオーフィスと居たからなオーフィスのことは良く分かる。

俺の中の疑問が今の反応で確信に変わった。やはりオーフィスは誰よりも純粹なんだ。それを奴らは道具の様にオーフィスを使おうとしている。そんなこと、俺が絶対に許さない。

「・・・そうか。オーフィス、決めたぞ。協力するかどうかを」

俺はそう言いながら眼を閉じた。これからオーフィスに言うことは俺の未来が決まることだ。

そして俺は眼を開き、オーフィスの眼をまっすぐに見つめて言うべきことを言う。

「オーフィス。俺は、俺自身の意思で、オーフィスの為だけに協力しよう、たとえば、この先に何が起きたとしても俺の命有る限り協力しよう」
オーフィスは俺の言ったことを聞き終わると、少しだけだが笑って

いた。今まで笑ったところを見たことがないが、その笑顔は確かに心の底から出た笑顔だと思えた。

「ん、よろしく。ハース」

「・・・ああ、こちらこそよろしく頼む。オフィス」

この選択に俺は後悔はしていない。これが、オフィスの為に出る最善の選択だと信じて。そして、オフィスを利用しようとする奴は俺がすべて倒す。

こうして俺は後にオフィスをトップとしたテロリスト組織、カオス・ブリゲード『禍の団』に入った。

ちなみにこの日以来、オフィスは俺の家で暮らすことになった。それに対してエレナ達は驚きはしたが、家族として接するようになってくれるらしい。1ヶ月後以降の食費が跳ね上がることを知らずに。

Life. 5 墮天使の愚行

オーフィスが俺の家で暮らすようになってから数日が経っていた。オーフィスは今ではエレナ達と家族同然の付き合いにまでなり、俺の家に来ていた頃以上に、感情表現が豊かになっていた。これもエレナ達のおかげだな。

他にもその数日の間にヴァーリから兵藤を襲った墮天使についての資料が送られてきた。

どうやら兵藤を襲った墮天使の名前はレイナーレと言うらしく、こいつには墮天使の部下が3人いて、そいつらは今もレイナーレと共に行動をしているようだ。

資料によると、どうやらレイナーレはまだこの駒王町にて神器所有者がいないか調査をしているらしい。この資料の内容が正しいのなら今も墮天使共は駒王町に居るということになるな。

もうしばらくの間は兵藤の周りを警戒しておいた方がいいな。

ああ、兵藤で思い出したが、兵藤がついに悪魔として本格的に契約をしに行ったとリアスから教えてもらった。最初は兵藤も頑張っているなど思っていた。

だがリアスの話を聞いていると、兵藤が魔方陣をから依頼人の所まで行くことが出来ず、自転車で依頼人の所まで直接行くという前代未聞の出来事を起こしたということを知った。

俺はその話を聞いた時、驚きのあまり思考を停止させてしまった。なぜなら普通は転生したばかりの悪魔でも魔方陣から転移するだけの魔力はあるからだ。転移ができなかったということは魔力が低レベルすぎて魔方陣が反応しないということになる。

兵藤、お前は本当に『イザイル・ピース悪魔の駒』を八個も使って悪魔に転生したのか疑いたくなるよ。

まあ、そんなこともあり、俺はリアスに呼ばれてオカルト研究部に来ていた。なんでもリアスが俺とチェスの対戦をしたいと申し込んできたからだ。

俺はそれを承諾して現在リアスとチェスで対戦している。戦況は

俺が圧倒しており、リアスは悔しそうな顔をして悩んでいる。

「おい、リアス。手が止まっているぞ。いいから速く駒を動かしてくれ」

リアスの手が止まってから既に五分が経っており、俺はその間に駒をどう動かすかを何通りも考えていた。

「なら、これでどうかしら」

リアスは長考した末やっと駒を動かした。だが、俺はリアスが次に動かす駒のことも考えていたので、すぐに駒を動かした。

「そら、リアスの番だぞ」

俺が駒をすぐに動かしたせいなのかリアスはまた難しい顔になった。そしてリアスはいよいよ諦めたのか投入を宣言した。

ふう、やっと終わったか。チェスを始めてもう三時間以上は経っているぞ。

「また負けた。これで私の三戦三敗だわ」

「そして俺の三戦三勝だな。中々良い勝負だったぞ」

俺はそう言うがリアスは「嘘よ。終始あなたの圧勝じゃない！」と、なんとも子供みたいに騒ぎ始めた。そうは言うが、俺にチェスでここまで張り合えた奴はそんなにいないからな。

しかし、学園の『二大お姉さま』とまで呼ばれるリアスが子供みたいに騒ぐとは意外だな。今のリアスを学園の生徒が見たらどんな反応をするんだろうな。

「ハース、もう一度よ。次は勝つんだから！」

え、まだやるの。俺もう疲れたんだけど・・・。

「なあ、リアス。三時間もチェスをやるのは流石に疲れたからもういいだろ」

「いいえ、まだよ。私が勝つまで続けるわ」

リアス、お前疲れを知らないのか。しょうがない、もう少しだけやるか。

そして俺は結局、兵藤が来るまでリアスとチェスをし続けることになった。

「二度と教会に近づいちゃダメよ」

兵藤がオカルト研究部に来てから少しだけ時間が経っていた。

どうやら兵藤は家路についていた途中に金髪のシスターに出会い、教会まで道案内をしてきたらしい。

その事に関してリアスは、かなりご立腹のようだ。今も険しい顔をしているかな。

リアスは兵藤に教会が悪魔にとって敵地であること、それから悪魔が教会に足を踏み込むだけで神と悪魔の間で問題が起こることを説明していた。

その話が終わると兵藤は自分がとんでもないことをしたことに気づいたのか顔を青ざめていた。まあ、無理もないな。知らなかったとはいえ、天使がいたら光の槍で殺されていたかもしれないんだからな。

それからリアスは他にも教会の『エックンシスト悪魔祓い』についても説明し、悪魔祓いを受けた悪魔が完全に消滅するということも説明した。そこまで説明してリアスは兵藤が反応に困っていることによく気が付いた。

「ごめんなさい。熱くなりすぎたわね。とにかく、今後は気をつけてちょうだい」

リアスが我を忘れる程に怒ったんだ。相当なバカでない限りは心配ないと思うがな。

「あるあら。お説教は済みましたか？」

リアスの説教が済んだのを見計らうかのように朱乃が兵藤の背後にいつもの笑顔で立っていた。

「朱乃、どうかしたの？」

リアスの問いかけに朱乃が笑顔を止めて暗い表情になった。

「討伐の依頼が大公から届きました」

朱乃からはぐれ悪魔の討伐依頼を聞いてからしばらく経ち、俺たちは町外れにある草木が辺りに生い茂った廃屋近くに来ている。

ここには主のもとから逃げてきたはぐれ悪魔が潜伏しており、リアス達はそいつを討伐する為にここに来ている。

日付は既に変わっており、空には綺麗な満月の月が出ている。

とても良い夜だ。こんな綺麗な月の下で戦えるなんて運の良いはぐれだな。

「・・・血の匂い」

俺の隣に立っている小猫が小さく呟き、鼻を制服の袖で覆っていた。

血の匂いか。小猫がそう言うことはこの数日の間に誰かがはぐれ悪魔に殺されたということだな。

しかし、周囲には殺意や敵意といったものがあるが、あくびが出そうだな。俺が最後に戦ったはぐれ悪魔の方がもつと強い殺意と敵意を感じさせていた。ここに居るはぐれと最後に戦ったはぐれを比べると天と地との差があるな。

俺がそんなことを考えていると、リアスが兵藤に下僕の特性を説明していた。その説明の中には、大昔に起きていた悪魔、天使、墮天使による三つ巴の戦争についての説明もあった。

その戦争は終わりが見えない程に続き、三つの勢力が戦争を起こせなくなった時には悪魔の数が激減しており、種の存続が危ういことに気づいた悪魔があるものを作り出した。それが兵藤にも使った『悪魔の駒』だ。

そしてその『悪魔の駒』イーヴァイル・ピースを使って純血ではないとはいえ悪魔を増やし始めていく内に『悪魔の駒』イーヴァイル・ピースの特性をういた競技が流行り始めた。それがレーティングゲーム。これがなんと悪魔の中で大流行して今では地位にも影響を与える程になっていた。

その事をリアスが兵藤に説明していて今の自分はまだ成人していないから公式な大会には参加できないことを話していた。

それから兵藤が自分の特性をリアスから聞こうとすると、廃屋から

殺意などが強く向けられてきた。奴がこちらにやつと気が付いたか。「不味そうな臭いがするぞ?でも美味そうな臭いもするぞ?甘いのかな?苦いのかな?けど、その中でも特に美味しそうな臭いがするぞ?これはどんな味がするのかな?」

廃屋の奥には上半身が裸の美しい女性で下半身が四足もある獣みたいな姿をしたはぐれ悪魔がいた。高さは五メートル以上はありそうだな。最後に戦ったはぐれ悪魔よりも身長が二倍位あるぞ。

「はぐれ悪魔バイザー。あなたを消滅しにきたわ」

リアスが堂々としながらバイザーに向けて言い放った。するとバイザーが異様な笑い声を出し辺りを響かせた。

バイザーが笑い声を止めるとこちらに近づいてきた。近づくにつれてバイザーの大きさに驚かされるな。

「主のもとを逃げ、己の欲求を満たすためだけに暴れまわるのは万死に値するわ。グレモリー公爵の名において、あなたを消し飛ばしてあげる!」

「ござかしいいいいい!小娘ごときがあああ!その紅の髪のように、お前の身を鮮血で染め上げてやるわああ!」

うわ、小物臭が凄くする台詞だな。リアスもそう思ったのか鼻で笑っている。

「雑魚ほど洒落の聞いた台詞を吐くものね。祐斗!」

木場が返事をするとその場から飛び出した。悪魔にしては速いな。木場の駒は『騎士』か。あの速さを出すにはそれしかない。

それからリアスが兵藤に『悪魔の駒』についてのレクチャーを始めた。

俺は『悪魔の駒』の特性については全部知っているからな、リアスの話は聞かなくても良いだろう。バイザーとの戦闘を見ていた方が面白そうだな。

木場は『騎士』の特性を活かしてバイザーを翻弄していた。『騎士』の特性はスピードに特化している。バイザーは今のところなんとか木場を認識できているが、木場は少しずつ速度を上げていき、手に持っている西洋剣でバイザーに切り傷を浸けていた。

バイザーは木場に槍を使って攻撃してはいるが、全然当たっていない。どうやって主のもとから逃げたのか疑いたくなるぞ。

木場は一度だけ止まると、一気に速度を上げてバイザーに斬りかかった。その瞬間、バイザーが槍を持っていた片腕が切り落とされた。バイザーは悲鳴を上げ、槍を持っていた片腕から血が溢れていた。

速さは今の悪魔の中では十分なレベルに達しているが、剣を振っているときに少しだけな隙があるな。今度教えてやろう。

次は小猫か。バイザーの近くにいるってことは近接戦闘に特化しているのか。だとすると小猫は『戦車』の可能性が高いな。

バイザーは小猫を巨大な足で踏み潰そうとしたが、小猫はそれを両腕で受け止めていた。その際に小猫の足元にクレーターができていた。

やっぱり小猫の悪魔の特性は『戦車』だったか。

小猫がバイザーの足をどかすと、バイザーの上半身まで高く飛び、バイザーのみぞおちに拳を深く打ち込んだ。そのままバイザーは後ろに吹き飛ばされた。

小猫の奴、小柄なのに一体どこからあんな馬鹿力が出てくるんだ。見た目によらず恐ろしいな。

小猫がバイザーを吹き飛ばすと、俺のところまで歩いてきた。すると突然、小猫が俺に殴りかかってきたが、俺は小猫の拳を右手で受け止めた。

「なんのつもりだ、小猫？」

「先輩が失礼なことを考えている気がしたので殴りました。いけませんか？」

失礼なこと？そんなの考えた覚えはないんだがな。もしかして小柄だつてことを気にしたのか？

俺がどんなことを考えたのか悩んでいると、夜空から雷が落ちてきた。雷が落ちたところを見ると、バイザーが雷に感電していた。

バイザーの近くには朱乃がおり、朱乃が手を夜空にかざすと再び雷が落ちた。

あの雷は朱乃が落としていたのか。とんでもない威力だ。下手な悪魔なら一撃で倒せるぞ。それに耐えてるバイザーって意外と頑丈だな。バイザーの悪魔としての特性は『戦車』だったのかな？

朱乃が満足そうな笑顔を作りながらバイザーのもとから離れた。あの笑顔、バイザーに雷を落としてた時も浮かべていたからな、朱乃はかなりのSだな。

リアスがバイザーのもとに近づいていき、掌をバイザーに向けた。「最後に言い残すことはあるかしら？」

リアスがそう訊くが、バイザーの目にはまだ戦意が残っていた。そして奴は残った片腕に槍を持ってリアスに襲いかかった。リアスも含め朱乃達は突然のことに反応ができていないようだった。

「おい、リアス。戦意の残っている奴に近づくのは危険だぞ。特に瀕死の状態の奴にはな」

最後の抵抗ほど恐ろしいものはないからな。俺はリアスとバイザーの間に割り込み、バイザーの槍を片手で受け止めた。

「え、ええ。ありがとう、ハース」

さてと、バイザーはどうしようかな。・・・よし、決めた。

「リアス、こいつの処理は俺にまかせてもらってもいいよな？」

「そうね、本当は私が止めを刺すつもりだったけど、いいわ。止めはハースに譲ってあげる」

俺はリアスから承諾を得てから、バイザーの槍を握り潰した。それに奴は驚き、その隙に空間魔法を使って西洋剣を取りだして、そのまま奴の首を切り落とした。奴は断末魔をあげることなく絶命した。

俺はリアス達の方に振り向いたが、リアス達は目を見開いて俺のこ

とを見ていた。

「どうした、リアス。そんな驚いた顔をして」
俺が声をかけると、リアスが「な、なんでもないわ」と言っ

たの方に振り返った。俺、何かしたか？

「とりあえず、終わったわね。みんな、ご苦労様」
やっと終わったか。もう日付が変わっているからな、流石に眠い。

「リアス、先に帰るぞ」

転移用の魔方陣を足元に展開して、そのまま自分の家の部屋に帰ってきた。リアスが何か言おうとしていたような気がするが、気のせいだろうか。

俺は意識が朦朧なままベッドに倒れ込み、そのまま意識を手放した。

リアス達のはぐれ悪魔を討伐してから数日が既に経っていた。あの後、俺が目覚めるとすぐ横にオーフィスが寝息を小さくしながら寝ていた。それに驚いた俺はつい大声を出してしまい、そのせいでエレナ達が俺の部屋に入り込んでしまったんだ。

それからエレナ達に変な誤解をして、大騒ぎをしていた。その騒ぎにさすがのオーフィスも目を覚ました。俺は起きたオーフィスに誤解を解くように頼んだのだが、オーフィスは寝惚けていたのか更に誤解を招くようなことを言っていた。

オーフィスが更に誤解を招いたせいでその日はとんでもない日になってしまった。後からちゃんと言った誤解を解くことができたが、もうあんなことが起きてほしくないと俺は切に願った。

そんなことを思い出しながら俺は自分のクラスに入り、席に着いた。

席に着いてから北欧の魔導書を読んでいるとリアスが俺の目の前に深刻な顔で来た。

「どうしたんだ、リアス。そんな深刻な顔をして」

リアスの様子がいつもと違ったので話しかけると、リアスがゆっくりと口を開いた。

「ハース、イツセーが墮天使と悪魔エクソシスト祓いに襲われたわ」

あ？どうということだ。イツセーが襲われただと。

「どういふことか説明しろ、リアス」

リアスは昨日、兵藤が契約先の人のところに行き、その時に墮天使

と悪魔祓エクソシストいがある場において運悪く兵藤が攻撃を受けたことを教えてくれた。

墮天使と悪魔祓エクソシストは自分がグレモリーだということを話すと、すぐさま撤退したと言う。

引き際を心得ているな、最近の墮天使共は。

兵藤は幸い、今日だけ安静にしておけば大事には至らないようだ。その為、今日は学園を休んでいるとのことだ。

「そうか、そんなことがあったのか。まさか、兵藤が襲われることになるとはな」

兵藤が襲われないようにリアスの眷属にしたのにこれじゃあ逆効果だろうが、くそ！

それからリアスは兵藤を襲った墮天使と悪魔祓エクソシストの特徴を教えてくださいから席に戻った。

スーツを着た男の墮天使に白髪の少年神父で、墮天使の名前はドナーシーク、神父の方はフリードだそうだ。

すっかりお前らの名前は覚えたぞ。貴様らはやってはいけないことをした。その行いは、万死に値する。覚悟してろよ、墮天使共！

こうして俺は兵藤を襲った墮天使を消すことにした。

Life・6 墮天使を足止めしよう

リアスから兵藤が墮天使に襲われたのを聞いてから数時間が経ち、放課後になっていた。

俺はオカルト研究部には行かず、エレナと一緒に家路についていた。

エレナと今日、学園で起きた出来事、世間話や兵藤がまた墮天使に襲われたことを話したりしながら帰り道の暇な時間を潰していた。

エレナも木場から兵藤が墮天使に襲われたというのには聞いていたらしく、一日だけ安静にしていれば良いと知った時から、兵藤のことは特に気にしなくなっただけらしい。

それだけで兵藤についての話は終わり、また世間話などの話題に話を戻したが、俺の頭の中ではこのあと、兵藤を襲った墮天使共を消しに行くことしか考えていなかった。

我ながら酷いことをしていると思った。エレナの話を何度も聞き流し、それに対して適当な返事しかしていなかった。

重要なことを考えている時はいつもこんな風になってしまうのはエレナも理解してくれてるはずだ。

「ハース、何時もとは様子が違うようですが、今夜中に何かをするのですか？」

・・・やはり、エレナは俺のことをよく分かっている。先程までしていた話を聞いてから俺が今夜中に何かをすることを察したようだ。

「ああ、そうだ。俺は夜になったらこの町に潜んでいる墮天使共を消しに行く。エレナは何時ものようにしていってくれ」

先程まで考えていたことをエレナに伝えると、悩んだ素振りを見せた彼女はまだ幼さが残る顔で笑みを浮かべた。

「わかりました。ハースの後ろは私たちがお守りいたします。どうぞ、心置き無くお出かけ下さい」

それを聞いて安心した。これで心置き無く戦うことができる。やることも決まったことだし、帰ったらすぐに支度を始めるとしよう。

日が沈み、月が昇っている綺麗な夜。街灯が街中を照らし始めた。家での支度を済ませた俺はリアスから聞いた教会に来ていた。

教会に着いてから数分が経ち、今は中の気配を探っている。

無闇に教会に突っ込んだところで罾が張り巡らされると余計な時間を使ってしまう。それを回避するためには中の状況を確認しておいた方が良さそう。

中の状況を確認してみたが、教会には一人だけしか気配がない。だがこの教会には地下があるのか、そこには墮天使の気配が一つに百人以上の気配がある。

配置具合から考えると、教会にいるのは見張り兼門番を務めていて、墮天使に協力しているはぐれ悪魔祓いの中でも特に実力のある者と考えるべきだろう。

地下に人が集まっているのは、何か重要なことをするためだと想定さえすれば、教会に見張りがいるのも辻褄が合うな。

だとすると、あんなに大勢の人が集まっているのは規模の大きい何かをするためか。そうなると思われるのはいくつかあるが、場所を考えると一つだけになる。

儀式だ。奴ら何らかの儀式を執り行うために集まっている。その中心を担っているのは墮天使か。

なんの儀式を始めるつもりなのかは知らないが、墮天使を潰すついでに止めたほうが良さそうだな。

やることを決めて教会の周りにある木の上から立ち上がろうとすると、人影が三つ教会に近づいてきた。

あれは、兵藤に木場、それに小猫か。兵藤はともかく、木場と小猫がここに来るのは意外だったな。

何をしに来たのか話しかけに行くか。・・・いや、今は止めておいたほうが良さそうだな。

教会に近づいてくる気配がある。この気配は墮天使だな。それも三人。ヴァーリが渡してきた情報だとこの町に潜む墮天使は全部で

四人だったな。教会の地下にいるのが一人、今、教会に近づいて来ているのが三人、これで全員が揃うわけだ。

兵藤達の様子を見てみると、丁度教会の中に突入していた。そうすると、教会は兵藤達に任せるとして、外の堕天使は俺が相手をすることになるな。

今度こそ木の上から立ち上がり、堕天使が着くのを待つことにした。

兵藤達が教会に突入してから数分が経ち、中では戦闘音が響いていた。

教会での戦闘音が止まるのとはほぼ同時に、堕天使を視界に捉えた。堕天使も俺のことを捉えたようで、少し離れた場所で動きを止めた。

「貴様、ここで何をしている？」

シルクハットをかぶり、紺色のコートを着た着た男が俺を睨んできた。コートを着た男以外にも、青髪のロングヘアーに黒紫色のボディコンスーツを着たスタイル抜群の女と金髪のツインテールに黒いゴスロリ服を着て白いタイツを履いた少女がいた。奴らの背中には一對の黒い翼が生えている。

青い髪か。あの日の夜に出会った名前を聞けなかった彼女のことを思い出すな。今はどうしているんだろう。

・・・つと、今はそんなことを思い出しているときじゃないな。

「何をしていると言われたら、そうだな。足止めだ」

言い終わる前に、教会に結界を張り、それと同時に俺たちの周りにも別の結界を展開した。

「っ!?! 貴様、一体なにを!!」

奴らは結界が張られたのに気づくと、光の槍を形成した。

「結界を張らせてもらった。これで俺を倒さない限りは教会に行くことはできなくなったぞ」

これで余程のことが起きない限り、奴らはここから出ることができなくなった。

堕天使が結界を見ていると、ゴスロリ服を着た堕天使が結界に向かって光の槍を投げつけようとしている。

「人間ごときが張った結界ぐらい、簡単に壊せるに決まってるっす！」
結界に光の槍を投げつけ、結界に当たるが、槍は虚しい音を出して壊れた。

「無駄だ。その程度の槍なんかで壊れるような結界じゃないんだぞ」
ゴスロリ服の少女、確か資料によると、ミツテルトだったか。そいつが苦虫を噛み潰したような顔をして、俺を睨んできた。

「私たちを足止めして、一体何のつもりだ、人間！」

ボデイコンスーツを着た女性、彼女はカラワーナだったな。．．．ダメだ。どうしてもあの青い髪を見ていると、彼女のことを思い出してしまう。

「いま、教会では俺の後輩たちが悪魔祓いと戦っているんだ。あいつらが悪魔祓いと戦った後でお前らと戦うのは体力が足りないと思つてな、ここで足止めをしてやろうと思つたんだよ。まあ、本音は個人的に聞きたいこともあるんだが」

後ろにある教会を指さししながら、奴らを足止めする理由を話した。

「ほう、個人的に聞きたいこと？それはなんだ？」

紺色のコートを着た男、ドーナシックが俺を見下したような口振りで聞いてきた。

ダメだな、こいつは。相手の力量を計れていない。よく今まで生きてこれたな。

「俺の後輩、兵藤一誠って名前なんだが、そいつが悪魔の活動をしているとき、堕天使に襲われたんだ。．．．兵藤を襲ったのは誰だ」

殺意と怒気を含めた声で奴らに言うと、ドーナシックが鼻で笑った。

「ああ、あの小僧か。それならこの私がやったことだ」

やはりこいつだったか。リアスから聞いた通りの特徴だったから、こいつのことだとは思っていたが、確証が無かった。だが、これで確証が得たな。

「ドーナシーク、貴様が兵藤を襲ったのか？」

「そうだ。私はレイナーレにアーシアの監視をするように頼まれたのでな、フリードと共にアーシアの監視をしていた。その途中でフリードが悪魔を呼んでいる人間の家を見つけたのでな、その家の住人を始末していたら悪魔の小僧が来たのだ」

アーシア？知らない名前が出たな。・・・いや、待てよ。アーシア？何処かで聞いたことのある名前だ。なんだったかな、何かの噂で聞いた気がするんだが。そのことは後で思い出すか。

「二つだけ質問してもいいか？ドーナシーク」

奴はアーシアの監視をしていると言っていた。だが、監視をするだけだったなら、フリードとやらだけに任せておけばいいんじゃないか。

「いいだろう。質問の内容はなんだ、人間？」

「何故フリードとやらにだけ監視を任せなかったんだ。監視なら一人でも十分のはずだが」

監視は一人でも十分とは言ったが、人によつては数人必要な時もある。

「ふむ、そんなことか。フリードだけに監視をさせてもよかったのだが、以前レイナーレがある人間と戦ったことを話したのだ。その人間はあのレイナーレの槍を蹴り返したというところでもないことをしたのでな、その者と偶然、出会った場合のことを考えて私が監視をすることになった。これで満足か、人間」

なんてことだ。ドーナシークの話が本当なら、レイナーレは俺を警戒してアーシアとやらに監視をさせたことになる。兵藤が墮天使に襲われないようにしたつもりだったが、こんなことになるとは予想外だった。

だが、これで兵藤を襲った墮天使のことがわかった。

「そうか、質問に答えてくれて助かった。お礼にあることをしようと思っているんだが良いか？」

「ほう、なんだ。結界を解くつもりになったか？」

結界を解く？いいや、違う。もつと別のことだ。

右手首にあるブレスレットを外して、ドーナシークを殺意の籠った眼で睨んだ。

「ドーナシーク、お前を殺す」

ドーナシークは話している間に少しずつ俺との距離を狭めていた。この距離なら、絶対に逃がさないし、逃げられない。

「ドーナシーク！下がりにさい！！」

カラワーナが槍を構えてドーナシークに呼び掛けるが、もう手遅れだ。

後ろに下がろうとしたドーナシークの首を掴み、上空から一気に地面に叩きつけた。すると地面にクレーターができ、黒い羽が辺りに飛び散った。

ドーナシークは呻き声を上げたが、まだ意識が残っていた。

「き、貴様、なんのつもりだあ。」

「なんのつもりって、お前を殺すと言っただろう？その言葉の通りだ」
ドーナシークは槍を形成しようとしていたが、俺はその前に奴の両腕をへし折った。骨が折れた音を出すとドーナシークは悲鳴を上げた。

「貴様、ドーナシークから離れる!!」

「ドーナシークの旦那から離れるっす!!」

後ろからカラワーナとミッテルトが槍を持って近づいて来ている。今の俺は二人に背中を向けているが、顔が二人に見えるように後ろを向いた。

「カラワーナ、ミッテルト。お前ら二人はその場から”動くな”」

殺意の籠った声と眼だけで二人の動きを止めた。彼女たちは蛇に睨まれた蛙のようにその場で動きを止めた。

「さて、ドーナシーク。お前はこの状況でどうする？」

ドーナシークは口を動かすだけで何を言っているのか俺には分からなかった。

「ん？ああ、悪い。俺がお前をしゃべれない様にしてたんだな。それじゃあ、このままなにも話せずに死んでしまえ」

俺は『死』を使ってドーナシークの体を黒く染めた。奴は体の変化

に気づいて足だけで暴れようとしていたがその前に『死』が体を完全に染めきり、ドーナシークの体が崩れていき死んでいった。

その場にはドーナシークだったものだけが残り、黒い羽は飛び散っていないかった。

これで目的は達成したか。後は彼女達をどうするかだ。

カラワーナとミツテルトの方を見ると二人ともまだその場で動きを止めているが、彼女達は意識を保っている。しかし、口元が震えている様でまともに話せそうにないな。

「へえ、驚いたな。まだ意識を保っているのか。上級悪魔ですら気絶するほどのものだったんだがな、さっきのは」

もしかしたら、彼女達にはそれなりの才能かなにかがあるのかも知れないな。

俺の目的は兵藤を襲った堕天使を始末することだけだったんだが、彼女達を見て気が変わった。彼女達を俺の家に連れて帰ろう。とりあえず、結界を解くか。

俺たちの周りに張った結界を解いた俺は彼女達の額に指先を当てた。すると彼女達は糸が切れたかの様に倒れそうになったが、咄嗟に彼女達を両肩で抱きかかえた。

目的も済んだことだし、帰るか。

そう思い帰ろうとするが、すぐそこで魔方陣が出現した。魔方陣の紋章はグレモリー家のものだ。

リアスか。大方、兵藤達がここに来たのに気づいて足を運んだ感じか。

そして魔方陣からリアスと朱乃が現れた。リアスは学園の制服を着ているが、朱乃は巫女服を着ていた。二人は俺がこの場所に居たことに溜め息をついてきた。

「ハース、やっぱりここに居たのね」

「なんだ、リアス。俺がここに居るのがそんなに変か？」

「いいえ、寧ろ納得したところよ。ハースに何度も連絡したのだけけど、反応がなかったからこれで納得したわ」

「そうか、それは悪かったな。俺はそのとき堕天使と戦っていたと思

うぞ」

するとリアスは俺の後ろに出来ているクレーターや辺りに飛び散っている黒い羽を見ようとしていた。だが、リアスはそれより先に俺の両肩にかかえられている二人のことを見ていた。

「ハース、その二人はだれ？」

「ん？この二人はレイナーレの部下のミッテルトにカラワーナだ」

二人のことをリアスに教えると、リアスは目を細めた。

「ハース、どういふつもりかしら？まさか、その墮天使を助けるつもりじゃないでしょうね？」

彼女の目にはミッテルト達に対しての敵意しか宿っていない。俺は朱乃の方に顔を向けると、彼女はニコニコ笑いながら俺たちのことを見ていた。

朱乃の奴、もしかして今の状況を見て楽しんでいないか？まあ、いか。

「その通りだ、リアス。俺は彼女達に興味が湧いから、家に連れて行くことにした」

リアスの目に宿った敵意が更に強まった。

「ハース、それは私に喧嘩を売っているのかしら」

おいおい、確かに兵藤が墮天使に襲われたことに対して怒るのは最もな理由だが、いくらなんだも敵意が強すぎる。

「落ち着け、リアス。彼女達は今回の件についてはほとんど無関係だ。関係あるとしたら、レイナーレの部下ってことだけだ」

「それだけでも万死に値するわ」

何だろう、今まで見てきたリアスのなかで一番迫力があるな。眷属が襲われてそんなに怒っているのか？

「いいか、兵藤を襲った墮天使はもう殺したし、兵藤達はおそらく教会の中でレイナーレと戦っている。それに兵藤を襲ったことがある墮天使はその二人だけだ。こいつらは関係ないだろ！」

それからしばらくリアスとミッテルトとカラワーナをどうするかの話し合いを数分ほどした。話し合いの末、リアスはようやく彼女達のことは条件付きで俺に任せることにしてくれた。

「それじゃあ、俺が出した条件で異論は無いな？」

「ええ、もちろんよ。数日の間に堕天使をどうにかしてなかったら消し飛ばすわよ」

俺が出した条件とは、俺がミッテルト達を説得してオカルト研究部には手を出さない様にするのだ。もし、説得することができなかつたらミッテルト達を消し飛ばすというものだ。

殺すには惜しい逸材だからな。そんなことはさせない。

話し合いが終わると俺は足元に魔方陣を展開した。

「それじゃあ、リアス。教会の地下に飛ぶぞ」

「ええ、分かったわ。朱乃はこの処理をお願い」

「はい、部長」

こうして俺はミッテルト、カラワーナにリアスを連れて教会の地下に飛んだ。

教会の地下に着くとそこでは木場と小猫が悪魔祓いと戦っていた。

「リアス部長！それにハース先輩も！」

「小猫、木場、無事か？」

「はい、無事です」

木場は西洋剣で悪魔祓いを切り倒し、小猫は拳で相手を殴り飛ばしながら返事をしていた。

「そうか。小猫、木場、二人とも下がれ」

それを聞くと小猫と木場は後ろに飛び、リアスの隣に立った。

「リアス、ここは俺が引き受けた。上に行つて兵藤のところに行ってやれ」

小猫と木場は俺を止めようとしていたが、それをリアスが治めた。

「わかったわ。ハースも速めに来るのよ。行くわよ、小猫、祐斗」

小猫と木場は少しだけ躊躇いながら、リアスと共に階段を上って行った。

三人が階段を上って行ったのを確認した俺は、ミッテルトとカラワーナを壁の近くまで連れて行き、起きなうようにゆっくり座らせた。

「貴様あ!! 悪魔と結託しているとはなんのつもりだ!!」

悪魔祓いの一人が叫ぶが、俺の知ったことではない。

「何を言ってるんだお前は? 俺はただ、さっきの後輩たちを助けるためにここにいるだけだぞ」

掌を前に突きだし、足元に魔方陣を展開させた。そこからは、巨大な岩に黒い鎖で全体を縛られた大鎌がある。その大鎌を握ると岩が砕けた。大鎌はまだ鎖で縛られている。

「さあ、来いよ。全員、まとめて相手してやる!」

そう言うと、悪魔祓いたちは全員で俺に斬りかかってきた。

Life・7 お前らは犬の餌だ

悪魔祓い達エックソシストと戦闘を始めてから数分が経っていた。周りには恐怖や絶望など負の感情に顔を歪めて死んでいる者達に、喉を食い千切られて死んでいる奴らの死体があつた。

その惨劇を見ていた俺の周りを紅い眼を爛々とした黒い犬が尻尾を振りながら歩いていた。

何故こんなことになつたのかは大鎌を構えて、悪魔祓いと戦おうとしたときに戻る。

悪魔祓いと戦闘を始め様と大鎌を構えると、目の前に魔方阵が突如として現れた。その魔方阵からは睨を閉じた一匹の黒い大型犬が出てきた。

「まったく。エレナの奴、余計なことを」

この黒い犬はヘルハウンドと呼ばれる冥府に生息している魔物だ。伝承ではイギリスやアイルランドの民話に登場するブラックドッグやバーゲストと同様、死を運んでくる魔物として有名だ。

エレナはおそらく俺がこの大鎌を出したのを感じとり、ヘルハウンドをここに召喚したのだろう。

このヘルハウンドは俺が幼い頃から使役している魔物で普段は冥府に放し飼いをしている。

理由は人間界には連れて来てはいけないからだ。連れて来るときは極稀のことで、その内の一つは俺が大鎌を出した時などだ。

「魔物を一体だけ呼んだところでこの状況に変わりはないぞ!!」

悪魔祓いの一人が叫び、剣を構えると他の悪魔祓い達もそれに呼応するかの様にそれぞれの獲物を構え始めた。

ヘルハウンドが相手の戦意を感じると、歯を剥き出し低い唸り声をあげて悪魔祓い達を威嚇し、地下全体に響くほどの大きな声で吠え

た。

それが引き金になったのか悪魔祓い達がヘルハウンドと俺に武器を構えて突撃してきた。

悪魔祓い達^{エクソシスト}を迎撃しようと武器を構えたが、ヘルハウンドが俺の前に出てきた。そしてヘルハウンドは閉じていた瞼をゆつくりと開いた。

その眼は紅く爛々としており、眼の奥には真つ赤な炎が燃えていた。その眼を見た悪魔祓い^{エクソシスト}達はなんの前触れもなく動きを止め、武器を落としてつた。

「う、うわあああああああ!!!」

悪魔祓いの一人が悲鳴を上げるとそれに続いて、ヘルハウンドの眼を見た悪魔祓い全員が悲鳴を上げ始めた。

「嫌だ、嫌だー!!」

「来るな、こつちに来るなあ!!」

「死にたくない!死にたくない!!!」

悲鳴を上げた奴らはそれぞれ別の反応をしていた。恐怖に顔を歪めて死んでいく者、正気を失って何もないところに話し掛けている者もいる。

ヘルハウンドの眼を見ずに済んだ奴らは突然起きたことに戸惑いを見せている。

「おい、お前らどうした!何をやっているんだ!」

その中でも冷静に状況を把握している奴らは正気を失っているもの達に声をかけていた。

ヘルハウンドは正気を保っている奴らから足音をさせることなく背後から一気に喉に食らい付き喉を引きちぎっていた。他にも虚空に話し掛けている奴らも同じようにしていった。その行為はまるで作業のように進んでいき悪魔祓い^{エクソシスト}達は一人、また一人と数を減らしていき、ついに地下には俺と二人の墮天使を除いて一人残らず生きていくものはいなくなった。

このようなことが起き、冒頭に戻る。

周りには悪魔祓いの死体だらけで、この惨劇を生み出したヘルハウンドは久しぶりに血の味に絶望していく奴らの表情を味わえたのが嬉しいのか機嫌が良さそうに尻尾を振っていた。

「ヘルハウンド、良くやった」

ヘルハウンドを誉めながら頭や喉元を撫でてあげると、この惨劇を生み出したとは思えない甘えた声を出した。

さて、そろそろリアス達の後を追うか。あつちも今ごろ決着が着いている頃だ。

ミツテルト達を肩に抱えて階段を上ろうとしたが、後ろにある死体の片付けを忘れていた。歩くのを止めた俺はヘルハウンドが来る時に通ったものより巨大な魔方阵を展開した。

その魔方阵からは巨大な獣が出てきた。その獣は死体を見るとよだれを垂らしながら死体を食べ始めた。ヘルハウンドはそれを羨ましそうに眺めていた。

死体なんてものをよく食べられるな、と考えながら俺は獣をその場に残してヘルハウンドと共に階段を上っていった。

階段を上り教会の聖堂に入るとそこでは白髪の男が兵藤に満面の笑みを向けていた。

「イツセーくん、イツセーくん。キミ、素敵な能力持っていたのね。さらに興味津々なり。殺したがいあるよねッ！キミ、俺的に殺したい悪魔ランキングトップ5入りだからヨロシク。次に出会ったらロマンチックな殺し合いをしようぜ？」

なんだ、あの少年神父は？兵藤に興味があるから殺すとか狂った考えの持ち主だな。

「じゃあねーバイバイーみんな、齒磨けよー！」

手を振ると、奴はその場から素早く逃げていった。追い付けない速さではないが、別に追いかけてなくてもいいだろ。

「さて、下僕にも捨てられた墮天使レイナーレ。哀れね」

リアスに対して恐怖を抱いているのか体を震わせているレイナーレは辺りを見渡していた。

あいつの眼にはこの場からどうすれば逃げられるかという強迫観念にたたさされているように見えた。

辺りを見渡していたレイナーレが俺を見るとまだ生き残れると思っただのか体の震えが止まった。

「カラワーナ、ミッテルト！寝ていないで私を助けなさい!!」

レイナーレが気を失っている二人に声を掛けたが、二人は起きる気配を見せない。どうやらレイナーレは俺を見たから助かると思った訳ではなくてミッテルトとカラワーナの二人を見たから助かると判断したんだろうな。

だが、声を掛けても無駄だ。しばらくの間はどんなことが起きても眼が覚めないように暗示をかけた。

レイナーレが何度もミッテルト達に声を掛けているが起きないと判断したのか次は兵藤に媚びるように近づいていった。

「イツセーくん！私を助けて！」

兵藤に助けを求めるその姿は哀れとしか言いようがなかった。

「この悪魔が私を殺そうとしているの！私、あなたのことが大好きよ！愛している！だから、一緒にこの悪魔を倒しましょう！」

涙を浮かべて兵藤に懇願しているが、あまりにもバカな行動に呆れて溜め息をついてしまった。ミッテルト達を聖堂の長椅子に座らせてヘルハウンドの傍に寄った。

「ヘルハウンド、あれは餌だ。食べてもいいぞ」

餌、という単語を聞いたヘルハウンドはレイナーレに飛び掛かり、兵藤に伸ばしていた腕に噛みついた。

「な、何よーこの犬は！放しなさい!!」

ヘルハウンドを振りほどこうと光の槍を形成しようとしたが、先にヘルハウンドがレイナーレの腕を噛み千切った。腕を噛み千切られた痛みに悲鳴を上げるが、そんなことお構い無しに次は喉に噛みついた。

「レイナーレ。お前は俺達が直接殺す程の価値もない。お前は犬の餌だ」

レイナーレは何度も助けを媚びていたが俺達はそれを無視していた。いや、無視しなければならなかった。ヘルハウンドがレイナーレの体の一部を噛み千切るたびに肉が千切れ、血が飛び散り、骨が砕ける音に、悲痛な悲鳴を上げていた。

兵藤はその光景を眼の前で見失ってしまっている。その場で嘔吐し、木場と小猫は酷すぎるあまり視線を反らした。リアスと朱乃は青ざめた顔でその光景を見ていた。

ヘルハウンドがレイナーレだった物を食べ終わったあとには、重苦しい空気に黒い羽しか残っていなかった。

ヘルハウンドが食事を済ませると、俺の傍まで歩いてきて口にくわえている淡い緑色の光を発光させている物を渡してきた。

「これは、『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』か」

レイナーレを食い殺していたときに偶然見つけてくれたんだろうな。

ヘルハウンドの頭と喉元をまた撫でてあげると先程と同じように甘えた声を出した。

「ハース、その神器を渡してちょうだい」

リアスが手をさしだして『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』を渡すように頼んできた。

一瞬だけ『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』に視線を移したが、リアスに『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』を渡した。

『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』を受け取ったリアスは兵藤の元に近づいていった。

「さて、これをアーシア・アルジェントさんに返しませうか」

「で、でも、アーシアはもう・・・」

兵藤の近くで倒れている金髪の女性を助けてあげられなかったのが悔しいのか、兵藤は顔を伏せてしまった。

「・・・部長、みんな、俺とアーシアのために本当にありがとうございしました。で、でも、せつかく協力してくれたけど、アーシアは・・・」

顔を上げて礼を言う兵藤だが、また顔を伏せて彼女、おそらくアシアの顔を見ていた。

「イツセー、これ、なんだと思う?」

リアスがポケットからの『僧侶』の駒を取り出した。

「それは?」

「これはね、イツセー。『僧侶』『僧侶』の駒よ」

「へ?」

間の抜けた声を出した兵藤はリアスを見つめた。

「あなたに説明するのが遅れたけど、爵位持ちの悪魔が手にできる駒の数は『兵士』が八つ、『騎士』、『戦車』、『僧侶』がそれぞれ二つずつ、『女王』が一つの計十五体なの。実際のチェスと同じね。『僧侶』の駒をひとつ使ってしまったているけれど、私にはもうひとつだけ『僧侶』の駒があるわ」

リアスが兵藤にこのことを話した意図がわかったぞ。つまり、もうひとつの『僧侶』の駒でアシアを蘇生するつもりなんだ。

リアスは駒を持ってアシアのもとに足を進めて彼女の胸に駒を置いた。

『僧侶』の力は眷属の悪魔をフォローすること。この子の回復能力は『僧侶』として使えるわ。前代未聞だけれど、このシスターを悪魔へ転生させてみる」

兵藤はリアスが何を言っているのかわかっていないのか首を傾けた。

「兵藤、リアスはその『僧侶』の駒を使えば彼女が生き返ると言っているんだ」

『悪魔の駒』にはそんな力もあるのかと知った兵藤は信じられないといった表情でリアスを見た。

「ほ、本当なんですか!部長!?!」

「ええ、そうよ。でも、死んでから時間が経ちすぎていると流石に生き返らせられないけれどね」

アシアが生き返るかもしれないという事を聞いた兵藤は嬉しそうに笑い出した。

話が終わるとリアスの体を紅い魔力が覆い、兵藤を悪魔にしたときとは違う呪文を唱えた。

その時、駒が紅い光を放ちアーシアの体に入り込まれていき、それと一緒にアーシアの『聖母の微笑』トワイライト・ヒーリングも淡い緑色の光を発光させて入り込んだ。

その二つがアーシアの体に入るのを確認すると、リアスは体を覆っていた紅い魔力を解いた。

息を吹いたリアスはアーシアの傍から離れた。すると瞼を閉じていたアーシアが少しずつ瞼を開き始めた。

瞼が完全に開くと府抜けた声を出して辺りを見渡した。それを見ていた兵藤は今にも泣きそうな顔をしていた。そんな兵藤にリアスは優しい笑みを浮かべた。

「悪魔をも回復させるその子の力が欲しかったからこそ、私は転生させたわ。ふふふ、イツセー、あとはあなたが守っておあげなさい。先輩悪魔なのだから」

イツセーにアーシア守るように言ったりリアスは俺の傍に来た。

「お疲れ様、ハース。今日はありがとう」

「別に礼を言われるためにしたんじゃない。俺は大切な後輩を殺そうとした墮天使に個人的な恨みを抱いたからやっただけだ」

そんな俺の態度にリアスは眼が点になると、口を押さえて、肩を震わせながら笑いそうになっていた。

「俺は何か変なことを言ったか？」

「いいえ、ごめんなさい。あなたがそういう人だというのを改めて思い出しただけよ」

どういうことだ？俺はいつもどうりのはずなんだが。

「ところで、リアス。兵藤はどうやってレイナーレに勝ったんだ？今のあいつの実力だとレイナーレには勝てないはずだが？」

兵藤だけが戦った可能性は低いと思った。聖堂には木場と小猫の二人も向かったのだから加勢していると思ったのだが、木場達が加勢した痕跡が見当たらない。そのことから兵藤は単独でレイナーレを倒したと考えた。

「そうね、今のイツセーからはレイナーレを倒したようには見えませんが、確かにイツセーは一人でレイナーレを倒したわ。私がこの眼で見えていたのだから」

「どうやってレイナーレに勝ったんだ？」

「イツセーの神器は『龍トウフェイス・クリティカルの手』なんかじゃなくて『赤龍帝の籠手ブーステッド・ギア』だったの。レイナーレとの戦闘の途中で神器が覚醒したおかげでイツセーはレイナーレに勝ってたわ」

『赤龍帝の籠手』、それを聞いた俺は顔にこそ出さなかったものの内心は驚愕に満ちていた。

「そうか、イツセーが今代の『赤龍帝』か。こんな運命もあるんだな・・・」

皮肉なものだ、俺の知り合いには『白龍皇』がいるんだ。今頃ヴァーリの奴はライバルの出現を感じ取って喜んでいるのかもしれないな。

「ねえ、ハース。私も聞いてもいいかしら？」

「なんだ？」

「あの黒い犬はなんなの？」

リアスは俺の後ろで寝ているヘルハウンドに指を指した。

「あいつはヘルハウンド。名前ぐらいは聞いたことあるだろう？」

ヘルハウンドの名前を聞いたリアスは顔を真っ青にしていた。

「ヘルハウンドって、冥府に生息している魔物じゃない！どうしてそんな魔物があなたの傍にいるのよ!？」

不味いな、このことは親友のリアスにも話すわけにはいかないな。

「リアス、これだけは言っておく。このことについてはあまり深く知ろうとするな。三大勢力にも大きな影響を与えるぞ」

リアスは俺の言ったことを理解したのか「わかったわ」とだけ言っただけで今日は引き下がってくれた。良かった、引き下がってくれて、そうでもしてくれなかったらリアス達の記憶を変えなきゃいけないからな。

俺はリアスとの話を終えると兵藤とアーシアの二人を見た。それだけ確認すると聖堂にある長椅子に座らせていたミツテルト達を持ち上げて、ヘルハウンドと共に家に帰った。

Life・8 墮天使のいる日常

教会での戦いを終えた俺は魔方陣を展開し、ミッテルト達を肩に抱えてヘルハウンドと共に家に帰ってきた。

魔方陣を通してリビングに着くとそこにはエレナと真紀が待っていた。

「お疲れ様です、ハース。．．．彼女たちはなんですか」

エレナの視線はミッテルト達に向けられていた。この時エレナの疑問にどう答えるか一瞬だけ迷ってしまった。何故なら俺はこの町にいる墮天使を全て殺すために出掛けたのに、その墮天使を連れて帰ってきたんだ。だからどう説明するか迷ってしまった。

「その事についてはあとで説明する。とりあえず今はシャワーを浴びたいんだ。真紀、彼女たちをソファアに寝かしておいてくれ」

エレナはどこか納得できないところもあるようだが、それでも俺の頼みを聞くと小さく溜め息をし、真紀はソファアに座っていたがその事を聞くとすぐに立ち上がった。

「分かりました。先程の質問はあとで教えてください」

「あいよ、任せときな。ついでにこいつの面倒も見といてやるよ」

シャワーを浴びるためにミッテルト達を真紀に預けるとヘルハウンドの面倒も見てくれると言ってきた。

真紀がミッテルト達を寝かせるためにヘルハウンドを連れてソファアに向かって行った。

真紀がソファアに向かうのを確認した俺はシャワーを浴びるために風呂場に向かい、シャワーを浴び始めた。

シャワーを浴び始めてから数十分程の時間が経ち、髪の毛をタオルで拭き取りながらリビングに向かって歩いていった。

リビングに着くと、ここではエレナがヘルハウンドの頭を撫でながら毛繕いをしていた。ヘルハウンドは毛繕いをされていて気持ち

良いのかすでに寝息をたてながら寝ていた。

その様子を見ていて微笑ましいと思っていたが、ヘルハウンドは一応、教会で死体の山を作り出した元凶だということを忘れてはいけない。

真紀はリビングの奥にある台所で料理を作っていた。彼女は和食をよく作るので、今も和食を作っているんだろう。

ミッテルト達は未だにソファアの上で寝ていた。

彼女達の事を確認した俺は自分の部屋に行くために階段を登って行く。

部屋の中に入った俺は受話器を取った。そして電話先の番号を打ち込んでいき、相手が電話にでるのを待つ。電話が三回鳴り終わると同時に電話先の相手が出た。

『お前さんから電話が来るなんて珍しい日もあるんだ。ひさしぶりだな、ハース』

電話先の相手は陽気な声で俺の電話に出てきた。

『そんな日もあるさ、アザゼル。そっちはどうだ?』

電話先の相手は墮天使の総督をしているアザゼルという墮天使の男だ。彼に電話をしたのはミッテルト達の事を報告するためだ。

『こっちは新しく考えついた人工神器の作成が楽しくて充実した日々を送っているぜ。まあ、仕事を忘れてはシエムハザに無理矢理、仕事をさせられているがな』

『何をやってるんだ、あんたは。・・・まあ、いい。今日は伝えなければならぬことがあるんだ』

『伝えたいこと? どのような内容だ?』

『神の子を見張る者』に所属している墮天使四人がグレモリー家の者に手を出したことだ』

手を出したと言うと、電話越しでアザゼルが何かの飲み物を吹き出した音が聞こえた。

『・・・ハースが言ったことが事実なら手を出したのはサーゼクスの妹か?』

『正解だ、アザゼル。魔王の実妹、正確にはその妹の眷属に手を出した

んだ」

アザゼルは俺が住んでいる町に魔王の妹が二人もいることは知っており、『神の子を見張る者』に所属している堕天使もその事は知っているだろう。

魔王の妹の一人はグレモリー家の者で、堕天使が手を出したのはリアスだけになる。

『妹の方に直接手を出さなかったただけまだましか。だが、グレモリー家の者は眷属に対しては慈愛が深いからな、眷属に手を出した時点でそいつらは終わっていたんだらうな』

「当然だな、実際に魔王の妹は眷属が襲われたのを知ったらすぐに報復しようとしたんだからな」

『そうか。それで、俺の部下がどうなったのかを教えてくださいるか？』
「少し長くなるぞ」

それから俺は兵藤がリアスの眷属になるまでの経緯を詳細に話始めた。その話が終わると堕天使が兵藤に何を話したのかを話し、最後にそいつらがどうなったのかを教えた。

『そうか、その眷属に手を出した二人は既に処分されたのか。他の二人は今もお前さんのところに居るんだな』

「そうだ。彼女たちの処遇は堕天使総督としてどうするつもりだ？」
『魔王の血縁者、それも実の妹に手を出したんだ。そいつらが手を出していないでもそれなりの罰を与えないといけないな』

「それで、結局どうするつもりだ？」

『そいつらが『神の子を見張る者』に所属していた事を無かったことにして、そいつらをこの世から消すか、あるいはお前さんのところに預けるかのどちらかだな』

この世から消す、つまり彼女達を殺すということだな。だが、アザゼルは俺に預けるとも言った。これはつまり、彼女達を殺すか、あるいは俺が彼女達の身柄を預かり育てるか俺が決めていいことになる。その事については既にどうするか決まっている。

「なら、俺が預かることにしよう。俺が殺さなかったのも中々の逸材だと感じたからだしな」

『お前さんが気になるレベルか、惜しい奴らを無くしたよ。とりあえずそいつらにはもう『神の子を見張る者』には所属していないということを見せておいてくれ』

「分かった。俺が教えておきたかったのはこれだけだ。またな、アザゼル」

『ああ、またな。そいつにしつかり教えておいてくれくれよ』

そして電話を切ろうとしたが、ヴァーリに教えなければならぬことを思い出して切るのを止めた。

「待った、アザゼル。一つが伝え忘れていたことがあったんだ」

『ん？どうしたんだ』

「ヴァーリに伝えておいてくれ。『赤龍帝』が目覚めたぞってな、それだけだ」

『・・・おいおい、遂に今代の『赤龍帝』が目覚めたのかよ。ヴァーリが聞いたら喜びそうだな』

「ちなみにその『赤龍帝』はさつき話した眷属のことだからな」

『・・・そうか、まあ、その、なんだ。頑張るように言つといてくれ』

アザゼルは何かを察したのか申し訳なきそうに言ってきた。まあ、しようがないよな。この間まで一般人だったやつがいきなり悪魔になったと思つたら今度は『赤龍帝』だと言われたんだ。そんなやつが歴代最強の白龍皇とまで言われるヴァーリにまともに戦えるかどうかはわからないんだ。アザゼルが何を思ったのかは何となく分かるよ。

「そういうことで、ヴァーリによろしく伝えておいてくれよ」

『分かった。それじゃあな』

今度こそ電話を切った俺は、自分の部屋を出てリビングがある一階に降りていった。

リビングに着くとそこではエレナと真紀が料理を机の上に並べていた。ミッテルト達はソファアの上で俺たちの事を警戒していた。

「やっと目が覚めたか。ミッテルト、カラワーナ」

声に反応して彼女たちは俺の方に勢いよく振り向いた。

「貴様、あの時の!!」

「ドーナシークの旦那を殺した人間!!」

彼女たちは光の槍を形成しようとしたが、その前に彼女達の背後に一瞬で回り込み、彼女達の手首を掴んだ。

背後にいつの間にか居たことに彼女達は驚いたのか槍を形成するのを止めてしまっていた。

「いきなり攻撃しようとするのは止めてくれないか？話したいことがあるのに話せないじゃないか」

彼女達は俺を見上げるような体勢で見えてきたが、すぐに顔を反らした。なんでだ？そんなときにも俺は空腹を感じていたので、台所に居る真紀に声を掛けた。

「真紀、夜食の準備はできたか？」

真紀に夜食が食べられるか聞いてみたが、夜食だろうと思われる物は既に机の上に並べられていた。

「いつでも食べられるよ。今日は何時もより多めに作っておいたからね」

準備ができていたのを確認した俺はソファーにいるミッテルトとカラワーナの手首を引き上げ立たせた。

「とりあえず今は攻撃するのは止めて、一緒に飯を食べないか？そのときに全員に話したいこともあるからね」

彼女達の手首から手を放した俺は和食がメインで並べられている机の前にある椅子に座った。

エレナと真紀が椅子に座ってもミッテルト達は椅子に座ろうとしなかった。

まあ、そうだろうな。数時間前まで殺し合いをしていた相手の家にいて、更にはご飯も食べようと言われたら警戒もするさ。

「そんなに警戒しなくても大丈夫だ。取って食う訳でもないんだ、速く座れ」

優しく言ったつもりなのだが、それでも彼女達は警戒を解こうとし

なかった。仕方なく俺は真紀に視線を向けて助けを求めた。

真紀は視線に気が付いたのか、やれやれと言わんばかりの表情をしていた。

「二人とも、私達はあんた達に乱暴なことをするわけじゃないんだから速くこつちに来て私の作ったご飯を食べな」

真紀は椅子から立つとミッテルト達の所まで歩いていき、彼女達の背中を押して来て椅子に座らせた。

真紀が椅子に座つたのを確認してからミッテルト達の様子をしてみるが、さつきよりは少しだけ警戒を解いているように見えた。

「ほら、ハース。みんな座つたんだから冷めないうちに速く食べるよ」

真紀に声を掛けられて、エレナ達がいつでもご飯を食べれる状態で待っていることに気が付いた。

「ああ、そうだな。それじゃあ、いただきます」

食事を始める前の挨拶を俺がすると、エレナ達も一緒に同じ事をした。挨拶をしたら、自分の前に置いてある料理に箸を伸ばしてどんどん食べ始めた。

真紀が作った和食はやはり美味しいな。俺達の中だと一番和食を作るのが上手いんだから当たり前だろうけどな。

味噌汁特有の味を楽しみながらミッテルト達の様子を見てみるが、彼女達の前に置いてある料理は手をつけられていなかった。

おそらく、彼女達は料理の中に毒が混ぜられているかもしれないと思っっているんだろうな。

「毒は混ぜていないから心配さなくてもいいぞ。冷めないうちに速く食べる」

真紀が作った料理を食べるように促すと、ミッテルトが箸を戸惑いながらも持ち上げ、目の前にある料理のひとつに箸を伸ばして掴み、自分の口の中に持つていった。すると、彼女が料理を口の中に入れてから何回かゆつくりと嚙んでいるとその度に彼女の顔が明るくなっていくのが分かった。

「真紀が作った和食は美味しいだろう？まだあるからどんどん食べる」といいぞ」

それを聞いたミツテルトは警戒心を解いて目の前に置いてある和食を食べ始めた。隣に座っているカラワーナは未だに戸惑いながらも先程のミツテルトのようにゆっくりとだが、真紀が作った和食に箸を伸ばして、口の中に持つていった。

カラワーナもミツテルトと同じ様な反応をしてから、俺の事を見てきたが、俺は食べても良いぞと目で教えた。

それを確認した彼女はミツテルトとは違いゆっくりとご飯を食べ始めた。

彼女達が警戒心を解きはじめてから数分が経ち、和食をそろそろ食べ終わりそうだというのを確認した俺はアザゼルと話したことを教えようとした。

「まだ食べている途中で悪いが話さなければならぬことがあるからな聞いてくれ」

エレナ達は俺の呼び掛けに反応してご飯を食べるのを止めた。ミツテルト達も周りの様子に気が付いたのか箸を置いて話を聞く体勢になってくれた。

「エレナ、もう気付いているかもしれないが彼女達は俺が殺そうとした墮天使の生き残りだ」

「やはりそうでしたか。こんなことをしてリアスさんは怒らなかつたんですか？」

「怒つたさ。今まで見たことがないくらいに怒っていたぞ」

当たり前だろと言わんばかりの様子で話すとエレナは溜め息をついていた。

「何をやっているんですか、ハース。リアスさんはなるべく怒らせたくないと言っていたのは貴方のはずでしよう？」

確かに俺はリアスを怒らせないようにしようと言ったのは俺だが、過ぎたことを気にしたら埒が明かないだろう。

「それはそうだが、ミツテルト達については条件付きで見逃してもらったから問題はないだろ」

エレナはさつきよりも深い溜め息をついていた。

「そうですか。でしたら今度御会いする時には何かお詫びの品を渡さなければなりませんね」

エレナはリアスに迷惑を掛けたのだからそのお詫びをしようと思案してきた。勿論、明日リアスに会うときにはそうするつもりだ。

「分かっているさ、エレナ。心配しなくてもいい。さて、ここから本題だ。話をしっかり聞いておいてくれよ」

それから俺はアザゼルとの話し合いの内容を全員が解るように説明し始めた。ミッテルト達は俺が墮天使総督と知り合いだということに驚き、話の内容を聞いたら絶望したのか顔を下に向けていた。

「というわけで、ミッテルトとカラワーナは帰る場所が無くなったわけだがこれからどうする?」

彼女達は顔を下に向けたまま小さな声で話始めた。

「そんな・・・私達の帰る場所が無くなっていたなんて、私達は何て事をしてしまったの」

それに関しては自業自得としか言いようがないな。魔王の妹に手を出さなければよかつただけだな。

「さて、ミッテルトとカラワーナの今後についてだが、選択肢が三つある。ひとつ目はこの場で死ぬこと。二つ目は俺の仲間になること。最後の三つ目は墮天使であるということ忘れて表の世界で生きていくかのどれかだ。さあ、お前たち二人はどうするつもりだ?」

彼女達はお互いの意見を確認したいのか少し距離を取って話し合いをしていた。

話し合いをしてから数分が経つと、意見が纏まったのかこちらに戻ってきた。

「聞きたいことがあるのだが、三つ目の選択肢については、どうするつもりなんだ?」

「簡単なことだ、お前たちの墮天使だった頃の記憶を消して別の記憶を埋め込むつもりだ」

「そうか、二つ目の選択肢はどういう事をするんだ?」

俺の仲間になることか。これはその言葉の通りだな。共に協力し

て戦い、生活していくことだ。

「それはその言葉の通りさ。共に協力して戦い、生活していくことさ」
「・・・そうか、少しだけ考えさせてくれ」

「ああ、構わないぞ。考えるといってもそんなすぐに決められるとは思っていないからな、一週間の間は考えても良い。今後の事を決めることなんだ、ゆっくりと考えろ。それまでは俺達もそれなりの生活は保証しよう」

「ありがとう。えっと、名前は何て言うんだ？」

そう言えばお互いの自己紹介をしていなかったな。

「俺の名前はハース・ベスタード。こいつらのリーダーをしている。よろしく。で、俺の隣にいる彼女の名前はエレナ・ルタス、そしてエレナの更に隣にいるのが土御門真紀だ」

彼女達の名前を言っていくと、それぞれミッテルト達の前に出て手を差し出した。

「エレナ・ルタスです。以後、お見知りおきを」

「土御門真紀だ。よろしく頼むよ」

「ミッテルトつす。よろしくお願いしまっす」

「カラワーナだ。よろしく頼む」

彼女達はお互いの挨拶が済むと手を握り合った。その様子を見ていると右手に突然なにかが噛んできた。手を見ると、ヘルハウンドが俺の事は紹介してくれないの?、と目で訴えてきていた。

「それと俺が使役している魔物のヘルハウンドだ」

こうして今、家の中にいるメンバーの自己紹介が終わり、またご飯を食べ始めた。この時には既にミッテルトとカラワーナは警戒心を解いてエレナと真紀に話をしていた。俺はこの家族のような集まりが続いてほしいと思いつながら食事を進めた。

Life 9 墮天使の幸せ

けたたましく鳴る目覚まし時計の音に意識が少しずつ目覚め始めた俺は顔を枕に沈めながら音を頼りに目覚ましを手探りで探していた。

右手に目覚まし時計のスイッチが当たり、それを押してアラームを止めた。

何時もより早めに目覚ましを設定したせいで意識が朧げだが、両手をベッドに押し当てて起き上がろうとすると、左手はベッド特有のふかかな感触なのに対して、右手は柔らかい何かに触れた。

右手に触れた物が何なのか分からなかった俺は右手のある方を枕から顔を横にずらして見てみた。

すると、そこには寝息を立てながら寝ているオフィスの顔があった。それに驚いた俺は慌てて上半身を起こしてオフィスの事を見た。オフィスは一糸纏わぬ姿で寝ていて、俺の右手はオフィスの小さな胸の上に置かれていた。

「……………は？」

なんで俺の部屋にオフィスが居るんだ。いや、それよりなんで服を着ていないんだ？そうか、これは夢なんだ。オフィスがこんな姿で俺の隣にいるはずがないんだ。

これが悪い夢だと思った俺は自分の顔を思いっきり殴った。鈍い音が部屋の中に響いたがそのおかげで目が覚めた。

そして再び右手を置いていたところをもう一度だけ見てみるとそこには先程と同じ様子でオフィスが寝ていた。

これが夢ではなく現実だと分かるまで頭の中が真っ白になっていた。そしてこれが現実だと分かった俺はあることを思い、そして叫んだ。

「なんでだー！ー！??」

朝早くから大声を出し、その声は家全体に轟いた。

それから数秒もしない内に、俺の部屋に向かって誰かが走ってくる音が聞こえた。

そして部屋の扉を勢いよく開けてきたのは、白いパジャマを着たエレナだった。

「どうかしたんですか、ハース!!朝からそんな大声……を……出……して……?」

扉を勢いよく開けたエレナは俺とオーフィスを見てしまうとその場で固まってしまった。

「お、おい、エレナ?」

エレナに声を掛けてみるが、反応がなかった。あのままにしておくのは不味いと思つた俺は隣で寝ているオーフィスに声を掛けて起すことにした。

「おい、オーフィス起きてくれ」

オーフィスに声を掛けながら体を揺らしてみるのが、起きる気配が全くなかった。仕方ないと思つた俺はオーフィスを起こすのを諦めてベッドから出た。

すると、ベッドから出たのに気が付いたのかやつとエレナが正気に戻つて顔を横に振つた。

「ハ、ハース!!何をしていたんですか!?オ、オーフィスと一緒に寝ていただなんて……」

正気に戻つた瞬間に俺がオーフィスと寝ていたことについてエレナが顔を赤くしながら質問してきた。

「エレナ、そのことについてだが」

オーフィスはいつの間にか俺のベッドで寝ていたんだ。と、言おうとしたら先にエレナが口を開けた。

「オーフィスとだけ寝ているなんてずるいです!!なんで私と寝てくれないんですか!?私とも寝てください!!」

大声を出したエレナは一気にパジャマを脱ごうとした。それを止めようとしたが、エレナの後ろにいつの間にか真紀が立っていて、エレナの肩に手を置いていた。

「エレナ、何をやっているんだい。こんなところで?」

真紀が俺の代わりにエレナを止めてくれたようだった。

おかげでエレナがパジャマを脱ぐという事態を防いでくれた。

「すまないな、真紀。エレナを止めてくれて」

「いいよ、そんなことは。それより何があつたんだい？」

真紀の質問に俺はオーフィスが俺の隣に寝ていたこととエレナが突然パジャマを脱ごうとした事を話した。それに関して真紀は何かを思い付いた顔になった。

「そうかい、そうかい、そういうことかい」

そう言うと真紀がエレナに耳打ちをした。真紀が話終わるとエレナの顔が先程より赤く染まりだした。

何を話したんだ、真紀の奴？エレナの顔が真っ赤になっているじゃないか。

するとエレナが突然パジャマを上からゆっくりと脱ぎ始めた。

って何をしてるんだエレナの奴!?

「何をしてるんだエレナ!?!そしてなんで真紀はそんな良い笑顔をしているんだ!?!」

エレナは遂に耳が赤くなるまで顔を染めるとパジャマを脱ぐのを止め、真紀は笑いを堪えているのか肩を振るわせていた。

「いやね、エレナに男は一気に服を脱ぐより上からゆっくりと服を脱いだ方が興奮するもんだよっておしえたんだ」

・・・何て事をエレナに教えているんだ。確かにゆっくりと服を脱いだ方が興奮はするが、なんでだよ。

「はあ、とりあえずエレナは部屋に戻って制服に着替えてこい。真紀はいつもより速く起きたんだから着替えてから朝食の準備をしておいてくれ」

エレナと真紀にそう言うと二人はそれぞれ自分の部屋に戻るために部屋から出ていった。

さて、オーフィスはべつに起こさなくても良いだろう。おそらく朝食の匂いで起きるだろうからな。ミツテルトとカラワーナは後で起こしに行こう。

そして俺は制服に着替えてからリビングまで降りた。そこでは台所で朝食を作っている真紀とさっきの事を思い出したのか俺と目が合うとすぐに視線を逸らしたエレナがいた。

真紀が朝食を作っていると、リビングの扉が開いた。開けたのはエレナのパジャマを借りて寝ていたミツテルトと真紀の寝巻きを着ているカラワーナだった。

ミツテルトは起きたばかりなのか目元を擦っており、カラワーナは胸元を整えながらリビングに入ってきた。

「おはよう、ミツテルト、カラワーナ。昨日はよく眠れたか？」

「ウツス。昨日は久しぶりにゆっくりと眠れたっす。おかげでまだ眠気がとれてないっすよ」

大きな欠伸をしながらミツテルトは口元を片手で隠した。

その眠そうな様子につい鼻で笑ってしまった。いまのミツテルトは年相応の少女にしか見えなかったからだ。

「そうか、なら眠気を覚ました方がいいだろうな。洗面所で顔を洗ってこい。場所は昨日の夜に教えたから分かるよな？」

「ウイツス」と返事をしたミツテルトはおぼつかない足取りで洗面所まで歩いて行った。

さて、次はカラワーナだな。カラワーナは寝巻きのサイズが合わないのかミツテルトと話している間も胸元を整えていた。

「カラワーナはどうだった？」

「ええ、おかげさまでよく眠れた。わざわざ寝巻きまで貸してくれたのには感謝している」

「そうか、それはよかった。寝巻きについては真紀に感謝してやってくれ」

感謝をするなら俺ではなく真紀にしてくれと言うとカラワーナは「そうか」と言うと言うと真紀の隣まで歩いて行った。

それから真紀とカラワーナは何かを話しているようだった。おそらく寝巻きを貸してくれたことについて話しているんだろう。

話が終わるとカラワーナはリビングに戻って来ないで真紀と一緒に朝食を作り始めた。

その光景に驚きはしたがおそらくカラワーナは寝巻きを貸してくれてことへのお礼として朝食の手伝いをしているんだろう。

その光景を見ているとリビングの扉がゆっくりと開く音がした。

扉の方を見てみるとそこには先程の姿とは違い黒いワンピースを着たオーフィスがそこにいた。

「我、起きた」

そう言い終わると同時にオーフィスの腹が鳴る音がした。どうやらオーフィスはお腹が空いたらしい。

「真紀、朝食はまだできないのか？」

「いま作り終わったところだよ。そっちに持っていくから少し待ってな」

真紀が朝食を作り終えたと聞いたオーフィスは俺の隣にある椅子に座った。

オーフィスが俺の隣に座ったのを見計らい真紀とカラワーナが朝食を運んできた。それと同時に洗面所から帰ってきたミツテルトがエレナの隣に座った。

そして俺たちはいただきますの挨拶をしてから朝食を食べ始めた。朝食を食べ始めてからミツテルトとカラワーナの様子を見てみるがどうやら昨日よりは警戒をしている様子は無く、真紀とエレナの二人と楽しげに話をしていた。

それからしばらくして全員が朝食を食べ終わると、ミツテルトが俺の傍まで近づいてきた。

「ハースさん。ちよつと気になることがあるんすけど」

「気になること？彼女のことか」

オーフィスの事を見るとミツテルトはそうだと言いたいのか小さく頷いた。

「昨日の夜に彼女はいなかったスから気になったんす。彼女は何者なんすか」

そうだな、オーフィスについてはまだ教えていなかったな。だが、今は教えない方がいいだろう。彼女達はまだ俺の仲間になった訳じゃないからな。

「ミツテルト、彼女についてはそこまで詳しく知らなくていい」

朝食を食べ終えた食器を台所に運んでいこうとすると、ミツテルトが俺を呼び止めた。

「え、それだけスか？」

「そうだ。俺の仲間になつてから彼女のことは詳しく教えてやる」

食器を台所に置き、水で洗い流した後は自分の部屋に戻ろうとリビングの扉を開けようとした。

「ああ、そうだ。言い忘れるところだったが、ミッテルトとカラワーナは後で俺と一緒に学園に行くから着替えておけ」

それを聞いた二人は疑問を抱いたのか、お互いの顔を確認し合つた。

「それはグレモリー家の者に会いに行くからか？」

「そうだ。二人の事をグレモリーの者、リアスに伝えなきゃいけないからな」

「そういうことなら分かった。何時でも行けるように支度しておこう」

「頼むぞ、カラワーナ。ミッテルトもだぞ」

食器を台所に運んでいたミッテルトに伝えると「了解っス」と言う返事が聞こえた。

それを確認した俺は部屋に戻り、教材の入ったカバンを持ってエレナと一緒に学園に向かうために玄関まで来ていた。

見送りには真紀にミッテルトとカラワーナの三人が来ていた。

「それで、私たちはどうすればいいんだ？」

「ミッテルトとカラワーナを呼ぶときは魔方陣を展開するから、そこから学園に来てくれ。詳しいことは真紀に伝えてあるから聞いておいてくれ」

目線を真紀に向けると真紀は一度だけ頷いた。ミッテルトとカラワーナも真紀と同じように頷いた。それを確認した俺は、行つてくると言つてから家を出た。

旧校舎にあるオカルト研究部までの道のりを歩いていると、小猫、木場、朱乃の三人と出くわした。

「なんだ、朱乃たちも今からオカルト研究部に行くのか？」

「ふふ、はい。私たちも今からオカルト研究部に行くところですよ」

朱乃はいつもの笑顔でそう答えてくれた。それから俺たちは世間話をしながらオカルト研究部の部室まで行った。部室の中には既にリアスに兵藤、それと金髪の長髪に緑色の目が特に目立つ少女がいた。

「おはよう、リアス、兵藤、それと・・・」

俺が金髪の少女の名前がわからなくて悩んでいると、彼女はそれに気づいてくれたのか俺の傍まで小走りで近づいて来た。

「あ、はじめまして。私はアーシア・アルジエントと言います！アーシアと呼んでください」

彼女、アーシアはそう言いながら頭を深く下げてきた。それに対して俺も頭を下げて挨拶をすることにした。

「アーシア・アルジエントか、いい名前だ。俺の名前はハース・ベスタードだ。よろしく、アーシア」

挨拶を済ませた俺は右手を出して握手を求めた。それに対してアーシアは顔を明るくして元気よく「はい！」と言い、俺の握手に握り返して答えてくれた。

それからアーシアはエレナにも同じように挨拶をするために近づいて行った。アーシアが俺の傍から離れたので、その間にリアス達の間まで歩いて行った。

「おはよう、リアス。なかなか良い子が眷属になったじゃないか」

アーシアのことをほめてあげるとリアスは誇らしげな顔になった。

「そうでしょう？最初はアーシアに宿っているレアな神器に目を付けたのだけれど、どうもその考えは間違っていたみたいね。あんなに良い子は滅多にいないでしょうから大切にしていあげようと思うわ」

「それはいいことだ。神器に目が眩んだことは感心できないがな」

「しよがないでしょう？私の眷属には回復要員が居ないんだから」

リアスはしよぼんとしながら答えた。普段から大人のお姉さんの

ような雰囲気なのに時々年相応の女性になるからその時のギャップがかわいいんだよな。まあ、回復要員が欲しくなることについてはしようがないか。

「それとリアス。大事な話があるんだ」

雰囲気が変わったのに気付いたのキャリアスも真面目な雰囲気に変わった。

「どういったことかしら?」

リアスから視線を逸らしエレナに視線を向けると、それに気づいたのか小さく頷いた。それを確認した後、部室の中心に俺の家と繋がっている転移用魔法陣を展開した。そこからは打ち合わせ通りにミツテルトとカラワーナが現れた。

二人が現れたのにリアスは驚いていなかった。おそらく俺が話そうとしていたことが彼女たちのことについてだとなんとなく予想していたんだろう。だが、兵藤たちは違うように突然のことに驚いているのか話が止まっていた。

「ちよっ!? ハース先輩なんでこいつらがここにいるんですか!!」

「そのことについてはこれから詳しくリアスと話すから話を聞いておけ」

そしてリアスに家で話したミツテルト達についてのことを詳しく話した。それに関してリアスはなんの意見も言わず、俺に全部任せると言ってくれた。

それを聞いた俺はミツテルトとカラワーナを呼んだ。そして二人にはオカルト研究部に謝罪をするように言った。二人ともそうなることは真紀から聞いていたようにちゃんと頭を深く下げて謝罪の言葉述べた。

その態度に兵藤たちは対応に困っていたが、アーシアが二人の前に出て手を取り二人の事を許して、さらには友達になつてくださいますと言ってきた。その対応がまるで本当の女神のようだった為、二人は大号泣をしながらアーシアに抱きついた。その二人の様子とアーシアの対応には流石の兵藤たちも二人のことを許す気になったのか昨日の教会の件については許すと言った。

それを聞いたミツテルトとカラワナーは何を言っているのかわからないぐらいに感謝の言葉を言っていた。そして俺たちは二人が泣き止むのを待った。

ミツテルトとカラワナーが泣き止むと、リアスが手を叩いた。

「さて、話も終わったみたいだし、そろそろ今日のメインイベントを始めましょう」

そういうとリアスは指を鳴らした。

すると、テーブルの上に大きなホールケーキが出現した。その大きさはオカルト研究部員だけでは食べきれないほどの大きさだった。それを見て思ったことは、俺が仲間も連れてくると推測したんだなと思っただ。

「ありがたいな、リアス。俺たちの分まで準備してくれて」

リアスが照れくさそうに咳払いをした。

「た、たまにはオカルト研究部員以外の人と集まって朝からこういうのもいいでしょ？あ、新しい部員もできたことだし、ケーキを作ってみたら、みんなで食べましょう。もちろんあなた達ふたりもね」

リアスの言葉を聞いた二人は心底うれしそうな顔になりパーティーに参加した。俺もそのパーティーに参加しケーキを食べた。ケーキを食べているとミツテルトとカラワナーの二人が傍まで来た。

「ミツテルトにカラワナーか、どうしたんだ。ふたりして俺のところに来るなんて。せっかくのパーティーなんだから楽しめよ」

「ええ、そうしたいのですが、ハースにどうしても伝えたいことがあるんです」

なんだ、二人が真剣な顔になって詰め寄ってきたぞ。

「ハースの仲間になるって話っすけど、今日からうちらはハースの仲間になるっす！」

そのことを聞いた俺はとてもよろこんだ。自分じゃ分からないかもしれないがたぶん、嬉しそうな顔になっているんだろう。

「そうか、仲間になってくれるか。だったら俺も二人のことを歓迎しよう。これからよろしく頼む」

こうしてミツテルトとカラワナーは仲間になることになった。正

式な仲間になるのは家に帰ってからだがな。

そういったこともあり、朝早くからのパーティーは予鈴がなるまで
続き、ミツテルト達は先に家に帰った。

学園から家に帰ってきた俺はオフィスの傍に近寄り、なぜ日が昇
るより早く来たのかを聞いた。

「オフィス、今日はなんで俺のところに来たんだ」

そう言うとオフィスは俺の顔を覗き込んで口を開いた。

『『禍の団』のメンバー、今日、集まる』

「・・・そうか、わかった全員に伝えてから支度するから少し待ってて
くれ」

オフィスにそう言った俺は全員を集めて『『禍の団』』のことを話し
た。それを聞いたエレナと真紀は迅速に支度を始めた。ミツテルト
とカラワーナも二人の支度を手伝いに行ってくれた。

そして支度が終わり、俺たちは『『禍の団』』のメンバーに会うために
オフィスが開いた次元の狭間に入っていった。

Life. 10 『禍の団』の集まり①

『禍の団』のメンバーが今夜中に集まると聞いた俺たちは支度を済ませ、オーフィスが開いた次元の狭間を漂っていた。

そこでは今、ミッテルトがこれから何処に行くのかを聞いていた。

「ハースさん、これから何処に行くんすか？それと、さつき言っていた『禍の団』ってなんすか？」

ミッテルトが気にするのは無理もない。ミッテルトとカラワーナにはまだ俺の事を詳しく教えていないからな。

「そうだな、俺たちは今『禍の団』のメンバーが集まる場所に向かっている。『禍の団』ってのはオーフィスをトップに活動しようとしている組織のことだ。組織されてから日が浅いから知らなくて当然だ」

オーフィスをトップにしている組織だと聞いた途端にミッテルトは体を固めてしまった。

体を固めたミッテルトの目の前で手を振りながら声を掛けるが反応がなかった。仕方ないからこのまま放置しておくか。

ミッテルトを放置しておくことにした俺は、エレナの元に近寄った。

「エレナ、ミッテルトとカラワーナ用の外套を仕立てて持ってこれるか？」

「はい、二人とも私と真紀とのサイズが殆ど同じだったのですぐに仕立てることが出来ました」

エレナが手に持っていたカバンの中からミッテルトとカラワーナのサイズに合いそうな顔を隠せる程のフードが付いた黒い外套を取り出した。

「カラワーナ、此方に来てくれ」

真紀と楽しそうに話していたカラワーナを呼んだ。カラワーナはすぐに傍まで来てくれた。

「何か用か、ハース」

「ああ、これをカラワーナに渡そうと思ってな」

手に持っていた外套をカラワーナに差し出した。するとカラワー

ナは俺の顔と外套を見ながら受け取った。

「ハース、このマントは一体なんなんだ？」

カラワーナは戸惑いながらも、畳まれていた外套を広げた。

「それはエレナが仕立てた外套で、俺たちの仲間になった記念のプレゼントだ。それとこれも受け取ってくれ」

外套をまじまじと見ていたカラワーナに宝玉の付いたペンダントを渡した。

それをカラワーナが手に持つと突然、宝玉が紫色に輝き始めた。その輝きがあまりにも眩しく目を手で覆った。

輝きが止むとカラワーナの手にある宝玉が紫色の波紋を中で発していた。

「ハースこのペンダントに付いている宝玉はなんですか!? 何の前触れもなく紫色の光を発しましたよ!」

突然の出来事にまだ混乱しているカラワーナは俺の目の前にペンダントを向けた。

「それは人の心に合った色を発生させる石で作ったペンダントだ。その石は俺が魔力で作った物だから大切にしてくれよ」

カラワーナがペンダントの事を聞いてからもう一度それを見てみると宝玉の中で発生している波紋に変化が起きた。

宝玉の中では紫色の波紋しか発生していなかったが白、緑、黒、とそれぞれの色の波紋を発生させていた。

「こ、今度はなんなんだ!」

カラワーナが慌てているのを宥めるために首に架けている黒い波紋を発しているペンダントを外した。

「カラワーナ、その宝玉は別の宝玉と共鳴するように作っているんだ。その証拠に俺のペンダントをってみろ」

カラワーナに俺のペンダントを見せた。そのペンダントに付いている宝玉も黒い波紋から白、緑、紫の順番に波紋を発生させていた。

「ハースのペンダントも私が持っているのと同じ様に色が変わってるということはこのペンダントを私も含めて四人持っているということか」

「その通りだ。俺以外にこのペンダントを持っているのはエレナ、真紀、そしてカラワーナだ。勿論、ミッテルトにも渡すつもりだ」

ミッテルトの名前を出してから本人の方を見てみるがそこにミッテルトは居なかった。それからエレナを見てみるとそこではエレナがミッテルトにカラワーナが持っているのと同じ外套を渡しているところだった。

しかし、エレナとミッテルトはいつからあんなに仲良くなったんだ？確かに彼女たちは歳が近いからすぐに仲良くなるとは思っていたが出会ってからまだ一日しか経っていないんだぞ。そんなすぐに仲良くなれるものなのか？

仲良くなれるならそれでいいか。とりあえず今はカラワーナと話しているからこつちに話を戻すか。

カラワーナに視線を戻すと少し機嫌の悪い顔をしていた。それもそうか、話を止めたと思ったたらエレナたちの事を見ていたんだ。機嫌が悪くなるのも仕方ないか。責任は俺にあるんだからな。

「人と話しているのに意識を別の所に向けなくていけないか。それだが、この宝玉はなんで他のと共鳴するように作っているんだ？」

「それは俺たち全員の位置を知るとの生死を確かめるためだ。例えば俺の宝玉の色は黒だが、俺が死ぬと他の宝玉から黒い波紋が発生しなくなるんだ。位置を知るときはその人の色を強く念じれば宝玉が場所を教えてくれる」

「宝玉が場所を教えてくれる？どうやって場所を教えてくれるんだ」

宝玉がどうなるのかを教えようとする、コートの袖をオーフィスが掴んできた。

「ハース、そろそろ、着く」

思っていたより速いな。仕方がない、宝玉についてはまた今度教えることにしよう。

「カラワーナ、すまないがそろそろ着くからこの話はまた今度しよう。とりあえずその外套を纏ってからフードを被っておいてくれ」

カラワーナは「わかった」と言い、外套を纏った。それとミッテルトの方も見てみると既に外套を纏っていた。おそらくエレナが着る

ように施したんだろう。

カラワーナにミッテルトの所に行つてくると言つてからカラワーナの傍を離れた。

それからミッテルトの所に行き、ペンダントを渡した。するとペンダントは黄色く輝き始めた。カラワーナの時と同じ位の光だが、目が慣れてたおかげで眩しすぎるとまではいかず明るいと感じる程度だった。

だが、ミッテルトは違ったようで咄嗟に目を守れなかったので、「ふぎやー!?目がー!!」と目を押さえながら転げ回っていた。

流石にこの状態で『禍の団』に参加はさせられないな。

「エレナ、『聖母の微笑』を使ってミッテルトの目を治して・・・いや、言わなくてもよかつたか」

エレナにミッテルトの目を治す様に言おうとしたが、それより先にエレナはミッテルトの目を『聖母の微笑』を使って治療をしていた。

ミッテルトの目の治療が終わり、何とか立ち上がることが出来るようになったからペンダントの事を説明した。ミッテルトのペンダントの色は黄色だった。

ミッテルトが俺たちのペンダントに付いている宝玉を見てみたいと言つてきたのでエレナと真紀にペンダントを見せるように言つた。

俺の宝玉は黒い波紋を主に発生させている。エレナは緑の波紋を、真紀が白の波紋を発生させていた。

「えっと、ハースさんのが黒で、エレナが緑、真紀さんは白っと。なんか宝玉に浮かんでいる色がその人の気配に影響されてる気がするっスね」

ミッテルトの推測は殆ど合っている。違うのは気配じゃなくて、正確にはその人の魂に影響しているということだ。

その魂に反応して持ち主の生死が分かるというのを調べて分かつた時は嬉しい誤算だと思つた。

「ハース、着いた」

オーフィスの声が出た方を見ると家で開いたのと同じ狭間が開いていた。その狭間にオーフィスが入つていくのを見た俺は骸骨の仮

面を付けてからオーフィスの後に続いて狭間に入っていった。

狭間から抜け出すとそこにオーフィスの姿はなく、ぬるりと生暖かい感触が全身を包んだのを感じると足元に霧が立ちこめていた。

後ろをしてみるが、俺が出てきた狭間はいつの間にか閉じていた。周りを見てみるが、そこは地平線の先が見えないほどの広い荒野だった。

おそらくだが、ここはオーフィスが出た場所とは違う場所、いや、空間なんだろう。狭間を通ろうとした時にはオーフィスはまだ狭間から出ていかなかったんだ。俺だけこの空間に移されたんだろう。

すると視線の先に転移の魔方陣が出現した。そこからは制服にローブを羽織った魔法使いの青年に隣には小さな男児がいた。他にも二メートルはある巨漢な男に金髪の外国人の女がいた。

彼らに見覚えがあった。彼らはこの間『禍の団』のメンバーを調べたときに見た顔だ。確か彼らが所属している派閥は英雄派だったか。「英雄派のメンバーか。俺をこんな所に『絶霧』で転移させて何のつもりだ?」

「これは驚いた。この空間を一瞬で看破するとは予測以上だ。まあ、それでもなきやオーフィス自身が連れて来る程の実力者だとは思えないけどね」

ゲオルクが淡々と言うが、そんなことはどうでもよかった。

「そんなことはどうでもいい。さつさと目的を言え」

「それもそうだね、僕たちの目的は君の実力を知るためだ。君の事を調べようとしたんだけど情報がひとつも見つからなかったからね、直接君の実力を知ることにしたんだ」

やっぱりか。そんなことだろうと思っていたよ。だが、これで目的は分かったんだ。やることを早く済ませよう。

「ならさつさと目的を始めろ。こっちはもう準備できているんだ」

右手に西洋剣を握り、いつ始めても問題ないように剣を構えた。

「そうですね、それじゃあ、始めよう。レオナルド遠慮は要らない。全

力で頼むよ」

それだけ言うと男児、レオナルドはコクリと頷いて足元に不気味な影を広げていった。その影はこの荒野に広がっていった。すると、その影が盛り上がり、形を成していった。その影は巨大な化け物になっていき、その数は数百は下らない程の数だ。

「成る程、その子が『魔獣創造』の所有者か。道理で情報が集まらない訳だよ」

全ての影が形を成すとレオナルドは糸が切れたかのように倒れた。それを金髪の女が受け止めてゲオルクにレオナルドを預けた。ゲオルクはすぐに魔方陣を展開してレオナルドをその魔方陣に置いた。

あんなに小さい子供がこれだけの数の魔物を産み出したんだ。その分、体にかかる負担は大きいはずだ。

「さて、これでこちらも準備が整った。ジャンヌ、ヘラクレス、始めるぞ」

「はいはい」

「おう！」

ゲオルクの呼び声にジャンヌとヘラクレスが前に出てきた。二人とも歴史と神話に名を残した英雄の名前か。

「強者揃いだな。久しぶりに心踊る戦いができそうだ。精々楽しませてくれよ。長い間強者と戦っていないんだ。俺の、この俺の渴きを癒せー!!」

喉がはち切れんばかりの声を出して魔物の軍団とゲオルク、ジャンヌ、ヘラクレスに突撃していった。

Life. 10 『禍の団』の集まり②

「オオオオオオッ!!!」

雄叫びのような声を上げながら魔獣の群れに突っ込んでいった。それに対抗するかのように魔獣達も雄叫びを上げながら走ってきた。

魔獣達が走る度に軽い地鳴りが起き、俺の体を震わせた。体の震えと共に俺の心も期待で気が高まっていた。

魔獣達の先頭には四足歩行型の魔獣がとてつもない速さで走ってきた。

数はざっと見たところ三十体はいるな。後ろの魔獣達は先頭の魔獣ほど速くはないな。だったら先に先頭の魔獣達を倒してその後後ろの魔獣達を倒すか。

魔獣達とどう戦うか決めた俺は走る速度を上げて一気に魔獣との距離を詰めた。

一番近くにいる魔獣に向かって飛び膝蹴りをぶちかました。膝蹴りは魔獣の顔面に直撃して顔がっ端微塵になった。

地面に着地すると周りを四足歩行の魔獣が囲んでいた。

仲間が一撃でやられたからなのか個別で戦うより集団で戦ったほうがいいと判断したんだろう。懸命な判断だ。

そして同時に全ての四足歩行型の魔獣が逃げ道を塞いで襲いかかってきた。

強靱な足を使って上空に飛び上がった魔獣が十五体、大地を駆けて襲い掛かろうとしているのが十四体もいる。

魔獣は同時に襲いかかってきたかのように見えるが、一体だけタイミングの合っていないのがある。そいつは俺の背後にいる魔獣だ。

おそらく背後にいる魔獣は後ろから襲ったら確実に殺せると慢心したのでらう。他の魔獣と比べると襲いかかってきたタイミングが僅かにずれているんだ。

集団による攻撃はひとつでもタイミングがずれると全体に影響を与えて攻撃に失敗する。音楽と同じだ。ドラム、ギター、ベースのど

れかがずれると音程がずれて音楽じゃ無くなるのと同じだ。

背後にいる魔獣に向かって西洋剣を降り下ろして脳天を二つに割った。一瞬の出来事に他の魔獣達は俺から意識を逸らしてしまい、全ての魔獣の攻撃するタイミングがずれていた。

その隙を見逃さず一気に西洋剣で全ての魔獣を切り裂いた。俺を囲んでいた魔獣は全て絶命し、魔獣の血が俺の体に付着した。

西洋剣に違和感を感じて見てみると刃が折れていた。仕方ないか。この剣を初めて使ってから三年近く経つんだ。今まで世話になった。そして折れた剣を空間にしまった。

それから俺は目標を後ろにいた魔獣達に変えた。魔獣達に斬り掛かろうとすると俺を影が覆った。すぐに後ろに飛ぶとさつきまでいた場所が爆発した。

爆発が起きた所にはヘラクレスと呼ばれる巨漢がいた。

「ハッハッハーッ！いいなあ！アンタさつきの魔獣を一瞬で倒したなんてとんでもないなあ！俺と勝負しろよお！」

俺の返答を待つことなくヘラクレスは拳を突きだした。その拳を素手で受け止めようとしたが、さつき地面が爆発したのを思いだした。受け止める寸前に奴を蹴り飛ばして距離を取った。

ヘラクレスは後ろに仰け反ったが、すぐに俺を叩きつけようと拳を降り下ろしてきた。その拳も回避することができたが、拳が地面に突き刺さるのと同時に爆発が起きた。

やっぱりか！ヘラクレスの拳は物に触れたのと同時に爆発を起こすのか。ヘラクレスの攻撃に該当する神器は間違っていないければリアント・デトネーション『巨人の悪戯』

のはずだ。

「ヘラクレスとか言ったな、その神器はリアント・デトネーション『巨人の悪戯』なのか？」

神器の名前を言うとヘラクレスは嬉しそうに笑いだした。

「そうだ、その通りだ！ほんの少しだけの攻撃でよく俺の神器が何か分かったな！嬉しいぜえ、久しぶりに骨のある奴と戦えるってのは！！」

ヘラクレスが拳を突きだしてくる度にその場が炸裂していた。こ

いつが拳を突きだす時に俺も拳を突きだして何度かカウンターを喰らわせていた。

それでもヘラクレスは倒れることなく楽しそうに何度も拳を突きだしてきた。俺も負けまいと何度もカウンターをしたりして、こいつの拳と爆発を避けて体の至るところを殴っていた。

ヘラクレスが楽しんでいるのも分かる。いつも俺の攻撃を受けた奴等は一発で死ぬか戦闘不能になるかのどちらかだった。だが、今日の前にいるヘラクレスは俺の攻撃を真つ正面から何度も受けているのに倒れる気配がしない。

それが嬉しくて仕方ない。こんなに心踊る純粹な殴り合いはヴァーリ以来だ。この殴り合いが楽しくてたまらない。

そして遂に俺の拳がヘラクレスの顎に直撃した。顎に拳を喰らったヘラクレスは後ろによろめきながら尻餅を着いた。

顎に拳が当たったことにより脳が揺れたんだ。しばらくの間はバランス感覚を保てなくなるだろう。するとヘラクレスは尻餅を着きながら突然笑いだした。

「最高だぜ！俺とここまで殴り合えた奴はお前がはじめてだ！本っ当にいい気分だ!!さあ、もつと熱い殴り合いをしようや!!」

ヘラクレスは足を小鹿のように震わせながらも立ち上がった。立ち上がると奴は自分の顔を殴った。

「ふう、落ち着いたぜ。さあ、お互い全力を出そうぜえ!
バランス・ブレイク
禁手化ウウウツ!!」

ヘラクレスが叫ぶと、体が輝きだした。光がヘラクレスの体を肉厚のものに形成していった。

光が収まるとそこには全身から無数のミサイルに似た突起物を生やしていた。

「これが俺の禁手!!」デトネイション・マイティ・コメット
「これが俺の禁手!!」バランス・ブレイク

禁手化か。ヘラクレスが本気を出すんだったら俺も本気とまではいかないが、それに近い力を出そう。

左手首に嵌め込んでいるブレスレットを外すと『死』が吹き出した。「それがお前の全力かッ！いいオーラだッ!!」

ヘラクレスが嬉しそうに笑いだした。それに釣られて俺も笑いだした。

そしてお互いの距離を一気に詰めようとすると俺の横から炎の塊が飛んできた。

炎の塊を左手で弾いた。炎の塊が飛んできた方向を見ると魔獣達が俺に向かって炎を吐いていた。

それを咄嗟に回避した俺は炎を吐いた魔物に『死』の塊を投げつけた。濃度はそんなに濃くないが、あの魔獣を殺すには十分すぎる威力だ。

魔獣が黒く染まり出してから数秒も経てないで黒く染まりきり体が崩れていった。俺は魔獣達に視線を向けると奴等はやる気満々だった。

・・・ふざけるなよ。俺はヘラクレスと心踊る戦いをしていたのに邪魔をするだど？ふざけるな!!もういい、こいつら全て今消してやる。

「ヘラクレス、すまないが今回は邪魔が入ったせいで興が冷めた。この続きはいずれしよう」

「ああ、今回ばかりは俺も同意見だ。こんなやつらに邪魔されたせいでやる気が失せちゃった。俺はゲオルクの所に戻ってるから後はアంతタに任せるぜ」

ヘラクレスは禁手化を解除してからゲオルクの所に戻った。

ヘラクレスが戻ったのを確認してから右手に『死』を溜め始めた。

魔獣達は俺の『死』がまずいものだど分かったのか一斉に襲いかかろうとした。だがもう手遅れだ。

右手は『死』で覆われていた。どす黒いオーラはまるで俺の心に反応しているかのように何時ものより黒くなっていた。

魔獣達がすぐそこまで来たのを見計らい右手を魔獣達に向けた。

「死ぬ。ただ死ぬ。お前らのような創られた物は今すぐ死ぬ」

そして右手に溜めていた『死』を魔獣達に向けて撃ち放った。それは十メートル位の魔獣ですら飲み込んでしまう程のものだった。

『死』を辺りにいる魔獣全てに当てた。右手に溜めていた『死』を撃

ちきると周りには黒く染まりきり体が崩れている魔獣しかいなかった。

英雄派のゲオルクが俺の実力を知るために数百の魔物とジャンヌ、ヘラクレスを差し向けてからどれ位の時間が経ったんだろうが。

ヘラクレスのおかげで心踊る戦いをすることはできた。だが、邪魔が入ったせいで全力に近い力を出すことができなかった。俺は、戦いの中で忘れてしまったなにかを感じたかった。

数百の魔物と英雄の名を冠する者ならそれができると思っていた。なのに、こいつらはそれができなかった。むしろ失望してしまった。失望、呆れ、哀しみ、そして絶望という感情が俺の中で渦巻いていた。俺は、こんな戦いがしたかったわけじゃない。

顔を上げて空を見た。そこにはゲオルクとジャンヌ、ヘラクレスが足元に魔方阵を展開して俺の事を見ていた。彼らは俺の事を人として見ていなかった。その目は俺を化け物として見ていた。ヘラクレスは名残惜しそうに見ているがな。

ヘラクレスたちを見上げていると、視界に巨大な何かが入った。そこに視線を向けると体の大半を黒く染めた人型の魔獣がいた。

魔獣は口から涎を垂らしていて、その涎が地面に落ちる度にジュウジュウと音を立てながら地面を溶かしていた。

強酸の涎か、あれに触れたら不味いな。今のところ周りにこいつ以外の魔獣はもういないな。

他に魔獣の生き残りがいないか辺りを見渡していると、魔獣が雄叫びを上げながら走ってきた。

魔獣はその巨大な体格からは想像できない速さで瞬く間に俺の目の前まで来た。そして六本の腕を振り上げると音速を越える勢いで腕を降り下ろしてきた。

その一撃が当たる前に魔獣の背後に回り込み、魔獣の攻撃を回避したが、降り下ろされた腕は勢いを殺すことなく地面に直撃した。

すると足元に途方も無い程の巨大なクレーターができた。もし魔獣の攻撃に当たっていたら体を潰されるだけでなく血肉が辺り一帯に飛び散っていただろうな。

そんな命の危機に瀕していたにも関わらず俺の心は魔獣の強さに満足していなかった。確かにこいつの一撃を喰らえば俺は確実に死ぬ。だが、こいつが攻撃するまでの動作が単純すぎる。どんなに強力な攻撃でも当たらなければ意味がない。

一歩前に出て魔獣の背中に手を置き、そして『死』を大量に流し込んで体全体を一気に黒く染めた。先程の『死』よりも濃いものを流し込まれたのに気付いた魔獣は再び腕を振り上げたがその途端に腕が崩れ落ちた。その拍子に体が徐々に崩れ落ちていき、遂に声を出すことなく崩れていった。

それを見届けた俺は魔獣だったものを踏みにじった。そして、再びゲオルクたちに視線を戻した。

「どうする、まだ続けるか？」

ゲオルク達は一瞬たじろぐとヘラクレスに視線を向けて小さく頷きあつた。すると足元に展開している魔方陣で高度を下げてきた。

魔方陣が俺より少し上のところまでの高度に達するとゲオルク達は魔方陣から飛び降り、地面に着地すると黒い砂塵が足元を舞った。

「俺たちの目的は貴方の実力を知ることだ。これまでの戦いぶりから貴方の実力は分かった。だからこれ以上の戦闘は無意味だと判断した。もう続けるつもりはないさ。いいよな、ヘラクレス？」

ゲオルクが両手を顔の位置まで上げて降参の身振りをしながらヘラクレスにそう尋ねた。ヘラクレスは構わないと言わんばかりに仁王立ちをしていた。それを見た俺はゲオルク達に戦い続けるつもりが無いと判断し、コートの上ポケットにしまい込んでいたブレスレットを取りだして右手首にはめた。それと同時に『死』が霧散した。「そつちに戦う意志が無いなら俺も戦うつもりはない。『絶霧』を解除してくれないか」

『絶霧』を解くように頼むとゲオルクは一度だけ頷いてくれた。すると足元の霧が濃くなり足元から胸の位置へ、そして頭の位置まで霧が立ちこめてきた。視界が霧に包まれてゲオルク達が見えなくなつた。

霧が晴れるとそこは薄暗く蝋燭だけが辺りを灯している長い廊下だった。廊下には赤絨毯が敷かれていて、その奥には巨大な扉があった。

「ハース!!大丈夫ですか!?!」

聞き覚えのある声が後ろから聞こえた。

声のした方を振り向くとそこには『絶霧』によってちりぢりにされたエレナ達がいた。

「エレナ、無事だったかあ!?!」

後ろに振り向いた瞬間、エレナが飛び付いてきて体のバランスを崩してしまい、後頭部を廊下に叩きつけてしまった。

後頭部の痛みを我慢して上半身を起こした。エレナは涙を流しながら顔を俺の胸に押し付けていた。

「危ないんじゃないかエレナ、こんなことをして。怪我をしたらどうするんだ?まあ、心配をかけた俺も悪かったな。エレナ、心配をかせさせてすまなかつた」

エレナの頭を優しく撫でながら謝ると、泣き声が段々と治まってきた。

「心配したんですからね!!突然いなくなっただと思えば、数百の魔獣、しかも全て上級悪魔以上のスペックを誇る群れと戦っていると聞いたときはハースでも死んでしまうと本気で思ったんですからね!!」

目を赤く充血させながらエレナは俺の事を見ていた。

「だが、俺はこうして生きているんだ。傷だつて大したこと無いんだ。だからそんなに泣かないでくれないか?」

それでも俺から離れそうにないエレナに困っていると真紀がエレナを引き剥がしてくれた。

「エレナ、ハースが困つてんだから離れなよ」

真紀がエレナを引き剥がしてくれたおかげでやっと立ち上がるこどができた。真紀とエレナに視線を向けると、その後ろにはミッテルトとカラワーナがいた。

「真紀、ありがとう。それと心配させてすまなかつた。ミッテルトと

カラワーナにも心配させてしまったかな？」

真紀の肩に手を置いて謝ってからミツテルト達に声をかけた。

「うちは別に心配なんてしてないっすよ」

とは言っているが、目が少し充血しているし目元には泣いた跡があるから心配していないと言うのは嘘だとバレバレだ。

ミツテルトがすぐにばれるような嘘をついたことに素直じゃないなど思いながら鼻で笑った。

それからミツテルトの頭を優しく撫でてあげた。突然の事に彼女は驚いて慌てていたがしばらくすると大人しくなった。

ミツテルトの頭を撫でているとカラワーナが近づいてきた。

「やはり無事だったか。戻ってくるとは信じていたがあまりミツテルトを悲しませないようにしてくれ」

カラワーナは俺がいなくなった時のミツテルトを落ち着かせるのに苦労した事などの愚痴をこぼした。それに対してカラワーナには謝ったりする事しかできなかった。

愚痴をこぼしてから数分してようやくカラワーナは愚痴をこぼすのをやめた。

それからカラワーナにも心配させた事を謝った。彼女は無事に戻ってきたから気にしていないと言ってくれた。

オーフィスは俺の実力を知っているからなのか真紀の傍でお菓子を食べていた。

オーフィスに「戻ったぞ」と言うと「ん、分かった」とだけ答えてお菓子をまた食べ始めた。これはしばらくの間はこのままにしておくしかないか。

オーフィスがお菓子を食べている間に先の戦闘で汚れたコートと骸骨の仮面は魔法を使ってすぐに綺麗にした。

綺麗になったのを確認した俺はお菓子を食べ終えたオーフィスを肩に乗せて巨大な扉を開けた。

やっと『禍の団』のメンバーに会えるのか。どんな奴等なのか実際に会えるからここで人柄を把握しておこう。

巨大な扉を開けてから部屋に入るとそこは床が白と黒の大理石で順番に並んでいた。そして部屋の中央には円卓とそれを囲んでいる人々がいた。俺が部屋に入るとオーフィスが肩から飛び降りて奥の間にある玉座の様な椅子まで歩いていき、椅子に座った。

オーフィスが椅子に座るのを確認してから円卓に座っている人を見てみると1つだけ空席の場所があった。その席の隣には学生服の上に漢服を着た男、曹操が座っていた。

曹操、十三種ある神滅具の中でも神を絶対に屠ることができると言われる最強の神滅具、イエス・キリストを貫きイエスの血に濡れた槍、聖十字架、聖杯などと同じ聖遺物の1つ、『黄昏の聖槍』の所有者。

以前、『禍の団』について調べたときに曹操の資料を見たが、やはり資料で見たのと実際に見るのでは全然違うな。

曹操からは強者の風格がこの場にいる者達の中で最も強く感じられる。曹操以外の奴らもそれなりに強力な気配を感じるが曹操程ではない。

曹操の事について考えていると、彼は自分の席から立ち上がり俺に近づいてきた。

「やあ、さっきの戦いは見させてもらっていたよ。君の神器はとんでもないものだな。あれほどの神器は初めて見たよ。後で詳しく教えてくれないか？」

神器？俺はそんなのを持っていないぞ。何でそんなことを、いや、待てよ、もしかしたら曹操は『死』のことを言っているのか。確かに『死』を初めて見た奴からすれば神器を使った様には見ええないのかもしれないな。

これは嬉しい誤算だ。このまま『禍の団』の間ではこの力は神器ということにおこう。

曹操は『死』について知りたがっているがそう簡単に教えるわけにもいかないからな、この場はどうにかしてやりきるか。

「生憎と、自分の神器の能力を誰それと構わず話すつもりはないんだ。

残念だが、この神器の事を知りたいんだったら俺の信頼を勝ち取ってからにするんだな」

少し素っ気ない態度をとってしまったように思えるが、これぐらい言えば『死』について追及して来ないだろう。

「ああ、それもそうだな。すまなかった。初めて見た神器だったんでね、ついその神器について詳しく知りたかったんだ。だけど逆に安心したよ。オーフィスが連れてくる程の人が初対面の相手を警戒してくれる人で」

ん？今の曹操の発言からだどこににいるメンバーの内誰かが自分の事を話したみたいない方だな。この中でそんなことをしているのは、奴らだけか。

一応念のために曹操に奴らが話したのか聞いておくか。

「その言い方から察するに既にこの中の誰かが相手を警戒せずに自分の事をペラペラと話したみたいだな。例えばあそこで俺を見ている奴等か」

奴等、資料で見たから分かるが旧魔王達のことだ。奴等は俺の事を横目で見ているだけのつもりだろうがその目は俺の事を邪魔者としてしか見ていないな。

それもそのはずだ。彼らの目的はオーフィスの力を借りてこの世界を一度滅ぼし、もう一度世界を構築して自分達に都合のいい世界を作ることなんだからな。

その世界を構築するにはオーフィスの力が必要不可欠。そのオーフィスが連れてきた人となるとオーフィスが今一番信用している人物に他ならない。

旧魔王達の最初の目的はまずオーフィスの信頼を得ることだろうな。そのためには俺の存在が邪魔なんだ。

おそらく旧魔王達は近いうちに俺に刺客を送りつけてくるだろうな。

だが、資料で調べた奴らの行動と曹操から聞いた少しの情報で奴らがまともな刺客を送りつけて来るとは思えないがな。

曹操は俺が目線で旧魔王達のことを見ると鼻で笑った。

「ああ、そうだ。彼らは自分達の事を隠すことなくすぐに自分達が真の魔王の血を引く者だと話して来たよ。ついさつき話をしたときはこんなのが魔王の血を引いているのかと思ってね、正直呆れてしまったよ」

曹操の気持ちも何となく分かる。初対面の奴がナルシストだなんて正直呆れるよ。しかも奴らは自分達の事を真の魔王なんて言っている。もしその言葉が本当なら奴らは今の魔王だと言っているのも当然だ。

だが奴らは現魔王なんかじゃない。奴らは今の魔王より遥かに劣っている点が多く、そして何より他種族の者達を見下している。それさえ無ければ、現魔王と対等になっていただろうな。

現魔王は奴らより魔力の量、質ともに優れていて他種族のことをあんな程度だが、対等に見ている。だが、他種族を無理矢理、悪魔に転生させる上級悪魔がいるのは見過ごせないがな。それをどうにかしてほしいものだ。そうでもしないかぎり、俺達が手を取り合うことはできない。

「それが本当なら奴らは烏合の集まりとでも言うべきだな。血筋だけで自分が真の魔王だと言っている間は上に立つべき器じゃない」

「全く、その通りだな。さて、そろそろ席に座ろうか。その話は後でもできるからね。君の席は分かっているかもしれないが、俺の隣にある空いている椅子だ」

俺の座る椅子を教えると曹操はさつきまで座っていた席に戻っていった。

さてと、曹操も椅子に向かったことだし俺も椅子に座るとするか。っとその前にエレナに言わなきゃいけないことがあるな。

「エレナ、こっちに来てくれ」

「なんですか、ハース」

エレナが俺の隣に来たので、周りの者に聞かれないように小さな声で話をした。

『禍の団』と話している間は後ろにある柱の近くで待機していきな。その間はどんなことがあっても絶対にその場から動くなよ。こ

の事は真紀達にも伝えておいてくれ」

エレナは「わかりました」とだけ言うと、真紀達のところに向かい、話をし始めた。エレナは俺の指示通りにしてくれるみたいだな。

曹操の話と資料で調べた旧魔王の情報が正しければ確実に俺の事を人間だという理由だけで馬鹿にしてくるだろうな。エレナにとってそれは自分のことも馬鹿にしていると判断するからな、もしエレナがその事にキレてこの場で暴れでもしたら今後の『禍の団』としての活動に支障が出るから、それだけは阻止しておきたい。だからエレナに待機するようにと言ったが、それだけでやらないとは思えないから、さつきエレナが俺の隣に来たときに動きを止める魔法をこっさり仕組んでおいた。これぐらいすればエレナでも動くことは出来ないはずだ。

そこまでする必要があるのでと言われればその必要は無いが、念のためだ。なぜなら、数ヶ月前に墮天使のオツサンと、ある話をしていたときに俺の頭を酔った勢いで叩いたんだ。それにキレたエレナがオツサン、アザゼルを半殺しにしたんだ。その時は俺と真紀でエレナを止めたんだったな。その後アザゼルはエレナは今後絶対に怒らせないようにするって言うってから帰ったんだよな。

まあ、そんなことがあったからエレナに捕縛魔法をかけてあるんだ。

そろそろ椅子に座ろう。さつきから旧魔王が早くしろと目で訴えてきているからな。

「待たせてすまない。話を始めてくれ」

こうして『禍の団』初の会議が始まった。

さて、『禍の団』の会議が始まってから既に一時間が経過しているんだが、いまだにメンバーの自己紹介が終わっていない。

こいつら自己紹介が長過ぎるんだ!!何で一人で五分以上も話すんだ!!しかも内容はどうでもいいことばかりだ。手を組んでいる派閥、

傘下に入っている派閥、派閥にいる人数とか後で言えばいいことを先に話してやがる。

『禍の団』に入った目的を最後に話すとか何で目的を先に言わないんだって思っていたら目的を話しても下らないことしか言わない。ほとんどの派閥は旧魔王に従っていないやがる。この際、話す順番は気にしない。こんな奴らの話を聞いていると頭がおかしくなりそうだ。

・・・話が長いし下らな過ぎて眠い。もういつそのこと寝るか、その方が有意義だ。とりあえず手足を組んで話を聞いている様な態勢をして寝よう。

エレナSIDE

私の名前はエレナ・ルタス。ハースの仲間の一人で普段は家の家事を勤めています。

私は小さい頃、家族をはぐれ悪魔に殺されました。家族は私の目の前で無惨に殺され、その記憶は今も私の中にあります。その時に私も殺されそうになりましたが、そこに私を助けてくれた人がいました。それが今、目の前にある椅子に座っているハースです。あのときの彼は今よりも幼かったのですが、既に上級悪魔を殺せる程の強さを持っていました。はぐれ悪魔を殺したハースは私に手を差し伸べてくれました。その手を取った私はその日からハースと共に暮らし初め、多くの事を学びながら今に至ります。

そんな私は今、『禍の団』と言う名の組織の会議に参加しています。派閥のトップの話聞いていますが、正直下らないことしか話していません。こんな話を聞くために来たのかと思うと反吐が出ます。

今私が抱いているこの思いは一番近くで話を聞いているハース自身が最も辛いんだと思います。ああ、そう思うと今すぐにでもあいつらをコロシタイ。

あ、どうやら曹操の自己紹介が終わったようです。彼の場合は簡潔で分かりやすかったです。次はハースですね。どうやら自己紹介と言う名のおしゃべりはハースで最後のようです。

ハースはどんな自己紹介をするのでしょうか、楽しみです。

この場にいる全員の視線がハースに向けられると彼はゆつくりと口を開きました。

「・・・ファースト」

ファースト、それはハースがぐれ悪魔狩りをするときに使うコードネームのことです。

ファーストの名前を聞いた途端、周りが一斉に騒がしくなりました。

それもそのはずです。ファーストとは裏世界の者なら誰でも知っているトップクラスのはぐれ悪魔専門の殺し屋の名前なのですから。本名、年齢、国籍は不明。分かっているのはファーストが男性だということだけです。

ハースは自分からその事を話そうとしないので私なりにファーストとしての彼の情報を集めてみました。情報によると彼の依頼達成率は百パーセント、つまりパーフェクトでした。この数値は本来はあり得ないものです。

誰にでも失敗はあるものですが、彼の場合はそんなことが一度もないのです。さらにこの一年の間に現れた上級悪魔と最上級悪魔の殆どは彼が殺してきています。下級と中級はほんの僅かです。このようにハースは強い者を殺すことが多いのでトップクラスのはぐれ悪魔専門の殺し屋として有名なのです。

ですので、ファーストと聞いた途端に騒がしくなったんです。

「皆のもの鎮まれ。まだ彼の目的を聞いていないぞ」

そうすると少しずつですが周りが静かになってきました。先程、この場を治めたのはシャルバ・ベルゼブ。旧魔王派のリーダーです。彼の呼び声で周りが静かになったのは騒いでいた者の殆どが旧魔王派の傘下に加わっている者達だからです。

「さて、ファーストよ。周りを静かにしたので貴殿の目的を教えてくださいませんか？」

シャルバはハースにたいして対等に接していますが、実際はどうなんでしょうか？もしかしたらシャルバは心の中でハースを見下して

いるのかもしれませんが。私は腹の探りあいなどが苦手なのでシャルバがどのように考えているのかわかりません。後でハースに聞いてみましょう。ハースは腹の探りあいが得意ですからね。

「・・・オーフィスの傍にいる」

ツ！そうですか。ハースは、オーフィスの傍にすることにしたんですね。いままでオーフィスの傍にいたと言ったものはこの中にいません。ハースがそのつもりでしたら私も共にオーフィスの傍に、ハースの傍にいます。これから先、ずっとです。

「・・・そうか、ファーストの目的はオーフィスの傍にすることか。それはつまり、我々の上に立つということか」

不味いですね。どうやらシャルバからすれば今の発言は自分達より上の立場に立つと言った様に思えたのでしよう。ですがハースはそんなことを考える様な人ではありません。ハースなら上手く誤解を解いてくれるでしょう。

そう思っていた私の思いに反してハースはコクリと頷きました。

な、何をしているんですか、ハース!? そんなことを肯定してしまつたらシャルバが黙っている筈がありません!

「真の魔王の血を引く正統なる後継者たる我々より上に立つというのか!! 我々が何も言わないのをいい気に調子に乗るなよ、人間風情が!!」

ああ、思った通りの展開になってしまいました。これで私達と彼らの関係は悪くなってしまったではないですか。一応、シャルバがハースの事を見下していたことはわかりましたがこのあとの事はどうするつもりですか、ハース!

「貴様のような者が上に立つのは気に入らん! 私こそが上に立つべき存在なのだ! この私と勝負をしろ!! どちらが上に立つべきかを決めようではないか!! 貴様もそれでいいな!」

どうするんですか、ハース!? どんどん取り返しのつかないことになってますよ!

ハースが次に起こす反応を待ってみますが、なんの反応も起こしません。なにをしているんですかハース! 早く何かしてください!

「無言は肯定と受けとるぞ。貴様のその反応はこの場にいる者全てが証人だ。勝負は次の会議の時にする！それまでに首を洗って待つていろ!!」

するとシャルバが椅子から勢いよく立ち上がり足元に魔方阵を展開しました。それと同時にシャルバの両隣に座っていた男女も立ち上がり魔方阵の中に入っていきました。そして魔方阵が光を放ち、その場からシャルバ達は居なくなりました。

シャルバ達はその場から去るとこの場にいた人々が次々に魔方阵を展開してその場から去っています。最後に曹操がハースの傍に近寄っていきました。

「頑張ってくれ、ファースト。君ならシャルバに勝てると思ってるよ」曹操がそれだけ言うのと彼の仲間のところに行き、先程の人達と同じ様に魔方阵を展開してこの場から去っていきました。

ああ、ハースのせいでこれからの私達の『禍の団』の立場が危うくなってしまうました。ハースがシャルバとの勝負に負けてしまったら最悪殺されてしまいますよ。ですが、ハースがシャルバごときに負ける筈がありませんが。

とりあえずハースに声をかけましょう。間違えてもこの場でハースと呼んでしまわないように気をつけましょう。もしかしたらまだここに誰かがいるかもしれませんからね。

「ファースト、他の人たちは帰りました。私達も家に帰りましょう」ハースに声をかけてみました。反応がありませんでした。おかしいと思ったのでハースの体を揺らしました。するとハースは両腕の上に伸ばしながら立ち上がりました。

あれ、この動作はまさか・・・いえ、そんな筈はありません。大事な会議の時に堂々と眠るなんてことは・・・念のためにハースに聞いてみましょう。

「ファースト、もしかして先程まで寝ていましたか？」

「ん？ああ、そうだが、それがどうしたんだ？」

まさか本当に寝ていたなんて、なんてことをしているんですか！あつ、もしかして先程までのシャルバとの会話も・・・。

「ハース、1つ聞きたいことがあるのですが」

「なんだ、セカンド。聞きたいことつて、よく見たらもう終わっているな。何かあったのか？」

「ファーストは先程までシャルバと話していたのを覚えていますか？」

「いや、全然覚えていないぞ。というより俺はシャルバと話していたのか」

「ええ、次の会議の時に勝負をしようと言う内容です」

「え？そんなことを話してたのか俺は」

「ええ、それは見事なまでにシャルバの言ったことを全て肯定していましたよ」

この会話で全てわかりました。

ハースは寝ながらシャルバと会話していました。それも誰から見ても違和感の無い程に。

本当にこれからどうするんですか。ハースのバカツ!!

こうしてハースの寝ぼけが原因で今後の『禍の団』としての活動が怖くなってしまいました。

『禍の団』での会議が終わってから数日が経っていた。この数日の間に俺はエレナから会議中に起きたことを聞いておいた。

思ったことは1つだけだ。やつちまったな、俺。エレナが暴れて『禍の団』の派閥との関係が悪くならないように捕縛魔法を仕掛けておいたのに、俺自らが関係を悪くしてどうするんだよ!?もし、シャルバとの勝負に負けたら『禍の団』としての立場が危うくなるじゃないか!

どうする、考えるんだ俺。この状況を打開する手段を考えるんだ。効率よく犠牲の少ない方法を!!

とまあ、そんなことを数日の間ずっと考えていたんだが結局この状況を打開できる方法は1つだけだという結論に至った。それはシャルバとの勝負に勝つこと、唯それだけだ。

シャルバに勝つこと事態は簡単だ。シャルバの実力は良くても最上級悪魔だろう。それにシャルバは俺が人間の中でもトップクラスの実力だということは解つていても所詮、人間だという理由だけで侮つている。そんな奴に負ける訳がない。

だが、シャルバのことだ。ファーストとしての俺の実力と噂はよく知つているはずだからな、奴もそれなりの対策を練つてくるだろう。一応だが、万が一に備えて俺も対策を練るとしよう。

そうと決まれば早速、折れた剣の代わりを用意するか。今、俺の手元には折れた剣の代わりになる得物がないからな。

だとすると、実家に電話して予備を送ってもらうように頼むしかないか。運の良いことに今日は父さんに定時報告する日だしな。

俺は自分の部屋から出て一階の居間にある電話機のところに向かった。居間にはエレナたち全員がテレビを見ていた。

俺は電話をするからテレビの音量を下げるようにエレナに頼んでから電話機を取り、実家に電話を掛けた。それからすぐに電話先の相手が出た。

『フアフアフア、何時もより電話をするのが早いではないか。何か問

題でも起きたのか、我が息子ハースよ』

電話に出たのは案の定、父さんだった。何時もは電話に出るのになり時間が掛かるんだが、今日はすぐに出たな。

「ああ、実は数日前に俺が使っていた剣が折れちまってな、その剣の予備を送ってほしくて早く連絡したんだ」

『ほう、あの剣が折れたのか？』

俺が使っていた剣は、父さんと俺の知っている中では最高の鍛冶職人が打った剣なんだ。父さんがかなり少しいだが驚くのも無理はない。

「ああ、俺の手元にはその剣の代わりになる物がないから、そつちに置いてある予備を送ってくれないか？」

『フアフアフア、いいだろう。届くのしばらく時間が掛かるがそれでもよいな？ちなみに剣の種類は何でもよいのだな？』

「ああ、種類は何でもいいさ。忙しいのにありがとう、父さん」

とは言うものの、予備の剣の種類と数が半端じゃいんだよな。その鍛冶職人には丈夫な剣を一本造るように頼んだんだが、その鍛冶職人が俺の事を入っているせいなのと、剣を造るのは久しぶりだつて気合いを入れて造ったら、五十本以上もの異なった剣を造ったんだ。

一本だけあれば良かったのに何でこんなに造ったんだって最初は思っていたんだが、よくよく考えてみたら、これだけの数があれば、しばらくの間は剣に悩まされることはないということに気が付いたんだ。

おかげで剣が無くて困るという事態もなくなったしな。

『そうか、それは良かった。私も忙しいのでな、ハースに物を送るということだけでも簡単には出来んだ。父親らしいことが出来なくてすまん』

「構わない。父さんが忙しいのは息子の俺がよく理解している。だから気にしなくていい。父さんは俺と過ごしている間は父親らしい事をしてるじゃないか。それだけで俺は十分報われている」

父さんが仕事の休暇を取った日は必ず俺と母さんの為にいろんな事をしてきている。俺の修行に付き合ってくれたり、母さんの我儘を聞いたりしているんだ。そうした事をしてるだけでも、父親らし

いじゃないか。

『……そうか。さて、話が少し逸れたな。他に頼みたいことはあるか？』

「いや、特にない。頼みたい事は剣のことだけだ」

『なら良い。……では、ハースよ。頼み事がもう無いのならば、この一ヶ月の間に起きた事を報告しろ』

「分かりました」

頼み事が終わると、そこから父さんの雰囲気が一気に変わった。さつきまではプライベートだったから気楽に話せていたが、ここからは上司と部下の話し合いになる。

それから俺は父さんにこの一ヶ月の間に起きた事を話した。墮天使が駒王町で騒ぎを起こしたこと、その時にミッテルトとカラワーナを仲間にした事を話した。そして、俺が『禍の団』に入ったことも話した。勿論、今の状況についても話した。俺が会議中に寝ていた事は話していないが。

『成る程、カラスがそんなことをしたのか。それでその小娘達は大人しくしているのか？』

父さんは墮天使の事をカラス、悪魔の事をコウモリと呼んでいるんだ。どうも父さんは三大勢力の事が嫌いらしいな。昔に比べたら分ましになったと母さんは言っていたがな。

「はい、最初は戸惑っていましたが、こちらがそれなりの対応をしたら彼女達はすぐに俺の仲間になりました。それからの家での様子に問題はありません」

『そうか。それでその『禍の団』とやら、中々おもしろい奴等が戯れておるではないか。コウモリの首領になり損ねた者と最強の神滅器、さてきて、彼らがこの世界にどの様な影響を及ぼすのか楽しみだ』

戯れているって、まあ、確かに父さんからすれば『禍の団』のメンバーは戯れているようにしか見えないのかもしれないけどな、それなりに危険なものも入ってるんだぞ。

「その『禍の団』には俺も入っているのですが……」

『お主は別だ。お主とコウモリどもの実力を比べては可哀想であろう

？』

露骨に酷い事をさらつと言ったよ。父さんらしいけど。

「そうですか。では、最後にオフィスについてですが」

『オフィスか……以前はオフィスの強力な力に興味があったが、今はそんなのに興味はない。お主のしたい様にしなさい』

俺のしたい様にしているのか。昔の父さんの事を母さんに聞いたんだが、今以上にオフィスの力に興味を持っていたんだよな。それが今は興味がないか。何で父さんは変わったんだろう？……まあいいか。父さんが何で変わったのかは気になるが、それは俺にとつて重要なことじゃないし、いつか父さんにその事を聞けばいいだけのことだ。

「分かりました。以上で定時報告を終了させていただきます」

『うむ、ご苦労。さて、最後に聞いておきたいのだがコウモリの首領の妹との関係はどうだ？以前の報告と変わりはないか？』

「ああ、前に報告した通り親友としての関係を保っている。この関係が悪くなるのは余程のことがない限り起きないだろうな」

報告が終わると、父さんの雰囲気さがつきと同じになった。報告が終わったのに安心した俺は喉が渴いているのに気が付いた。さつき父さんとの電話中にエレナが持ってきてくれた水を飲み始めた。

『そうか、ところでハース、いつになったら彼女ができるのだ？』

吹いた。口の中に入っていた水を盛大に吹いた。それは本当、見事なまでに吹いた。俺でも驚く程に。

「い、いきなり何を言い出すんだよ!？」

『……実はな、私はハースに彼女が出来ていなくて不安なのだよ。今の高校生の殆どは彼女が出来ているものなのだろう？』

どこからそんなことを聞いたんだよ!？」

「父さん、どこからそんなことを聞いたんだ」

『部下の娘から聞いた話だ』

何でだろう、その部下の娘に心当たりがあるぞ。

「はあ、まあいいや。とりあえず父さん、俺に彼女が出来たときは報告するから気にするなよ」

『ふむ、そうか。ならばその時が来るのを楽しみにしておこう。ではな、ハース。母さんにもちやんと連絡するんだぞ』

そして電話が切れた。……しかし驚いたな。まさか父さんがあんなことを聞いてくるなんて。そのせいで水を吹いたじゃないか。後で濡れた服を洗濯するか。

「さて、次は母さんに電話するか」

今度は母さんに電話するために電話番号を打とうとすると、後ろからエレナが声をかけてきた。

「ハース、今から奥様に電話をするのですか？」

「ああ、そうだ。さっきまで父さんと話していたからな、次は母さんに電話しようとしているんだ」

今ごろ母さんは何をしているんだろうか。今の時期、母さんはある取り決めで自分の家に帰っているんだよな。

「実はハースがご自分の部屋にいる間に奥様から電話がありました」

母さんから電話があった？ だったらなんで俺を呼ばなかったんだ？

「どうして俺を呼ばなかったんだ？」

「奥様が呼ばなくてよいと言ったからです」

どうしてだ？ 母さんが俺と話さないのは悪さをしたりとか母さんを怒らせた時ぐらいの筈だが何かしたのか俺は？

「そうか、母さんは何か言っていなかったか？」

「はい、奥さまから伝言を預かっています。自分で犯した失敗は今後の活躍で挽回しなさい、とのことですよ」

……エレナの奴、母さんに俺が会議で何を話したのかを話したな。道理で母さんが俺を呼ばないわけだ。だが……。

「それって逆に母さんが辛いんじゃないか？」

母さんは普段から俺の事を溺愛しているんだよな。そんな母さんが自分から話さないなんて言ったんだ。今頃、後悔してるのかもしれない。

「かもしれないですね。それと、最後にもうひとつだけ伝言があります」
なんだ、まだあったのか。大方、たまには親に顔を見せなさいとで

も言ったんだらうな。言われずとも、夏休みに行く予定だ。

「いつになったら彼女を作るの?とのことです」

全然、違ったぜクショウ。つか、何で父さんと同じことを同じ日に言うんだよ。狙って言っているとしたか思えないぞ!

「……そうか、父さんと同じことを言ったのか。出来たら教えろとだけ伝えておいてくれ。今、俺から伝えることができないからな」

「承りました。ところでハース、伺いたいことがあるのですがいいですか?」

なんだ? エレナの奴、いつにもまして真剣な顔になっているな。何か重要なことでも話すつもりなのか?

「なんだ、エレナ」

「旦那様と奥様のことをミッテルトとカラワーナに話さなくてよいのですか? 彼女達は私達の仲間の証としてペンダントを受け取り、この数日の間にさらに友好を深めました。彼女達にハースのご両親について話してもよいのではないですか?」

なるほど。父さんと母さんのことをミッテルトとカラワーナに話すべきと言うのか。確かにこの数日の間にミッテルトとカラワーナの歓迎パーティーをオーフィスとヴァーリ達も交えて開いたし、オーフィスのことも彼女達に説明したな。

面白かったな、特にオーフィスとヴァーリ達のことを知ったときの反応は。カメラがあつたら写真を撮ってただろうな。

「確かにそうだな。だが、今はまだその事を話すことはできない」

俺の返答が予想外だったのかエレナは驚愕していた。

「何故ですか?! ミッテルトとカラワーナはもう私達の仲間なんですよ! どうして話そうとしないんですか!」

確かに仲間に話さないのはおかしいだろうな。だが、エレナは大事なことを忘れている。

「エレナ、俺の両親が誰なのか知っているだろ」

「知っています。ですが、彼女達に隠し事なんて……」

「エレナ、俺という存在は三大勢力も含めた全勢力の間では最高機密のひとつでそう簡単に話せることじゃないのは知っているだろ。わ

かってくれ」

エレナはその重要性を理解してくれたのか、渋々と小さな声で「わかりました」とだけ言った。その声は震えていて泣くのを我慢しているのがわかる。

本当は俺もこんなことはしたくない。エレナが辛いのもわかってる。すまない、エレナ。

「ああ、それとエレナ。その事とは別のことをミッテルトとカラワーナに話さなきゃいけないから一緒に来てくれ」

この事を話せば、エレナの機嫌も良くなるかもしれないな。

俺はテレビを見ているミッテルトとカラワーナに重要な話があると声をかけた。

「重要な話ってなんすか、ハース」

そうだな、先にミッテルトの方から話すか。

俺はカラワーナにミッテルトのことから話していいか承諾を得てから、話を進めた。

「ミッテルトに、ペンダントとは別のプレゼントがあるんだ。本当は歓迎パーティーの時に渡そうと思ったんだが、渡すタイミングが無くてな、渡すのが遅れた」

剣を入れていたのと同じ空間を開いて、その中からリボンの付いたの箱を取り出し、その箱をミッテルトに渡した。

ミッテルトは箱の中身が何かと聞いてきたが、俺は開ければわかるとだけ言い、箱を開けるのは自分の部屋で開けてくれと言った。

その事に疑問を抱いたミッテルトはどうすればいいのかエレナを見ていた。俺はエレナにミッテルトと一緒に部屋に行つて手伝うように言った。

エレナは「わかりました」と言い、ミッテルトと一緒に二階の部屋に上つて行つた。

さて、次はカラワーナか。彼女にもプレゼントがあるんだ。俺はカラワーナに声を掛けてからさっきミッテルトに渡したのと同じ箱を空間から取りだし、カラワーナに渡した。

箱を受け取ったカラワーナは「私も自分の部屋に行つたほうがいい

のか？」と聞いてきたが、俺はその必要はないと言った。ミツテルトの場合はそうしないといけない理由があったからな。

カラワーナがその事を聞くと箱の蓋を開けた。箱の中身を見たカラワーナは驚いたのか俺の顔と箱の中身を交互に見ていた。彼女に渡した箱の中身はカラワーナの髪の毛と同じ色のエプロンだ。

「何故、私にエプロンをプレゼントしたんだ？」

「それはな、明日からエレナの代わりに家の家事をしてほしいと思っただからだ」

実は、エレナはこの家の家事を殆ど一人で執り行っているんだ。毎日が大変だということは知っているが、代わりに家事をやってもエレナ程の家事スキルを持っていない俺達じゃ足手まといにしかならなかった。

だが、ここ数日の間のカラワーナの様子を見ていたが、どうやらカラワーナはエレナ以上の家事スキルを持っていることがわかった。

カラワーナなら、この家の家事を任せられると思ったからエプロンを渡したんだ。

「そうか、確かに私は家事が得意だ。というより、大好きだ。本当に私に家事を任せてくれるんだな」

カラワーナが目を輝かせて詰め寄ってきた。カラワーナが俺の目の前に来ると女性特有の良い匂いがして一瞬だけドキツとしてしまった。

「も、もちろんだ。エレナに負担をかけない為にも頑張ってくれ」

「わかった。私に家事を任せてくれてありがとう」

俺は、カラワーナにエプロンを着るように言うと、カラワーナは箱からエプロンを取りだしてエプロンを着てくれた。

カラワーナがエプロンを着たのと同時に二階からエレナとミツテルトが降りてきた。エレナはリビングに入ってきたが、ミツテルトは抵抗があるのか、リビングに入ってこようとしない。エレナがミツテルト手を引っ張ってリビングに連れてきた。

「ハ、ハース、この服は一体なんすか？」

今、ミツテルトが着ているのは、駒王学園の制服だ。見たところサ

イズもピッタリみたいだ。エレナと同じサイズを選んで正解のようだな。

「それは駒王学園の制服だ。ミッテルトには明日から二年生として駒王学園に通ってもらおうぞ。ちなみに編入手続きは勝手に済ませておいた」

「え、いつの間にそんなことしてたんすか!?!」

「歓迎パーティーをした次の日に決まってるじゃないか」

編入試験?細かいことは気にするな!権力はこのときに使うものだ!

「えっと、うちは明日からエレナと一緒に学園に行っても良いってことすか、ハース?」

「そうだ。ミッテルトが学園に行きたがっていたのはエレナに聞いていたからな。エレナ、明日からミッテルトはクラスメイトになるから学園にいる間は任せろ」

リビングを出る前にエレナの肩に手を乗せてから自分の部屋に戻った。今日するべきことは全部やったな。夜の十一時か、明日に備えて寝るとしよう。

月光校庭のエクスカリバー

Life・12 動きだすモノ

シャルバとの決闘に勝利したことによって俺の『禍の団』での立ち位置が決まった。

それはオーフィスに次ぐNo.2だった。

我こそが上に立つべき存在だと主張していたシャルバは俺との戦いで惨敗、そのせいで旧魔王派の立場は地に落ち、それにより旧魔王派に属していた魔法使いたちの多くが旧魔王派より離脱、旧魔王派の勢力は激減し、しばらくの間は活動ができなくなっていた。

喧嘩を売る相手を間違えたコウモリどもが悪い。喧嘩の原因？覚えてないな。そんなこと、一々覚えてられるか。

俺に負けたシャルバを含むコウモリどもは会議の場に顔を出さなくなりやがった。人間に負けた事実が奴等のプライドをボロボロに砕いたんだ、簡単に顔出しながらできる筈もないか。

貴様のような人間ごとき、私の足下にも及ばん！なんて言ったわりには、呆気なく負けたもんな。

恥ずかしすぎて穴蔵に潜っているんだろう。アア、あんな連中の姿はなんて素晴らしいんだ。愉快で爽快で痛快で快哉で、なにより愉悅に浸る瞬間は最っ高の気分だ。

雑魚を倒した時より遙かに気分が良い。病み付きになりそうだ。

……いつからこんなことを考えるようになった。

俺よりも高みにいた者を初めて倒した時からか。

地獄の様な修行の過程で精神がイカれたからか。

過去に大切なモノを失ったせいなのか。

あるいはそのすべてが原因なのかもしれない。

なにがきっかけでそんな風に人を狂わせるか分からない。人は脆くて儂い生き物だからな。

なんて、変なことを考えてみたが、それは個人の考えだし気にすることもないな。

次の話に移ろう。

シャルバに勝ち、一つの事故を片付けることに成功した今、穏やかな日々を送っていた。

悪魔狩りをたまにこなし、エレナや真記、ミッテルトにカラワーナと不自由のない生活を満喫していた。

ああ、それでミッテルトたちなんだが、俺の家に暮らす様になって、料理と洗濯物の量が増え、家事が今まで以上に大変になっている。………というのをエレナから聞いた。

住人が増えるとそういったことが大変になるのは仕方のないことだ。それに、いずれ慣れるだろうから大丈夫のはずだ。

さて、少し話が逸れたが、ミッテルト達が暮らし始めたことによつて俺の日常生活が変わった。なぜ俺の日常生活が変わったのかと言うと、俺が彼女たちの修行を指導しているからだ。

彼女たちの潜在能力はたしかに高いが、彼女たちの今の戦闘能力は見るに耐えない物だ。どれくらいかと言われれば、俺が今まで戦ってきた奴らの中でも下の下か良くて下の中と言ったところだな。

力の無いまま俺の傍に居続けければ、いつ死んでもおかしくない。そこで俺は彼女たちの実力を向上させるために今までの生活リズムを変えて彼女たちを鍛えることにしたんだ。

もちろん、彼女たちの承諾を得てから修行を始めたさ。俺の勝手に修行を始めるのは迷惑になるからな。

承諾を得た次の日からミッテルト達には俺が普段から使っている訓練所で実力をつけてもらうことにした。最初のころは基礎訓練と筋トレをしてもらった。

基礎訓練と筋トレをほぼ毎日続けたこともあつて戦闘に不可欠な要素つまり、体力や反射神経とかのことだ。それを短い間だが、上級悪魔とサシで戦い続けられるだけの能力を身に付けさせた。

そしてその能力を身に付けたミッテルトとカラワーナはというと

「隙だらけつすよ、ハースッ!!」

基礎訓練の時間を減らして俺を敵と仮定した実戦訓練をしている。

ミッテルトが上空から投擲してきた光の槍を躲すと後ろから光の剣を片手にカラワーナが斬りかかってくる。

まだ直すべき点はいくつもあるが、初めて会った日に比べると動きと連携がかなりよくなってるな。期待通りで安心した。この勢いで成長し続ければ、次の段階の訓練に進んでも良さそうだ。

つと、そろそろ切り上げた方が良さそうだ。ミッテルト達も体が慣れてきた頃だろうが、朝の訓練はこのくらいしておくか。時間的にここで切り上げないと学校に遅刻するからな。

「朝練はここまでだ、汗を流してこい」

「ええっ!? これからがいいところだったのに、そりやないっすよ、ハースウ」

「そう言うな、ミッテルト。この後は学校もあるんだ。いいタイミングで切ってくれたと思うが?」

カラワーナが不完全燃焼のミッテルトをなだめながら地面に降りてきた。いつもながら上手くミッテルトをなだめているなカラワーナは。

「二人とも汗を流したらリビングに行つて飯を先に食べてろ。特にミッテルト、お前は髪の毛をしっかりと乾かしてからリビングに行くんだぞ。風邪をひいたらみんなが心配するからな。それと学校の支度は昨日のうちに終わらせたか? 終わつてないなら飯を食べる前にしておけよ。ああ、あとほかにも——」

「わかつてるすよ、ハース! というかハースはうちの母親のつもりっすか!? それくらいもう自分で出来るっすよ!!」

「む、そうか、なら良い。ほら、早く汗を流さないと風邪をひくぞ」

もう、わかつてるすよーと言いながらミッテルトとカラワーナは訓練所から出て行った。

母親のつもり……か。俺は兄のつもりで接しているんだが、なにか間違っているところでもあるのか? 違いが分からん。

ま、そんなことは些細なことだし気にしなくていいか。大切に想っていることに変わりはないんだからな。

さて、俺もなんだかんだで汗をかいたし、シャワーを浴びてくると

するか。

シャワーを浴びた後、家で支度を終えた俺は一人で学校に登校した。

最近は一人で登下校するようになっていた。なんせ、エレナとミツテルトが二人で先に行くようになったからな。

あの二人は年が同じで話がしやすいからなのか、本当に仲が良いな。少し嫉妬しちまうよ。

だが、まあ、そうだな。友達と一緒に登下校するのは楽しいだろうからとやかく言うつもりもないし、たまには一人でいるのも悪くはない。

さて、今日の授業も終わったことだし、帰るとするか。帰り道はどうするか……………。シュークリームを買って帰るか。

そんないつもと変わらないことを考えながら帰り道を歩いていると、携帯から着信音が鳴り出した。

この着信音、父さんからか。

「こんな時間に電話なんて珍しいな、父さん」

『フアフアフア。ただの気まぐれよ、気にするでない。それより、ハースに伝えなければならん重要なことがある』
伝えなければならんこと？

『カラスの幹部、コカビエルがその町に潜伏していることがわかった』
その名を聞いた瞬間、その場で立ちすくんだ。

「……………いま、コカビエルって言ったか？」

まさか、やつがこの町に潜伏していると？

『然り。部下に何度も確認をとらせたが間違いないようじゃ』
『本当にやつなのか？嘘ではなく本当に…………』

『本当だとも。ワシが息子であるお主に嘘をついてどうする？』

「そうか、そうだよな…………ハハッ」

コカビエルがこの町に…………。ようやくか。ようやく、やつに会える

のか。

「父さん、俺の好きなように行動していいか？」

『良いぞ、あのカラスはハースだけでなく、我等が神話全ての敵じゃ。あの時は訳あって許しはしたが、今回もあの時と同じ様なことが起きたらそんなものは気にせず好きにするがよい。我が許す』

今の発言で活動方針は決まった。あとは行動に移すだけだ。

「ありがとう、父さん。なにかあったら連絡するよ」

『うむ、コカビエルごときでは、今のハースの足元にも及ばぬであろうが、油断だけはするでないぞ』

「もちろん、そのつもりだ。それじゃ」

電話を切る。そこからの行動は速く、コカビエルがこの町の何処に潜伏し何をしているか、情報を集める為に親衛隊を使った。

親衛隊長いわく、一日以内にコカビエルと墮天使勢力の動き、その他すべての情報をまとめると言っていた。

なら、俺はコカビエルとの殺し合いに備えるところでしょう。油断も隙も慢心もなく、確実に奴を殺すためだけに。



「はい、抜かりはありません……ええ、もちろんです。私が彼の元にいるのはレイナーレとドーナシークの仇を討つためだけです。それ以外の理由はありません。……ミッテルトですか？彼女はついです。彼女もいたほうが近づきやすかったです。……はい、彼女が邪魔をしたとしてもなんの問題もありません。……はい、レイナーレ達の仇を討てるのなら、不祥ながらこの身を全て捧げる所存にございます。」

「コカビエル様」



しまった、シユークリーム買ってくるの忘れてた。来た道に戻って
買ってこよう。

翌朝、コカビエルの動向に関しての情報が届いた。

まずは墮天使勢力。墮天使の中でも屈指の実力を誇るコカビエルに対して、生半可な実力者を送っても返り討ちにあうと判断した上層部は、白龍皇を差し向けることにしたようだ。

俺は妥当な判断だと思う。白龍皇、ヴァーリならコカビエルに遅れをとることはないからだ。

それだけの実力をヴァーリは備えている。あいつなら簡単に事を片付けられるだろう。あいつとサシで戦った俺が言うんだ。間違いない。

次に天界勢力だ。これは思い付きもしないことだ。コカビエルは聖剣エクスカリバーを強奪していた。

なぜエクスカリバーを強奪したのかはまだ分かっていないがこれには流石に驚いた。エクスカリバーは折れて、七つの剣に作り直されたとしても、その威力は絶大で、天界が持つ聖剣の中でも強力な武器だという事実是不変ならない。

天界はエクスカリバーを悪用される前に回収、あるいはその破壊を命じたエージェントを送り、近いうちに駒王町に到着するようだ。

たぶんどこかで偶然、鉢合わせするかもしれない。そこでそいつらと協力関係を結ぼうと思っている。エクスカリバー回収を任されたエージェントなんだ。話のわかる相手だと、信じている。

そして次に悪魔勢力だが、ハッキリ言って呆れた。この事を知っているコウモリは一人もいない。魔王どもはなにかが起きていることに感付いてはいるが、確証がないため動いてすらいない。

何をやっているんだ、こいつらは。なぜ町の管理者のグレモリーすら気付かないんだ。恐らく大分前からコカビエルはこの町に潜伏していた。

それに気付かなかった俺にも落ち度はあるが、管理者が気付かないのは大問題だ。

いや、むしろ以前の墮天使騒動の時もあれだけの人数がいたにも関わらず気付かなかったんだ。当然だと納得してしまうな。

残念だがグレモリーはその程度だったんだ。魔王の妹だと過大評価し過ぎていたみたいだな。

まったく嘆かわしい。自分に反吐がでる。ああ、ああ、イライラするな、クソがつ!!

まあいい。もうしばらくの間は仲良くしてやろう。あれはあれで面白いからな。特に赤龍帝は。

さて、悪魔勢力はこんなもので、他の神話に動きはない。この騒動は彼らにとつて関係がないからな。

資料に纏められた内容を簡潔に見るとこんな感じだったな。

さて、肝心のコカビエルだが、今は部下に索敵を任せている。事を起こすとしたら夜しかないな。それまでにこの町の至る所を探し、見つけ出して殺す。

それまではいつも通り、学園生活に勤しんでおくでしょう。



そして昼休みになるが――

「なんで俺がこんなところに連れてこられなきゃいけないんだ」

「別にいいじゃない。減るものでもないでしょ」

「まだ昼飯食ってないんだよ」

「後で何か奢るからそれで我慢してちょうだい」

「よし、わかった。デラックスカレーパン5つで手を打とう」

「……………あなたって、たまにがめついわよね」

「貰える物があったら遠慮なく貰ってるだけだ」

グレモリーと姫島に無理矢理オカルト研究部に連れてこられていた。

放課後に連れてこられるならならまだ良かったさ。だがな、昼休みはダメだ。飯が食えないじゃないか。授業中に腹が鳴ったらどうするつもりなんだ。

「それで、なんであんたもここにいるんだ」

俺の向かいにあるソファで優雅に紅茶を飲んでいる眼鏡をかけた美少女に声をかける。

「今日は普段の活動報告を聞きに来たのと、お互いの新しい眷属を紹介しに来たんです」

なるほど。新人の同士の顔合わせをしに来たのか。

「リアス、お前が俺を連れてきたのもそれが理由か」

その質問にグレモリーはイエスと答えた。グレモリー眷属の面々は把握しているが、シトリー眷属の新入りに会ったことはないな。

「シトリー眷属の新人と顔合わせが済んだら戻ってもいいんだな？」

「ええ。私があなただをここに連れてきたのもそのためだもの」

それで連れてきたのか。面倒なことを頼まれるのかと思ってたが、別にそれだけなら問題ないな。だが、飯を食っていないのと、ここまでの道中に色んな生徒に睨まれたせいで機嫌が悪いんだ。後でデラックスカレーパン奢れよ。それでチャラだ。

「だからあんたが来ているのか。駒王学園生徒会会長の支取蒼那、いや、この場ではシトリー家次期当主ソーナ・シトリーとでも呼んだほうがいいか？」

「いつも“会長さん”と呼んでいるのに、なぜ今その名前で呼ぶんですか。何か意図でもあるのですか？」

「別に、大したことでもないさ。ただ、ここに居るのは悪魔ばかりだ。本名で呼んでも問題ないと判断しただけだ。それに、会長になる前は支取で呼んでたろ？」

「そうでしたね。会長さんと呼ばれていたのに馴れていたのかすつかり忘れていました。でしたら、この場でぐらいなら名前で呼んで構いません」

「なら遠慮なくそう呼ばせてもらうぜ、蒼那」

ボッ！と急に下の名前を聞いたせいとか、支取は顔を赤くした。蒼那、なんて呼んだことなかったからな、耐性がなかったんだろ。普段の彼女の立ち振舞いを知っている人が見れば可愛いって言うな。俺は弄り甲斐があると思ってる。

「会長に何をしているんだ!!」

「こいつは最近生徒会の書記になった奴だったかな。名前はえつと……。」

「匙・ク○ス○ードだったか」

「匙元士郎だっ!!名前を間違えるな!!」

そうだった。そんな名前だったな。某ロボットアニメに似た名前のキャラがいたんでな、そいつと間違えた。

「すまなかつたな、ダンガム・匙・ク○ス○ード。今度からは気を付けよう」

「気を付けるつもりないだろ!?匙元士郎だっ!!ダンガムでもク○ス○ードでもない!!」

「お前はダンガムではないのか!?!」

「違う!!俺は匙元士郎だっ!!」

「いいや、ダンガムだ!」

「俺は匙元士郎だっ!!」

「ダンガムっ!」

「匙元士郎っ!」

「ダンガムっ!」

「匙元士郎っ!」

「お前は——」

「俺は——」

「ダンガムツ!!」

「匙元士郎だーッ!!」

「いい加減そこまでしておきなさい」

支取の呼び止めが入ったので漫才を止めた。もうさっきの最後だから意味は無いんだがな。

「ノリが良くて面白かったぞ。匙元士郎くん」

「いえ、先輩ほどの有名人と仲良くできたんで俺としても面白い経験ができましたよ」

へえ、嬉しいことを言うね。こういう気遣いのできる後輩とは仲良くやっていけそうだ。

親睦の証に右手を差し出す。

「知っているとは思うが、ハース・ベスタードだ。よろしく。それで、君のことはなんて呼べば言いかな？」

「(こちら)そよろしくお願ひします。皆にはサジって言われてるんでそう呼んで下さい」

サジね、今日からそう呼ばせてもらおう。

お互いに握手をする。

ツ!?この波動は……なるほど。こいつにも龍が宿っているのか。まったく、この町はどうなっているんだ。龍を宿した神器所有者はこれで四人目だぞ。龍の溜まり場か此処は。

コカビエルの騒動を片付けたとしても絶対なにかが起こる気がするな、この町で。

その時の中心にサジが関わるかどうかは今後の動き次第だな。

さて、顔合わせもしたことだしもういいだろ。

「教室に戻ってるぞ」

「ええ、わかったわ。近いうちにデラックスカレーパンを奢るわ」

「ああ、楽しみにしている」

姫島が入れた紅茶を飲み尽くし、ソファから立ち上がって部室から出た。



放課後、特に予定もなかった俺は帰ろうと校門を出るが、近くに親衛隊長の気配がするのに気が付き、すぐに足を止めた。

「コカビエルを見つけたか」

(申し訳ありません。駒王町全域を徹底的に搜索したのですが、姿どころか痕跡すら見つかりませんでした)

「お前らは精鋭の筈なのに何をしているんだ。1日で見つけ出すと言っていただろうが!」

(言い訳のしようもありません。ですが、それには理由があります)

「ほう、どんな理由だ?」

(痕跡がなにもないので。それはあまりにも可笑しすぎるのです。

まるで私達が来るのを知っているのかと思える程に)

「つまりお前は我々の中に内通者がいると言いたいだな」

(はい。そしてその内通者が誰なのかも憶測ではありませんが、検討がついています)

「そうか。それで、誰だ、その内通者は」

(失礼を承知で申し上げますと、ハース様が気にかけて墮天使のカラワーナだと私達は睨んでいます)

「……………そうか。カラワーナが内通者だという証拠は拳がっているのか?」

(まだ証拠はありません。ハース様の許可さえあればいつでも監視をします。いかがいたしますか?)

……………コカビエルの足取りが掴めるのなら監視もやむを得ないか。

「不本意だが、カラワーナに気付かれないように監視を付けることを許す。証拠が拳がったら真つ先に俺に知らせろ。いいな。それと駒王町だけでなく隣町にも捜索隊を向かわせろ。人手が足りなければ、人員を増やせ。奴を見つげるためなら、どんなことをしてもいい。確実に見つけ出せ」

(御意。それとコウモリについてなのですがよろしいですか)

「ああ。あいつらがどうした」

(平和ボケしているようなやつらですが、多少はコカビエル探索に役立つのではないでしょうか)

「あいつらにコカビエルが潜伏していることを話せと? そう言いたいのか」

(不本意ではありませんが、そうです)

平和ボケしていると言っている時点でこいつも分かりきっているのだろうが、グレモリー達が下手に動くとかえって足手まといになる。

「くだらん。コカビエルが潜伏していることにも気づいていない様な管理者がなんの役に立つ? 精々はぐれと——いや、待てよ」

(ハース様? いかがいたしましたか?)

はぐれ、はぐれ、なにかが引つ掛かるな。そう、あの時、教会の地

下に集まっていたはぐれ神父たちを始末した後、イツセーたちと合流したら――

「グレモリー眷属、シトリー眷属全員を監視対象にしろ。今すぐに」
(何かコカビエルへと繋がる心当たりでも)

「以前に雑魚墮天使が起こした騒動の時に一人だけ生き延びたはぐれ神父がいる。もしかしたらそいつがコウモリどもに接触するかもしれない」

(そのはぐれがコカビエルと繋がっている可能性があると言うのですか)

「そうだ。あくまで、かもしれないに過ぎないが、もしもの事を考えれば、打てる手は打っておいた方がいい」

(わかりました。早速、監視の者を付けさせます)

「頼んだぞ。コカビエルは確実に殺さなければならん怨敵だ。失敗は許さん、どんな小さな事でも見逃すなよ、いいな」

(御意。我が父の名誉に懸けて、必ずコカビエルを見つけ出します。では)

行ったか。相も変わらず、仕事が早いな。

悪いがグレモリー、お前たちを利用してもらうぞ。これも怨敵を見つけるためだ。許せとは言わん。

しかし、カラワーナが内通者……か。彼女が内通者かもしれないと思うと辛い、よく考えてみればその可能性はかなり高いな。仲間に誘った時、カラワーナたちはその日の内に仲間になっている。前の仲間を全員殺されているのだ。

なんでそこで違和感を感じなかったんだ。普通に考えればその日の内に仲間になるなんて、余程の目的でもない限りあり得ない。

カラワーナは最初からコカビエルに俺の事を報告するために潜り込んだのかもしれない。

ならミッテルトは？彼女もカラワーナと同じ目的なのか？……いや、考えにくい。ミッテルトはエレナと四六時中ずっと傍にいるんだ。

飯を食べるときも、寝るときも、登校するときも、ずっと一緒にい

るんだ。どうしても、ミッテルトまでも内通者だとは思えない。

…………一か八かの賭けをするか。

それで彼女の白黒が決まる。内通者かどうかを聞くのに警戒せず話せるのはエレナしかない。

家に着いたら早速エレナに頼むとしよう。それが一番の筈だ。

あー、けどなー、それが原因でエレナとかに嫌われたらどうしよう。話しかけづらくなるなー。やっぱり止めとくか、いや、ここで諦めて取り返しのつかないことになっても不味いしな、いやいや、エレナに嫌われたらと思うと迷うな。どうするよ、俺。

なんかどうでもいいように重要そうなことに深く悩みすぎているせいで、隣を通りすぎていく白いマントにフードで顔を隠した二人の存在に気付くのが一瞬遅れた。

今の二人…………教会のエージェントか。話しかけるか?…………やめておこう。話しかけるタイミングを逃したんだ。今話しかけたとしても警戒されるだけだ。ここは諦めて、次の機会を伺うとしよう。「それにしてもあのエージェント、どこかで…………まさかな」

「どうしたの?急に立ち止まっちゃったりして」

「ん?いや、今すれ違った男、どこかで見た気がしたんだ」

「そお?私は見覚えがなかったわよ」

「だったら気のせいだ。すまない、イリナ」

「べつに気にしてないわよ、ゼノヴィア。さっ、速く私の幼なじみに会いに行きましょう」